特63
614

學生文庫

第九編

心學道話

大町桂月校訂

東京至誠堂發兌

明治
44.9.7
圖書

學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育には、力めて多く古典を課すと。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れずと。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に瞠若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。卽ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危險なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。淸き娯樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を讀め。書に讀まるゝこと莫れ。

大町桂月

心學道話に寃す

われ十二三歳の頃、都下の番町小學校に學びけるが、一日學校に、數名の講師來りて心學の講演をなしたることだけは、今も猶忘れず。其講師の中に谷將軍の加はり居りしことは、明かに記憶す。其谷將軍が何事を語りたるかも忘れたれど、西南戰爭終りて間もなき事也。谷將軍の名は、西鄕隆盛に次いで有名也。その谷將軍の顏を見るといふことが、何よりも余等の好奇心を惹きたりき。而して谷將軍の如き偉人の信ずる心學の事なれば、立派なる教なるべしと思ひ込みたりき。然るに其後道話を聽くの機會に接せず。年長じて、心學の書を讀みかじりて、略、其何たるかを知りぬ。心學とは、神・儒・佛を打して一丸となし、人の性を知りて善にもどり、善を實行するを目的とする一種の教也。其說き方、平易にして面白く、何

人も了解するを得べく、徳川時代の末には、ひろく海内に行はれたりき。今も京畿地方には、其學を繼承し、其説を實行する者多く、東京にも行はれ居る也。されど、其學に於て、特別の儀式なども無きを以て、世人多く之を知らず。川尻寶岑翁の如きは、東京に於ける斯道の大家なりしが、去年の夏、箱根の洪水に溺死したり。惜むべき也。

心學は石田梅巖之を創め、手島堵庵、脇坂義堂、柴田鳩翁など相次いで出でて、之を弘めたるが、町人、百姓など、教育の低きものを相手とし、婦女、兒童にもわかるやうに力め、成るべく卑俚の語を用ゐたり。其講演を道話と名づく。其道話の筆記せられて、世に傳はるもの多し。今其中より脇坂義堂の實卜先生安樂傳授、福相になるの傳授、銀のなる木の傳授、和合長久の傳授、長命になるの傳授、柴田鳩翁の鳩翁道話を擇びて、茲に之を收めたり。これらは、道話中の傑作として著名なるもの也。文また精妙をきはむ。義堂は京都の人、通稱は庄兵衛、堵庵に就いて心學を修め、

居常之が實行を期す。貧を賑はし、窮を濟ひ、世の爲めに盡して倦まず。嘗て上書して大津街道を修理し、又蹴揚の山中に石燈數基を建てゝ、夜行劫盜の患を除きたりき。性、至孝、恒に母の遺愛の布袋像を几邊に置きといふ。あつめ草、忍徳教等、著書多し。鳩翁も京都の人也。名は享、一に惟敬、字は陽方、通稱謙藏、剃髪して鳩翁と稱す。中年にして明を失へり。諸國を遊歴して心學を講じ、其道に歸する者極めて多し。天保十年五月三日歿す。年五十七。道話は其子武修の筆記せる者也。

元祖梅巖翁の事は、門人の著せる石田先生事蹟に精しく記されたり。今、其中より大要を摘記せむに、梅巖名は興長、通稱を勘平といふ。父の名は淨心、母は角氏の女なり。貞享二年九月十五日、丹波桑田郡東縣村に生る。獨身に一生を送り、延享元年九月二十三日、病死す。年六十、京都の東南鳥邊山に葬る。人となり正道にして、材もまた世の常に越えたり。父の教育も正しかりき。二十三歳の頃、京都の商人の家に奉公して

忠實に事へたり。初めは神道に志したり。三十五六歳の頃、了雲を師として其教を受けたり。終に自己の性を知るを得たり。奉公を退きてより諸家の講釋を聞き、四十五歳の時、車屋町通御池上る所東側に居をトして講席をひらけり。初は聽衆わづか數人に過ぎざりしが、追ひ〳〵增加し、門人も出來たり。京都にても諸處に講席を設け、大坂、河內、和泉などへも出講せり。梅巖の常に說きしは、四書、孝經、小學、易經、詩經、大極圖說、近思錄、性理字義、老子、莊子、和論語、徒然草等也。平常、朝は未明に起きて手水し、戸を開き、室內を掃除し、袴羽織を著し、手水して新に燈を獻じ、先づ天照皇太神宮を拜し奉り、竈の神を拜し、故鄕の氏神を拜し、大聖文宣王(孔子)を拜し、彌陀釋迦佛を拜し、師を拜し、祖先父母等を拜し、それより食に向ひて一々頂戴し、食し終りて口すゝぎ、しばらく休息して講釋を始む。暮方にも又掃除し、手水し、燈を獻じ、朝の如くに拜す。敎へて倦まず。晝夜事繁きが、隙さへあれば、書を讀む。をり〳〵持病によ

りて睡を催すことあり。其時は、そのまゝ座を起ち、掃除などし、睡さめぬれば、掃除をさし置き、又机によりて書を讀む。夏の短夜にも、門人歸りて後、なほ書を讀みて、子の刻より前に寢ねず。冬の夜は大かた丑の刻まで讀書す。自炊しけるを、門人憂ひて、下男一人使ひ給はるべしと勸む。それは却つて我が勞になれば、無用といふを、門人强ひて勸めければ、拒まずしてつかふ。其男、常に出步き、留守の役にさへ立たぬものなるに、其事を一言も出さずしてつかふ。門人之を知りて、此男を追ひ出し、他の下男を入れけるに、この者柔和なれども、鈍き者にて、我帶さへ得せざれば、梅巖結びてやる。寒中に兩足とも垢切れにて痛みければ、梅巖いたましく思ひて、そくひてやるべしと云ひければ、そのまゝ兩足をのべて、そくはす。この男も梅巖の勞になれば、門人又是も退け、其後は梅巖の意に任かせ、生涯自炊して暮せり。梅巖讀書するに、近所のいたづら小童、たはぶれに外より案內を乞へば、答して出づ。小童之を笑ひ、走りかくれて、

また來り、前の如くすれば、梅巖もまた始の如く答して出づ。道を往來するに、夏は蔭を人に讓り、自からは日あたりを歩き、冬は日あたりを人に讓り、自からは蔭を歩む。常に門人に向ひて、自己の性を知るべき由を說けども、之を信ずるもの二三人なりしが、中にも齋藤全門深く信じ、日夜如何と工夫をこらしけるに、ある夜、ふと太鼓の音を聞いて性を知れり。木村重光も初より篤く信じけるゆゑ、年月をかさね、工夫熟せしにや。或冬障子を張り居て、頓に自己の性を知り、大に喜びて梅巖の許に至り、自から得る處を呈す。

はつと云うてうんと云うたら是はさて

はれやれこれはこれはさて〳〵

梅巖之に性を知ることを許せり。これより門人信を起し、工夫に心を盡して性を知るもの多くなれり。門人の性を知れる者に告げて曰く、學は爲すところ、義か不義かと顧みて義にしたがふのみ。義を積まずして性を養ふことは、聖人の道には無きことなりと。一禪尼講席に來り居りけるが、ある年、大和巡して、女の參るまじき所へ參り、道の記など持ち來り、梅巖に見せければ、其席にて再び來ること勿れとて退けたり。著書二部あり。曰く、都鄙問答、曰く、齊家論、是れ也。

以上は梅巖の性行のあらましなるが、その中に自から聖賢の佛あるを見る。人或は曰く、心學は敎育低き者を相手として說きたるものなり。今の高等敎育をうけたる者は讀むに足らずと。これ大間違也。人の道豈に貴賤あらんや。殊に今の高等敎育をうけたるもの、唯知識ありて德性の涵養は缺如たり。德行却つて無學の人に劣るものなしとせず。心學讀むに足らずなどい言はれた沙汰にあらざる也。人或は曰く、心學は德川太平の世に道を說きたるもの也。今の競爭烈しき文明の世には迂遠なりと。余曰く、然らず。競爭烈しきにつれて人心の墮落も益甚し。今の世却つて益心學の必要を見る也。

鳩翁道話の中に、面白き譬あり。或人死して極樂に行きけるに、きくらげの乾物の如きもの、澤山重れるを見る。これは、きくらげかと問へば、菩薩曰く、否、人間の耳也。娑婆にて常に善き事を聞き、成る程〳〵と感心はすれど、一向之を身に行はず。かゝる人は死して耳のみが極樂に來れるなりと。又かずのこの如きもの、澤山重れるを見る。これは、かずのこかと問へば、曰く、否、人間の舌也。善きことを口には說けど、一向之を身に行はず。かゝる人は、舌だけが極樂に來れるなりと。われらも舌の乾物となるべからずと、鳩翁自からも戒めたり。世の心學道話を聽かむもの、耳の乾物となるべけんや。

大町桂月

心學道話目次

資卜先生安樂傳授　上の卷……一
資卜先生安樂傳授　中の卷……一四
資卜先生安樂傳授　下の卷……二五
銀のなる木の傳授……四三
開運出世傳授　上の卷……五一
開運出世傳授　下の卷……六七
福相になるの傳授……八一
和合長久の傳授……九五
長命になるの傳授　卷の上……一〇七
長命になるの傳授　卷の下……一一六
鳩翁道話　壹の上……一二五
鳩翁道話　壹の下……一三八
鳩翁道話　貳の上……一五二
鳩翁道話　貳の下……一六四
鳩翁道話　參の上……一七八
鳩翁道話　參の下……一九一
續鳩翁道話　壹の上……二〇三
續鳩翁道話　壹の下……二一八
續鳩翁道話　貳の上……二三四
續鳩翁道話　貳の下……二四九
續鳩翁道話　參の上……二六三
續鳩翁道話　參の下……二七五

心學道話目次　終

心學道話

賣卜先生安樂傳授　上の卷

大町桂月校訂

賣卜先生、一日、巷の外に看板を出し、諸人安樂傳授所と大字に書して、往還の人に知らしめければ、欲に目のない世界の常にて、我も〳〵とつどひ來りて、傳授を願ふ。其中にも、先づ一番に進み出でたるチョンがレ坊主、我慢の錫杖ふり立て〳〵、ヤレ〳〵先生聞いても吳んない。我等が事は、御存知の問々に立つチョンがレなるが、時節がわるうて、いづくも〳〵くれない故に、蓄ふる衣の破れかぶれと、正根を居ても、さながら坊主の盜もならず、朝から晩まで錫杖の、じやら〳〵いうてはあるけども、一つの口さへようふさがぬは、銅羅迦如來にも見はなされたかと、かなしう存じます。我等がやうに、元手いらずにたゞ貰うてさへ、引合はぬとは、よく〳〵わるい世界に成つたと見えます。かやうな、からい世界に生れ出でましても、安樂を得る御傳授候は

ば、御敎へたまはるべし。

傳授先生、おかしさにクッ〳〵笑うて曰く、只もらうてさへ引合はぬとは、成程々々むつかしい時節とみゆる。先づ汝が心に、望の通りの結構な世界といふは、どのやうな世界ぞ。すこしもつゝまずありていにいうて見やれ。

チヨンがレ坊主答へて曰く、我望む通りの世界をいはゞ、チヨンがレを一度はなせば、錢の矢先、雨やの霰と二朱や一歩がふりかゝつて、鬼神のやうな親父でも、酒を飲まぬか、食を喰やれとすゝめてくれて、色もよく利き、欲と徳とは望みのまゝにて、主や親なれば自由にまはし、我等が心に入らぬ小面倒な奴ばらは、殺してしまうても御かまひのなき世界ならば、これに過ぎたる有りがたき世は、ござりませぬと、ぞんじます。

先生うなづき、汝近く予が前へ來るべし。汝が今いひしのぞみの世界となしてあたふべし。

チヨンがレ坊主大に歡び、翁の前に進み寄る。

先生、手早くチヨンがレが襟首取つて、急に〆あげ、既に引きしめ殺さんとせられしかば、チヨンがレ坊主あわて叫びて曰く、何とて我をころしたまふ。先生命をゆるしたまへ。ゆるしたまへ。

先生、大に怒りて曰く、予汝を苦しめるにあらず。今汝が願ひし、望みのまゝの世界に至らしめんが爲なり。是ないかにといふに、只今、汝がいふを聞けば、己が心に叶はず、氣に入らぬ者は、勝手次第に殺しても、御かまひなき世界ならば、結構な世界なりと望みしにあらずや。然れば汝が如き斎生は、翁がこゝろに入らぬゆゑに、勝手次第に汝を殺すなり。さすれば汝が、望むまゝの世界に成りたりと、いふものなれば、汝、歡びて快く往生すべし。

チヨンがレ坊主、涙を流して曰く、ゆるし給へ。實に過ちたり〳〵。我人を殺す事勝手なる世界ならば、人また我を殺す事、勝手のまゝなり。我主親を自由にする事、まゝなる世界ならば、我子や我家來が、又我をつらくする事自由なり。我れ盜をしても、大事なき世界ならば、人もまた我も盜み取る事、大事なき世界にて、少しもゆだんならず。明暮修羅のちまたにて、高枕は扨置き石枕もならぬ難儀な世界にて、我等がやうな、士農工商はづれたる、何にも角にも生醉の、酒より外の藝なし坊は、生けおくものはあるまいに、有難い結構な、今の御代に生れ出で、口さへはたらかせば、命を繋ぐ自由さに、附けあがり、不足が出て此仕合せ、今の今まで此世界を、わるい世界と苦しみましたが、今先生の手早き御敎へにて、たちまち爰が安樂世界、十分足る事知りまして、先

生の御教への安樂の御傳授、とくと合點をいたしました。

先生坊主を、突飛して曰く、汝に限らず、すべて世の人有りがたき御代に生れて、飢ゑず寒えず、世を渡る結構のあまりに、さま〴〵の不足をおこし、己一人に利せんとして、思ふやうにならず、身勝手にあはれば、時節を恨み、人を恨んで身を苦しめるこそおろかなれ。此苦しみは、損獣。徳獣。己が身の程々を知り、足る事を知らざれば、いつか安樂に至るべき。

むかし太く遅しき、一疋の馬有りけるが、或時牛に向ひて、何とぞ〳〵其元の角を我にかし賜はるべしといふ。牛答へて曰く、我が角をかりて何に仕給ふぞ。馬が曰く、御存知の通、我れ一日に千里を走る術ありといへども、嗚呼かなしき哉。其元のごとき角のあらざるゆゑに、いつ迄も卑しき馬にて、世をおくるこそ無念なれ。我に、其元の角をかりうけば、まことに天下無雙の獣にて、誰か我に敵對ふものあらんや。さあれば日本の獣は、いふに及ばず、唐・天竺にもかけ渡り、獅子・麒麟をも手下となし、あまねく天下に猛威をふるはん。我獣の大王とならば、其元を引上げて關白となすべし、是非とも角をかし給へと。牛諫めて曰く、扨々其元は、よしなき了簡をおもひ立ち給ふ事かな。馬は馬、牛は牛らしきこそ、その天命の得たる所にて、長久安樂なるべけれ。然るに汝、足る事を知らず、法外の望みをなして、己が位、其分限に違ふは、其身の亡ぶる事を招くなり。此れがびは是非々々とどまり給へ。すべて分不相應の望をなせば、身を亡すのみならず、大きに辱しめを受くるものなりと、さま〴〵に意見すれども、馬つひに聞き入れず、無理に牛の角をかりとりて、己が頭にいたゞき、我力量の上にこの角の力あれば、天下になんぞ恐ろしきもののあらんや。虎・狼をも突殺し、獣倒して、獣王とならん事、目の當りなりと勇み進んで駈出しければ、世中の人これを見て、扨も〳〵珍らしき馬かな。牛の角をいたゞきしは何よりのよき見せものなりとて、人群りて此馬を生捕にし、見せもの小屋につなぎ置きて、明暮人の見せものにさらされ、大なる辱しめをうけて、一生を見世物仕舞に送りしとかや。

馬はうまれのまゝの馬にてありなば、馬の徳を失ふまじきに、よしなき不足を起して、法外の望みに一生をあやまりしは、かなしき事にあらずや。是此馬ばかりにあらず。萬づの事が皆此道理にて己が分に違ひ、不足をおこせば、皆此身をば失ふなり。世に身を失ふほどの苦しき事あらんや。翁が傳授の安樂とて、別に仕やうもなし。牛は牛にて、馬は馬、柳はみどり花はかはらぬ紅にて、いつも己が位に素して、チヨンがレ坊はチヨンがレにて、チヨボクレいうて拵ぐ外には、安樂

といふ秘事も傳授もヤレ〳〵ないのに、外を望むはうるさい事だよ。

安樂の傳授といふも外ならず、たゞ足る事を知る迄の事。

私は此へ町人にて、若き時より、一錢の徒錢も遺はず、諸勝負事は猶ほ以て、酒にも色にも溺れた事はござりませぬが。どうしたものか、不仕合にて、先祖より受けつたへし相應の身代なく、いつともなしのじり〳〵貧乏、おもて付はかはられど、今は小銀も內證に火が廻つたゆゑ、氣をいりあげ、此借銀はどうしやうぞ、此ゆく先はどうがなと、我等一人身をもがき、さま〴〵の勘略して爪に火を燃せども、くらし方は、兎角に張り、業體は不景氣にて、借家は家賃をのこしをる。金銀は年々に不廻り。買ひさきはばらはにやならず。うり先はせけども取れず。利銀はせんぐり出さればならず。手代は銀子をつかひをる。息子は茶の湯で潛上ばる。娘には又衣服もして著せたし。緣者の世話も折々かゝつて來れば、すてゝもおかれず。家は修覆が廻つて來る。寺は奉加を持つて來る。氣苦勞する女房を煩はしては叶はぬと、時々芝居も見せに遣はす。イヤハヤ最早立つにも居るにも、錢の入る事ばかりにて、所詮つゞかぬ身代とは思へども、今ちゞめるは口をしく、どうしてなりとも我等一代は喰ひしばり、貧乏をあらはさずば、世間體も先づよければ、又其うちによい事もあらうかと、こたへ〳〵てゐる苦しさ。常住癪氣で、鍼治代さへたまりませぬ。かゝる苦しき拙者をば何ぞ憐み、安樂に至る傳授を教へて給はるべし。

先生の曰く、貴樣は何の事なしに、癇症といふ物ぢや。氣ないらたずに翁がいふ、はなしを能く能聞かつしやれ。

むかし〳〵大むかし、島原において、一と言うて二も三もなく全盛の傾城ありしが、遠國の厚富の息子この太夫に馴染み、身受の相談におよびしかば、太夫も喜び、此客の心に叶ひて苦界をのがれんと、さま〴〵に此客の機嫌を取りけるが、折から八月十五夜の隈なき影に酒宴長じ、妓女。幸に頭がさわき立て、客も興に入りけるが、如何はしけん、此太夫出物はれもの所きらはず、小芋の綺分やふき出でけん、プンプンのプントコナと、間拍子もよく放屁しければ、客聞きとがめ、太夫あれは何ぞと尋ぬれば、太夫、なさめた顏付にて、オ、恥かしや。今宵はあまりおもしろさに、私も、此頃の流行歌プンプンのプントコナをうたうたわいな。あなたの御國ではお知りませぬ事ぢやわいなと、紛らかして目くばせすれば、氣轉頓智の、幇頭が引取りて、妓女さん引いておくれ。太夫さんさへ謳うてぢや。私も、おまへ方も流行歌をやりましよと、三絃の拍子にかけて、プンプンのプントコナと歌ふ

も、手練の物眞似師にて、今の太夫が放尻の音に寸分ちがはず間を合せば、遣手・引舟を始として、一座どつと感じける。

花魁、客に向ひて、今の幇頭さんのはやり歌は、わたしがいふたとは、又格別間拍子がよいでは、ないかといひければ、客の曰く、いや〳〵彼奴よりはそなたが上手ぢや。成ほど幇頭めがうたふは、間拍子はよけれども、そなたのうたやつたやうに、かんじんの臭氣がなくて、不風雅なと打わらへば、太夫をはじめ一座の者共、一句もなく赤面しける。

客此時に、大に怒つて曰く、いかに我等が遠國の者なればとて、臭屁を放て時行歌とは、秦の趙高が鹿をとらへて馬といひしよりは、まだ〳〵倍りて馬鹿にしたいたし方、鹿をとらへて馬と僞りしさへ、國を亡ぼす佞人ならずや。今汝僞り、誠なしといはん。かゝるものを宿の妻とせば家内の者に誠なく、大切の先祖の家をたゞ一時にこきへらすべし。我先に、汝にプンプンのプントコナを何事と辱れし時に、ありていに失禮ながら放屁なりとこたへなば、誠に太夫の太夫たるの器量にて、假初にも、いつはりなき、汝が誠をしり心ぞと、放屁の論はわきへ往く。さすがは太夫ぢや、ようありていにいひつたと、予はいさみて妻とせんに、卑しいかな、放屁ひとつを紛らかさんとて、人迄も苦しめ、よい顏して屎にふたをば、雪隱壺ともしらずに入つた身がけがらはしいと、其座を立つて歸りけるが、此評判四方に聞え、誰いふともなく、此太夫を放屁太夫〳〵と異名せしかば、今は廓の勤もならず、何國ともなく出てゆきて、尻の仕舞は行衛さだめず成りしとなん。

賣卜先生安樂傳授　9

このはなしをよく聞きめされ。この太夫にかぎらず、すべて世の人、わづかなる恥をいとひて一生をあやまり、其身を滅亡するもの數限りなし。これみな眞實うすく、有ていならず、ものをいつはりかくすがゆゑなり。汝が今くるしむも、もと貧乏をつゝむがゆゑなり。

咄の太夫が放屁の如くにて、我は隱すと思へ共、人にも鼻がある故に、どうしてやら嗅出して、何家もどうやら合點が行かぬ、扨々臭い身體ぢやと、そろ〳〵香臭が廻るや否やこちらからは是かへせ。あちらからは是もどせと取立てられ、尻の仕舞は蟲仕の惡い倒れ引込、むさいきたない、しがへして、先祖の名をけがすのみ歟、已が命もいり上げて仕舞ふなり。今貴樣の足一本を、金千兩に買ひましよほどに、打切つて給はるべしといふたとて、必定切つてはくれられまじ。其足とくらべては、まだ〳〵何程か大切なる命をば、貧乏をかくさんとて、樣々と心勞して、終には失うて仕まふとは、歎かはしき事ならずや。

又こゝに咄あり。予が知音の商人なりしが、正直にて發明なりける故、親の代とは大きに榮え來りしが、六七年打ちつゞき、さま〴〵の損失にて、內證に五十貫目ばかり借銀出來しかば、此男早速手代、別家の者を集めて曰く、知らるゝ通り六七年も打續き不仕合にて千兩近き入銀を仕たる事なれば、この場は一先帆を下げて、身代を取縮め、窺るべきものは吝氣なく心強く賣拂ひて、兎角人に損をかけぬやうにすべし。損を懸けぬが商人第一の本手なれば、先づ此通に計らひて心を安く養ひて、後又立身の手術をめぐらすべしと有りければ、別家の手代共、口をそろへて、此身代にて、五十貫目も入銀出來なば、其時にこそ御了簡もあるべき事なれと、一同に申しければ、主一頭をふりて、されば其事なり。予前方或るかな本をよみし中に兎角貧乏は早く取越すにしくはなし、とあるを見て、實に尤と感心せしなり。今五十貫目借銀が出來たれば、取りも直さず、五十貫目の貧乏なれば、今此時に、三百貫目の、借銀したる心持にて是は叶はぬと逼塞し、萬事を取り〳〵めあらたむれば、早二百五十貫目は、坐延びる道理なれば、身も家も安くして、亦芽を出す勢ひを含み居るなり。是貧乏を取越す故なり。又五十貫目、貧乏をこたゆる時は、足ぶみあしく終に三百貫目迄にも至るの弱みありて、心苦し。心苦しければ、進退自由ならず、進退自由なれば、利を見ても進むの勢ひ弱し。又五十貫目の借銀を、火急に入合せたく成りて、よしなき損や、掛損などもあるべし。左すれば我存念の通り貧乏を、今とり越して逼塞すべし。我今の逼塞は先祖の家を、仕舞ふにあらず。先祖の家を幾長久に相續せんが爲なり。尺蠖の身をちゞむるは、屈むるにあらず。己が身を、伸ばさんとするの手術なりと思はるべし。

是に就きて手近き咄あり。吾が朋友に一人は格別年若くみえ、今一人は至つて老けて見ゆる人有り。或時此二人同道にて、去方へゆかれしが、先方の亭主、一人に向ひて、貴君は御齡、幾になられぬ。給ふと問ひければ、それがし、當年七十歳なりと答へけるに、亭主あきれて、扨も〳〵若く見え給ふ御人かな。人魚とやらを食したまひしか。誰見ても五十歳より上とは申すまじとて、又今一人に向ひて足下は何歳にそと、尋ねければ、我は當年五十二歳なりと答ふるに、亭主、又々驚きて扨も〳〵貴公は御年よりは甚だふけて見え給ふものかな。我は有りやう、七十歳にも成り給はんかと、思ひしとて、笑ひしとかや。その方達は右の二人は、いづれが損ぞと思はるゝや。我がおもふには七十歳にて、五十歳位とみゆるは、至つて人の見えよくて嬉しきに似たれ共、早七十の齡に成

りたれば、何もかも是に應じて、健に見えても、身體よわり居りて末たのもしからず。心細き物ならずや。又五十二歳に成りながら、七十歳とみゆるは、甚以人見えはあしく、迷惑なやうな物なれども能々思へば人見えよりは、至りて年若くして身も年に相應し、健にて末頼もしき身ならずや。爰を思へば今身代の省略も、世間からの人目はあしく、早貧乏せしかと、七十歳の餘命なき老年の身代と見ゆとも、内證はさまで借銀もなく、人の見分よりは身代丈夫にて、有りやうは五十歳位の若さに等しき身代こそ、末頼もしきにあらずや。是我望む所なりと申されけるにぞ、別家も、手代も皆感心して、此計らひにしたがひける。

此主、かゝる豪傑なりける故に、我と貧乏を取り越し現はして、一旦逼塞はいたしけれども、其後以前より數十倍に富榮え、都に名ある富家と呼れしなり。是皆此男の發明・器量計りぢやない。實に此人先祖の家を大事とおもひ、又人に損をかけまじと云ふ實心の厚きゆゑ、名聞にかゝはらず、かくの如く行はれしは町人たる身の大丈夫にて、實に心を煩はせず、大安樂にいたるの術を、よく熟達せし人といふべし。汝も樂を得んと思はば、先づ此人を手本とすべし。

翁は身代事の義は一向不得手なれば、只安樂に成りたれば、中庸に所謂、貧賤に素しては貧賤を

行ふ、と曰ひし道理を合點して、貧乏なれば貧乏のやう、賤しければ賤しき樣、借りた物は返さにやならぬと、此ところに急度力を入れて見らるべし。病も發散させて後にこそ癒ゆるなれ。唯だ押へ押へ押付けては、其病が内攻して、終には命をしまふなり。

汝も貧乏を發散させず、喰縛り、押へ〳〵せられなば、其間に貧乏内攻して家も子孫も滅すべし。世に身を滅し家を亡し、子孫を失ふ程、歎しく恥かしき事あらんや。今の僅の恥を忍び、今の僅の苛を忍へて、有體に貧乏を突出し、借つた物を返さるべし。是に勝る安樂も、壽命の藥も、子孫の爲もなかるべし。猶ほ身代改正後の養生補藥には

○家業出精　○知足　○儉約　○堪忍　○身養生

右五味に、いつにても正直をはなさず加へて、片時も忘れず服用あらば、身も家も安全にて、子孫永々安樂なるべし。又禁物は

○不實　○剛欲　○酒色　○朝寢　○家内不和合

右五品は、かりにも喰合す事あるべからず。家を修むるの大毒物なり。恐れても猶ほ恐るべし。

有ていにするが安樂傳授にて、かくすにまさる苦しみもなし。

賣卜先生安樂傳授　中の巻

私は、生れつきての短氣者、我ながらにもこまりはて、如何してなりとも直さんと、堪忍の教へなかいた教訓本、いろ〳〵取りよせて見ましても、生れつきは是非もなく、事にふれては腹が立ち、肝癪のおこる時は跡も先も打忘れ、誠や一朝の怒に其身を忘れるとは私が身の上、かゝる苦しきかんしやく持も、心廣く氣ながく成りて、安樂になる御傳授の候はば、御をしへ給はるべし。

傳授先生曰く、夏のむしの火に入るは、おろかなたとへの第一なれど、かはいさうに夏の蟲は、火かば火と知らずして、只明き所ぢやと思ふ故に、飛込んで身を失ふなり。其又夏の蟲よりは、よつぽど頂打の劣つた貴樣、ナゼと云はしやれ、短氣を短氣、肝癪を肝癪と知りつゝあらためぬは、火なば火と、よく知りながら火の中へ飛んで這入ると同じ事、誠に愚の至なり。

前かた、翁が懇意の手代に、萬兵衛といふ人ありしが、貴樣にまだ〳〵二三割も強い、肝癪持にて有りしが、近年絶えて肝癪の見えざる故に、いかなる事にてかんしやくを治し給ひしぞと尋ねしかば、彼萬兵衛が返答に、私、ある時、土藏の内へ入りて、自用をなし居ける。折ふし土藏の外より

せわしく、我名を呼びける故に、我幾度も返事をすれども、聞き入れず猶も烈しくよびけるに、我例の肝癪腹なたて、にくゝもせわしく呼ぶものかなと。あの呼ぶ聲は下男の千助なり。番頭へ對し下男の分として、横平なる仕方かな。まて〳〵仕やうぞあらんと、此度はわざと返事もいたさずに打やりて置きければ、土藏の外より大いに怒り、聲あらゝげ、早く是へ來れよ。來れ來れと、さもにくさげに呼びける故、我も今はこらへ兼れ、下男の身を以てかゝる無禮の千助づら、其まゝにおくべき歟。重れてのこらしめに、打擲なして得させんと、ありあふ棒をひつさげて、目にもの見せんと、土藏の外へ飛出でしが、おもひのほかに呼びしは、下男の千助にあらずして、我家の主人なりけるに、おもはず棒をうしろへ投捨てい、平伏し、色々と汗水ながしわびしなり。こゝを思へば、かんしやく・短氣は皆氣隨にて、下男の千助と思へば命をすてても、堪忍がなりがたかりしに、存知の外、主人なりける故、肝癪・短氣も失せて、眞實あたまがさがりしなり。これより誠に合點が行き、かんしやく・短氣は、うまれつきにはない事なりと、實々覺悟いたせしゆゑ、其後ふたゝびかんしやく・短氣出で申さずと、かたられしが、いかさま此萬兵衛の覺悟の如く、人のこゝろは變はつたものにて、かんしやくに限らず、萬事とも覺悟さへすりや、何事もかんにんのならぬ事はないものなり。

世中に第一堪へがたく、こらへにくき至極は、我身のうへに火をのするほど、たへがたき事はなけれども、これもおもはく、覺悟一ツで、こたへられぬ事はないものぢや。

その證據は、誰にても灸治はこたへてすゑるなり。現在灸治は身の上に火をおくことなれど、これは灸治ぢや。身のためぢやと、覺悟すれば、隨分こらへられるものぢや。

また、同じ灸治なれど、一火すゑそこなうて、こころ〳〵とこけておちると、びつくりして、ヤレ熱やたまらぬとおどろくなり。同じ脊中で、おなじもぐさで、おなじすゑてやり人なれども、取落したる一火がこらへられぬは、どうぢや。これは今こけて落ろといふ覺悟がないばかりで、同じ灸なれどこらへられぬなり。

これも始に覺悟させて、何某どの、此灸治はわざと一火取落し、ころ〳〵と脊中をこけておつるほどにこたへ給へ、かんにんし給へと案内すれば、隨分承知かしこまつて、おどろかずに忍へらるゝものなり。こゝをおもへば、何事も自分の覺悟以爲ばかりにて、萬事勘忍の出來ぬ事もこらへられぬ事もこれにて貴樣も合點し給へ。人は覺悟と以爲ばかりなり。

ないものぢや。貴樣が、何ほどかんしやく持にても、鳥が糞をしかけるに、憎いというて、其鳥を虛

空へ追かけては行きもせまい。又あたまの上へ何にもせよ、道具がおちたを腹がたつとて、ふみくだきも仕やせまい。これは鳥ぢや、これは道具ぢやと覺悟して居ればこそ、はら立も、かんしやくも出ぬではないか。

われ先年關東へまかりて、箱根山をこす時に、荷持やかごかきがかけ聲に「かんにん寶ぢや。正直家督ぢや。辛抱銀ぢやぞ。短氣は損氣ぢや。覺悟が大事ぢや。覺悟が大事ぢや」と申せしを、一人感心いたせしなり。

成ほど人はかんにんと、しんぼうと、正直と、ろぼせしもの數しらず。殊更短氣・かんしやくはのこらず無隨・氣まゝにて、いかなるかんしやく・短氣ものにても、御公儀樣や、我目上や、その外すこしにても氣味わるく、こはい所では、とんと〳〵肝癪も、短氣も出さぬものなり。出せぬ筈ぢや。是も覺悟がして有つて、御公儀樣やこはい人に逢うては、短氣もかんしやくも出されぬものと、兼て覺悟をしてゐる故なり。亦、我うちや、目下や、こゝろやすきものには、短氣・肝癪を出したり共苦しからずと、是も兼て覺悟がしてあるゆゑに、わづかのことも腹がたつなり。又惡う合點しては、我等が肝癪は生れつきなりなどと、覺悟してゐる

故に、いつか肝癪が治らぬなり。うまれつきにかんしやく・短氣があるべきや。その證には、御公儀樣にては出ぬではないか。貰の生れつきといふものは、何國にても同じ事なり。盲目は盲目が生れつきゆゑに、御役所でも目はらかず。腰拔は腰ぬけがうまれ付きゆゑに、御公儀にても足たゝず。是等こそ眞實のうまれつきにて仕方はなし。かんしやく・短氣は、みな氣隨・氣まゝ・不覺悟にて、わが身や家をほろぼすに第一番の道具なれば、汝も今より改めて、この短氣・かんしやくは、どうでもかうでも治さにやならぬものなりと、覺悟をきはむる時は、今にも、短氣はなほるものなり。又此肝癪・短氣を治すに、何よりもよき噺あり。

むかし、かんにんの六助とて、何事にも腹を立てず、至つて堪忍よき男なりけるゆゑ、世の人異名して、かんにんの六助と呼びけり。然るに此六助が近所の若者ども、あまり〳〵六助が堪忍強きを世の人ごとに譽むるをそれみ、腹惡く思ひて、六助をこまらせんと、或日同じ惡黨十人許り打寄り、いひ合せて六助が、先きへ歩みゆく後より、つけ行きて握りこぶしを強く堅め、六助が頭を二三人寄りて十次ばかりたゝきけれども、六助何の氣色もなく行き過ぎけるを、また走りよりて、此度は四五人かゝりて五六十も擲きけれども、いよ〳〵六助何の顏も見えず、しづ〳〵とあゆみけるを惡黨ども

納め過ぎた六助め、にくさもにくしと、みな〳〵立ちかゝりて、數かぎりもなく打擲しけるに、六助常の顏色にて少しも怒れる色なく、泰然としたる其ありさまに、さしもの十人の惡黨ども、今はまことに恐れ入つて曰く、扨も〳〵六助殿、貴樣はいかなる術ありて、かく迄によくかんにんをせらるゝや。打擲にあふとても、五ツや十は堪忍もなるべきが、都合にては貴樣のあたまを、五六百もたゝきつらんにゝ少しも顏色も變へず、かんにんして常體なるは、一向人間業とは見えず、定めて奇術あるなるべし。此上は、我々が罪を免し、明らかにかんにんの仕やうを教へ給へと、平伏して尋ねければ六助から〳〵と笑ひながら答へて曰く、何もかんにんするに、むづかしき傳授も候はず。我あたまは、五六百もたゝかれても、堪忍するはタツタ一ツづゝなりといひけるにぞ、惡黨原も感服して、向後此一言を守るべしとて、各心を改めけるとなり。

誠に此六助の言は世に有がたき堅悟にて、たとひ百千堪忍のならぬがありとも、只一ツづゝ、かんにんしこらへてゆかば、などか堪へられぬ事のあるべきや。千里の道も一歩づゝ行けば、終に千里を行盡すごとく、一代のかんにんも、其腹のたつ時々にタツタ一ツづゝかんにんせば、一生を安んずるなり。

タッタ一ッづゝかんにんするとの六助が訓言、寔に〳〵感心するにあまり有り。朝かんしやくがおこつたら、朝は朝にてかんにんし、夕に肝癪がおこつたら、夕はゆふべでかんにんし、晝はひろにてかんにんして仕舞ふなら、意地も遺恨ものこらずに、さらりさつぱりすむ算用、ほこりも、塵ものこらぬに、已がこゝろで色々とながるゝ水をせきとめて、先度もかうぢや、此間もどうぢや、きのふもどうぢや、今日もどうぢや、是計りは堪忍がならずや。

こゝの道理を合點して、癇症・肝癪・短氣は、みな已が氣隨と覺悟して、直さにやならぬと愚悟すろ此覺悟こそ、安樂の傳授、秘密の肝要ぢや。

安樂の傳授といふは覺悟なり、たゞ不覺悟が身なれば苦しむ。

先生曰く、次は誰ぢや、日がみじかい、早う是へ出られよ。

ハイ〳〵、どなたも御免なされませ。この婆々は當年最早七十歳になりますゆゑ、これから先何ほど長命いたしたりとも、高がしれてある事と、おもへば〳〵、こゝろ細く、そのうへ嫁と中あしく、朝夕喧嘩の仕つゞけにて、胸のほむらの身をこがし、一向の事、死んでしまふがましならむと、晝々はおもひますれど、これもむかふの見えぬ事にて、色々さま〴〵苦しみます。此こゝろの苦しみを救ひたまひて、何とぞ〳〵、死んでからゆくさきを教へて、落付し給はろべし。

先生答へていはく、生をしらずんば、なんぞ死を知らん。生死の事は重き事にて、中々言句の及ばぬ事ぢや。先々婆州、こなたの本國、在所は何所でござろ。

ハイ〳〵、此老婆が在所は、これから西にあたつて、丹州の氷上郡でござります。

先生のいはく、翁も、近日丹州へ往かればならぬが、此門口を東へ行き、三條通をまつすぐにひがしへ〳〵とさして往けば、往かるゝ歟。

婆々の曰く、これは〳〵先生樣には殊の外の御不案内。三條通は江戸街道にて、ひがしへ〳〵行き給はゞ、江戸へこそひとりゆけれ。丹波へは往かれませぬ。丹波へゆくには、此門をまつすぐに西へ往きて、桂のわたしを越えますれば、それがすぐに丹波道にて、西へさへゆけば自然と丹波へ往けまする。

江戸へゆくなら三條通、丹波へゆくなら丹波口と、おの〳〵其道々がござりまして、其道へさへゆけ

ば專り迷はずゆきまする。其道々を取違へてはゆけませぬ。丹波へゆくに三條通を東へ往ては、心は何ほど丹州へ行く心でも、萬劫末代丹波へは往けませぬ。

先生の曰く、成ほど丹波へ行くに江戸へ出ては、丹波へゆけず。江戸へゆかうとおもふに丹波へ行く道へ出てはいつがいつ迄も、江戸へは往かれぬとの、こなたの教訓、尤至極せり。是にてお婆々落ちつき給へ。こなたの案じる死んでからゆく先も、しれてござる。外でもない、地獄の釜へだい走りぢや。うたがはしやんな。

婆々おどろきて曰く、私は平生きつい信心者、それでも地獄へ行きます歟。

先生、嚇と、白眼で曰く、味噌の味噌くさきはまことの味噌の德にあらず、眼、眼を見ず。指、指を指さず。眞の信心者なんぞ信心と覺えんや。丹波へゆくには丹波へゆくの道へ出でざれば、何ほど丹波へ行きたき心にても行くことあたはず。又、其道へ出でさへすれば、ひとりゆかるゝと、汝がいふに、寸分だがはず。何事もその道へ出でさへすれば、天然ゆけるに違ひなし。汝も心には極樂へ往きたき望みなれども、今その方が出かけてゐる道筋は、極樂とは方角違の道路にて、朝夕嫁と申おしく、ほむらに身をば焦せるは、則ち、修羅のちまたにて、ひとり地獄へたゞ走りなり。

麥の種蒔けば麥ならでは生えず。瓜の蔓にはなすびはならず。あしき種まけば地獄へ至る。慈悲の種まきや極樂世界、積善の家には餘慶あり。積不善の家には餘殃あり。

むかし或諸侯、貴き聖人に謁れていはく、如何なるが地獄、いかなるが極樂と。聖人こたへて、君がごとき凡夫、なんぞ地獄極樂をしらんやと曰ふ。諸侯大いに怒の面色忽ちあらはれければ、聖人、諸侯の其怒れる顏を指さして、それこそ、それ地獄なれと示したまふ。諸侯大いによろこびて、からゝと笑ひ、有がたしゝとのたまへば、聖人また、諸侯の悅び給ふ顏を指さして、それこそ、それ極樂なれ。と示し給ひしとかや。

これ、直蹇のさとしにて、丹波へ行くには丹波の道、江戸へ行くには東海道。極樂へ往きたくば、極樂道の柔和・忍辱・慈悲・善教・悟道發明・信心堅固・五倫和合に身を謙り、人とあらそひいつはらず。人をそれまず惡氣せず。萬事誠を盡すこそ、これ極樂の道筋にて、いやでも應でも、無造作に、專り安樂淨土へ辛苦なしに往けるなり。

また地獄へ往きたくば、これも則ち、道筋あり。其道筋が知りたくば、喧嘩・口論・色と酒・貪欲・瞋恚・不堪忍・惡氣・嫉妬に愚癡・我慢・氣隨・氣儘に奸曲・邪佞・不忠・不孝に遊所好・神や佛を尊と

まず。聖賢・長者を敬まはず。家業不綺に、客嗇・驕奢、人にはつらく、意地わろく、人をば謗り中言し、影口あしく、嫁姑・兄弟・親子・圭・家來・朋友和合いたさぬは、是ぞ地獄の近道にて、おのづと地獄へだゝ走りぢや。其だゝ走りはまだ遲い。此非道・不義・無理・不和合が、すぐに地獄と知りめされ。そなたも早う極樂往生がいたしたくば是から往んで、眞實に嫁を愛してやらしやりませ。よしあしのうつろすがたの影法師、よく〳〵見れば我すがたなり。

この歌のごとく、こなたが可愛がるにさかだつて、喧嘩する嫁もあるまい。よしあしともに。みな〳〵此方のかげ法師にて、ちやうど鏡に向ひてにらめば、鏡のかげもにらむでないか。またにこ〳〵とわらへば、かゞみのかげも笑ひます。また此方が手をふりあげると、鏡のかげも手をふりあげる。此方が丁寧に兩手をつけば。影もおなじく手をつかへるとおなじ事にて、みな〳〵先にはない事にて、唯々我にある事なり。

我よきに人のあしきがあらばこそ、人のあしきはわがあしきなり。

此ことの葉の通りと合點して、柔和・忍辱に身をつゝしめば、往きたうても地獄へはゆかれず。たとうても腹がたてられぬ。腹がたゝれば心安し、心が安ければ身も靜なり。身がしづかなりや家を

さまる。家がをさまりや一類一門よろこびて、常極樂でくらすぢやないか。この極樂へ出てされば、百萬だらの經や念佛まうすとも、未來の極樂、うたがはしい。こゝの道理をわきまへて、未來の事はあとへまはして、まづ〳〵いそいで、この家内和合の安樂淨土へいたらうゝが、すぐに我等が安樂傳授ぢやほどに、くれ〴〵婆州、修羅わかさずと御茶參れ。

資卜先生安樂傳授　下の卷

極樂へ是非往きたくば、この世にて人と和合し心やすかれ。

安樂の秘傳秘術は外になし、無理たばいはず修羅をわかさず。

資卜先生曰く、次は、誰ぢや。順番の通に是へ御出で〳〵。

私は、此東町に住居いたします、香具屋何某が悴でござりますが、前方據なき附合にて、不圖遊所へ參りましたが、その砌より名は申されぬが、或藝州と申しかはし、日に月にまし深う成り、今は、引くにも引かれぬ仕宜、西明寺ではなけれども、跡へも先へもゆかれませぬ。是をば母者は氣に病んで、私を捕へて毎々意見、彼の女と手を切られば嫁を娶るにも來し人がなし。さすれば

家も修らず、又其方がいかやうに、彼の女を思ふとも、遊所の者は先祖へ對し我家へ入れる事は、己が命に替へてもならぬ〳〵とやかましく、其上に私が右の婦人に、只々だまされて居るとのみの昔推量、先の女は私を欺す事は扨置いて、身物を入れ心を盡し、私が粋を見込んで義理を立て、色や浮氣は昔の事、今は互に心底づくにて、操正しき婦人と知らず我が了簡に引きくらべ、惡推量の意見貰め、夫れで足いで一家・別家・懇意の衆中迄を賴んで、色々意見をいはしまするで、何程の粋な私でも、今は心につかへます。かゝる心痛・胸痛の時にても、安樂になる御傳授の候はゞ、御授け給はるべし。

翁にこ〳〵笑うて曰く、人も多いに其元は、いとしや格別心痛めさる事ぢや。隨分安樂になれる傳授がござる。敎へて進ぜう。

それはそうぢやが、先づ貴樣に一寸と尋れたいは、貴樣が馴染の其藝州とやら、安藝の國とやらいふ女が、貴樣の粋とやらに打ちこんだといはるゝが、其粋といふ事は何の事ぢや、翁不學なれば、粋といふ事をしらぬなり。定めて粋といふ事は、貴樣の男が美いといふ事か、又銀があるといふ俳名か、但し又已が家業には疎く、あそぶ事が上手ぢやといふ異名か、左なくば又遣すべき方へは銀子を

やらずに遊所にては大まへに銀をよう遣ふといふ變名か、夫でもなくば、主や、親や、兄弟や、女房・子には疎くつらくて、遊所の者には情をひけ、氣取をよくして悅ばせ、よう遊して遣るなばいふ歟、翁遠國者なれば孱かしながら粋といふ事を聞きしは、今日が始てなれば、我等が樣な文盲の耳にも分りよきように國字解にて語り候へ。

息子身上りして曰く、されば粋といふ事は、中人以下の知るべき所にあらず。既に古歌にも、

粋多き粋の中にも粋ぞなき、粋になせ人粋になれ人。

とある如くにて、誰も粋は望め共、愚蒙・短才にては、一代粋の名を得る事は成りませぬ。此粋といふ事を關東にては人通といひ、唐にてはカメツといひ、天竺にてはアンバラカといひ、紅毛にてはクロガリチールといひて、三國・夷に至る迄粋を望まぬ國ぞなき。然るに今翁の宣ふ所は、皆々不粋の骨髓にて粋のすの字でもござりませぬ。

抑々粋といふものは、先づ一番に眞實厚く、何事にても情有つて、萬に筋の通る事なり。其筋の通るとは、青樓には青樓の筋を通して場合をよくし、假にもいぢらず無理いはず、極には苦出しせぬ内に、チヤツと銀をば持つて往てやり。又女郎・藝子には女郎・藝子の心を知り、筋を通して賴まぬ内

に此方から櫛や笄・帯・衣類・紋日・日がらの約束も、せがまぬ内にして遣はし、中居・幇頭はいふに及ばず、廻し男や、料理人・小女郎・飯焚・按摩取・針仕業する雇後家、洗濯に來る婆州、髪結殿と呼ばるゝ嗚達、寄場の送り、駕籠舁迄に、心を付けて遣はすが、先づ〳〵粋のあらかたにて、只々粋といふものは、人の心をよく知りて、其筋道の大いに通るを申します。ゆゑに江戸で大通と云ひまするも、能く文字に中つて居ります。

翁の曰く、其方は誠にきつい粋學者にて、何事にもよう筋の通つた人ぢやによつて、又我等が傳授も、外の者にするとは殊の外いたしよい。今こそ安樂になる傳授といふは外でもない。御袋の教へ、意見に從ひ、埒もない遊所の女にかゝつて居ずと、早々に別れる事ぢや。左すれば母は悦び、身は無事で、家は修まる、世間はよし、一家・別家は安堵する。さあれば貴樣も入らざる心痛・苦勞もなし。是に過ぎたる安樂の傳授も、秘事もあるまいがや。

息子、腹を立てゝ曰く、扨ても〳〵先生は大の不粋家なり。それが出來れば此心痛はござりませぬ。彼の婦人と私は、互に義理に義理を重ね、馴染といふも長い事にて、七年以來日に月に增し、馴染に

馴染を重ねたれば、先刻も申す通り、色でも戀でもなく、深切と深切にて、義理ほど世に切ないものはござりませぬ。

翁、言をあらくして曰く、馬鹿め。默れ。いはしておけばどこまでもあほうを盡しをる。其女に七年以來なじみたる、馴染の女の、馴染が長いか。其女に七年か。腹の中から馴染なる親は、馴染と思はぬか。七年以來なじみたる、馴染の女の、馴染が長いか。生れぬ前、腹の中からなじんでゐる、親の馴染が長い歟。又世に義理ほど重いものはないとぬかすが、左程に重い義理を知らば、親や、一家や、一門には、なぜ義理立てゝ意見には從はぬ。親には義理はないもの歟。女ばかりに立くるが義理歟。人の心を能く知つて、道筋のよく通す私は粋ぢやと、己が口からいふてはないか。夫が粋なら、先づ一番に、親の心をよく知つて、道筋のよく分かる身持・行狀なぜせぬぞ。夫でも筋や道が分る歟。粋はものゝ情を知ると、いふたぢやないか。物の情を知る粋が、親や、一家や、別家の者迄、苦しめ、歎かしても、夫でも情知りぢやと思ふ歟。大切の先祖の家や、親を捨てゝ、其女に迷うて居ながら、色でも戀でもござりませぬとは、扨々厚いやつし殿、翁が不粋で汝が粋歟。翁が粋で、汝が不粋歟。

イヤハヤこいな田舍殿。耳をさらへて能く聞かれい。

昔〳〵汝が如き愚かな者が或遊女の色にめでゝ、餘多金銀を遣ひ捨てければ、終に親・一門に、見はなされ、流浪に及びければ、かの遊女も此男を疎みきらひて、見向もせざりければ、男大きに憤りて、二首の歌を詠みて遊女に遣しける。ことの葉に、

我は只實に戀ぢやと思ひしに、にくや錢もてこいで有つたか。

粋なりとそやして粋が川浪に、はめた流れのつらき遊女。

と、書きたりけるを見て、女郎さわがず、何くはぬ顔付にて硯引きよせ、返しの歌に、

戀は戀こひに違ひはなけれども、借錢こひの來る客はいや。

粋さまとほめた時分は惚れたれど、今は貧州でいやな客面。

と、詠みて贈りけるとかや。翁は、遊所の味ひはしられども、丸裸にして見れば、此傳は多い物ぢやげな。今ひとつこゝで云うて聞かすよい咄がある。

いつの比にか有りけん。長崎の丸山に浮島となん云ふ妓婦有りけるが、妍貌は十分なられど、全盛幷ぶ色なく、元日より大晦日まで、明間なく繁昌しけるに、朋輩の女郎ども十人ばかり浮島が部屋に來りていひけるは、我々も隨分勤に精を出せども、君が十の一もお客のすくなきに、君は

いかなる術ありて、日々夜々にお客多く、かく繁榮し給ふぞ。何とぞ〳〵繁昌するの秘事を敎へ給へと、皆々餘義なく賴みければ、浮島も止む事なくて申しけるは、是には深き秘密あり。其秘密といふは外でもなし、兎角お客に惚れさす事なり。お客が惚れてさへくだんすれば、自り繁昌いたします。

あまたの女郎の曰く、其御仰せの惚れさす事には。我等も如才なけれども、兎角お客が馴染を重ねてくだされぬにこまります。

浮島笑うて、さればこそ、そこに秘密がござんする。御前がたの惚れさすは、御客を御前がたに惚れさそとなさるので、結句に深う成りませぬ。また私が御客を惚れさすは、御客を私に惚れさそとせずに、御客を御客に惚れさせ、自身を自身に惚れさすゆゑに、結句私と深う〳〵成りまする。

數多の女郎、不審がりていはく、お客をお客に惚れさせ、自身を自身に惚れさすとは、如何した工夫でござります。こゝが秘密の大事の場所、お客にお客を惚れさせ。自身に自身を惚れさすといふその秘傳は、

先づ藝能自慢するお客がござれば、わたしはとんと虚言はない、あなたの顔には惚れませぬけれど、

あなたの藝には眞實心、命をすてゝも惚れました。あなたのやうな藝者樣と、朝夕一所に住みましたら、人間一代のよいたのしみでござりましよと、誠しやかにいふ時は、此御客考へて、なる程彼奴がいふ通り、此己がチヤリ頭に惚れたとぬかせば、見えすいたうそなれど、眞實己が顏には惚れぬ、藝には惚れたといひなるは、餘ツ程目の明いた奴。己が藝の美味をば早見付けたつたは。此女餘ツ程力のあるやつぢや。ハテ面白き女郎ぢやと、我と我が手に了簡付けて、自身の藝に自身が惚れ、藝に惚れたといふからは、めつたに虛では有るまいと、是から次第に凝が來るものなり。

又よい男ぶりなお客なれば、私は一代暮すなら、あなたのやうな、御美目よしと、同じ住居がいたしたい。錢も銀も入りませぬ。迚も浮世にねるならば美男と添とげるこそ女の本意なれと、誠しやかにいふ時は、此客心に思ふ樣、成程己はよい男、大概十人に九人はいつでもござると悅び、女郎の底意はしらずして、我と我身に我惚して、懷中鏡をとり出し、よツ程私は當世顏。ござつた〳〵此女郎。なんでもおれに凝らしてこまそと、自身ひとりが自身に惚れ、一向夢中に出てお出る。又篤實な、おとなしい、學問好なお客なれば、私はありやうは、あなた樣の御風俗には泥まれど、さても〳〵御氣性の、眞實原き御方さま。そして何でもかでも、知つてござるに、恐れながらも御

感心、總體女は心のちいさいもので、常々胸が塞りますに、あなたのやうな御博識さまのお傍に、不斷なりまして、何やらかやら聞きましたら、こゝろが廣うなるてござりましよ、何程娑婆がよいと、浮氣な男を主にせば、一生胸を燒通し、あなたの樣な賴もしい堅い御方の御世話にならば、一代心の安い事と、眞實心に惚れた顏にていふ時は、御客も眉に皺よせて、成程あれが見た通り、私はよつ程堅い氣性、殊に物もよく知りたれば、かり角より美目のよい男を好くが常なるに、私を見込んで、堅い氣性におもはくするは、心ありげな女ぢやと、そろりそろりと御出るのも、自身が自身の氣性に惚れ、我れとわが身にかへりみて、我實貞から、人もみな、同じ事ぢやと思ふゆゑ、めつたに虛言ではあるまいと、段々馴染がかさなるそかし。又大氣なる御客がござれば、あなたさまの樣に、大氣ではいらぬ所に費がある。ちつと御きまりなされませ。しかし一代くらそなら、あなたのやうな、切離れよき、御方樣の御世話にならば、在所の父母も取りよせ、ともに御世話になろであろ。此頃私を引かその請出そのといふ御客が有つて、隨分男振はよけれども、私が嫉ひの氣がちいさい。心の狹いおかたの世話になると、肝心のとゝ樣や、かゝ樣にも、一生不自由いたさせます。私はかういふ氣性ゆゑ、とんと男や銀子にはかゝはり、

ませぬ。とかくとい樣かい樣の世話しておくれる氣のひろい。あなたのやうなおかた樣の、何卒御世話に成りたいと、朝夕神さま祈りますと、さもおとなしくいふ時は、客もつく〳〵考へて、かれがいふのは誠の道われのみならず、親も一所に世話に成りたき孝心なれば、なる程おれがやうな、大量の者に惚れずばどうもなるまい。おれが此菊石顏に惚れたといふなら虛であれど、親諸共世話に成りたい譯あれば、私は氣性の大きな所に惚れたといふは違ひなしと、我と我心の廣いに我惚して、是から彌〻凝が來る。

又客い御客が御出る時は、あなたの樣な、究のよい御方の女房になるならば、一代難義なめはせまい。私がやうな、遊女氣のない生得の小腹なものは、取〳〵なしにばんば〳〵と、立てるおかたはいやで〳〵氣のどくな。跡月も大かた身請の相談がきまりかけましたれど、其御方は相場仕とやらで、おまり〳〵氣が大きうて、私と馬が合はぬ故、所詮永うはやるまいと思ふから、親かた樣に斷りいひ、私の方から止印。兎角〳〵約々としたきまりのよいおかたでなけりや、今の時節の身代は長久にもてませぬ。それ故私がとい樣やかい樣は、常住私をやかましう御しかりの文に、隨分々々針仕事や、せんたく物や、飯たく事迄も稽古しておかれば益にたいぬと、夫は〳〵慇しういうて參ります。私は遊女こそいたしますれ、世帶の持ちつうも、まんざら素人でもござりませぬといふ時は、此客直に勘定して、女郎に似あはぬきまつた者、アノきまりでは、隨分世帶も持てる味ひ、殊に親の志も面白い。あの心では成程々々、己がやうにきまつた男が好であろと、自分に自分が惚れ、己は銀も遣はずにあの女郎な十が七ツは手に入れたいろるとは、扨々引合代物ぢやと、一文惜の百しらず、客けりや客い道筋から、やつぱりはまつてお出るなり。

また粹がつたお客が御出る其時は、あなたのやうな粹さまの女房になんぼ成りたうても、私等風情は申すもくだ。むかしと今は逆さまで御客が上手には、めなさる。女郎がもつさり踏みかぶる。なぶつておくれな、痩せまする。枯木も山の賑ひに、お事かけの折節は、お尋れなさつて下さりませ。山ほど惚人のある御方が、私等風情な何のかの、おなぶりなさるは、おとなげないと、直に仕打のせりふの文句、道行色々さまざまにて、つまる所は、此客の粹がる所を附込んで、惚れぬ顏して眞實は、粹な所に惚れた顏、時々見舞の遣ひ物、芝居・茸狩・開帳・納涼・紋日・他所行・五度に一度は、身上り自前立、淋しき夜はかしにもゆけば、粹がるもの程猶ほはまり、ひどい我等に打込みやう、次

第に登つて御出ろ〳〵。いや又已がやうな眞の粋には惚れぬ者こそなかりけれと、我身に我がのぼり詰め、自身に自身惚れぬいて、女郎が誠に惚れたには、違ひ梨子地の硯箱、筆にも墨にも蓋され ぬと、皆黒つきてはまるなり。

此外お客は、數々さま〴〵なれど、つまる所は、我と我が身に惚れさせて、自身に凝すのが、女郎たる身の大事の秘密、秘傳なれば、穴かしこ。人には語り給ふなと、いと念比に告げしとかや。誠に此浮島が女郎の秘傳、感心せし咄にて、我人、みな、兎角我身に惚して、災を招くに違ひなし。勢ひある者は其勢ひに惚れ誇りて、終に勢ひを失ひ、富める者は其富に惚れ誇りて家を失ひ、知惠ある者は其知惠に惚れ、誇りて身を滅し、學問ある者は其學問に惚れ誇りて徳を亂す。眉目よき者は其眉目よきに惚れ誇りて愛を失ふの類、其例すくなからず。汝こそ、汝が粋に惚れて、其身を失ふとしらずや。翁、元來鄙者なれば、粋とやら、大通とやらもしられども、あり〳〵粋といはるゝは、よい事ぢやない。粋な粋なと云はるゝは、家のすね微の元であろ。其證據は汝が先刻いふを聞けば、唐人にては粋の事を、カメツといふといはれしが、其カメツとは家滅ぶといふことであろ。亦天竺にては、粋のことをアンダカといふ事は、とりも直さず汝がごとくめつたに粋がり黒つかすを悪みて、クロがりヲールといふ事である。又和朝にても、古徳の歌に

大かたに粋がるものはみだらもの、粋でないのが人のきつすゐ。

といふてあれば、汝もよく心得られよ。結構は下愚の唐名、粋は泥州の和名ぢやぞ。

息子の曰く、翁の御教訓、一々御尤に候へど、私が女郎狂ひとは譯違ひにて、顔ばかりか、又其心の美くしさ、眞實・心底、我を愛し親に勤當請けたらば、何時にても我を引受け、一生ぬしは勤めして、我を養ふとの其貞節、盲人に見せてもすき通つた女の操、ほんにやれ〳〵、其深切は大方ならず、斯かる古今まれな眞女と、緣を切れよとおつしやるは、あんまりむごいぢやござりませぬか。

翁の曰く、今一ツこゝに咄がある。むかしある所に、彌次郎といふ者有りしが、常に佛の信ぜず、鬼の像を拵へて、朝夕そなへものをなして祭りけるが、はからずも無常の風に誘はれて、冥途に赴き、うろ〳〵と六道の辻へ至りし所に、赤鬼・黒鬼・斑鬼、出で來り、是は〳〵婆娑で見た彌次

郎殿、今日これへ御出ゆゑ、我々迎ひに參りたり。扨も〳〵娑婆にては、朝夕馳走に成りました。其代り冥途は我々引受けて御世話いたす。先々我等が方へ來り給へと、勞りくれる其深切、親も女房もならぬ有樣に、彌次郎悦び限なく、か程に我を愛し給はる鬼さま方、未來永々あなた方の、御側に置いてくださりませと、世にも嬉しく、賴もしく、彼鬼共にいざなはれ、既に地獄の門へ這入らんとする處へ、毘沙門天、鉾をひつさげ、汗水かいて走り來り給ひ、大音聲に宣ふやう、ヤア〳〵彌次郎、其方は娑婆に於いて、佛をきらひ、常に鬼共とあつく緣を結びし罪科によつて、今地獄へ行きて、永々苛責を受くる奴なれど、汝が母親、我を信じ賴むゆゑ、今我來りて汝を救ひ、地獄の責を免れしむ。我極樂へ來れ〳〵と、彌次郎が手を取つて引立て給へば、彌次郎は顏をしかめ、扨も〳〵情なき毘沙門さま、何ほど母が賴みても、あなたの御仰でも、鬼さま方にはなれる事は、金輪・奈落、私はいや〳〵、何とぞ此場を、御見のがし給はりて、親切な鬼殿の方へおやりなされて下さりませと、手を合せて斷いへば、鬼はみる〳〵彌次郎が、著物・手足に取付いて、ひとへに〳〵毘沙門さま、彌次さまは、私等が格別義理のあるおかた、たとへ火車・三途河・野の末・劔の山迄も、つれて行きますはなしやせぬ、二股大根ははなれても、彌次さん計りははなしやせぬと、涙ながし

てひつぱるを、毘沙門天は大力にて、シヤ面倒なと鬼共を、片手に摑んで地獄へほり込み、いやがる彌次郎引つさげて、只一飛に極樂淨土へつれ來り、つひに佛となし給ふ。彌次郎佛と成りて後、毘沙門天を禮拜し、扨も〳〵有りがたや。私凡夫たりし時、おろかにも佛の敎を嫌ひ、鬼としたしみし緣により、則ち、鬼にいざなはれ、共に地獄に落ち入り、浮ぶ期のなき我等をば、母が慈悲にて君を賴み、君又大悲をたれ給ひて、鬼と別れを惜みし我を、無理に此土へつれ給ひ、今又佛果を得しめ給ふ御厚恩、何に比すべき處なし。アラ恐ろしや〳〵、よしなき鬼に緣を求め、よしなき鬼が親切に迷ひ、既に地獄に至らんとせしとて、佛ながらも身ぶるひして、恐れしとかや。是にてとくと合點せられよ。

今の咄の鬼共も、彌次郎を可愛がり、親切にする所は、嘘も僞もあられ共、根が地獄住居の鬼なれば、我住所をよいと思ひ、十分ひいきで、彌次郎をつれて往てくれた所が、地獄ぢやてに、貴樣の馴染の藝州も、なる程汝のいふ通り、親切もあり、誠も有つて、嘘、僞は有るまいけれど、そこが今の鬼の譬へで、汝があのかたへ、勘當受けて引きこして、世話に成りに往た所が、未來永々うかぶ期なく、一生難義で外聞惡く、地獄住居で仕舞はにやならぬ。其婦人の親切こそ、今いふた、鬼の親

切で、却つて汝の仇となる。又貴樣が、いやがつて〳〵逃げあるく。親や一家や、別家の者の異見こそ今の咄の毘沙門天ちや、どうしてなりとも、汝なば只極樂へやりたいのちや。實に汝も筋道分くる粋ならば、此筋道を能く分けゆき、汝が遊所で川ゐる粋を、家内に用ゐて情あらば、家繁昌に榮ゆべし、汝がかの女に立てる義理な、一家・別家に立つるならば、人は悦び、身は安穩なり。汝が女にする孝行な、親にいたさば。母は安心、子孫は長久なるべきに、嗚呼悲いかな、義理も情も孝行も有りながら、すべきにせずして、すまじきに爲し、其厚うする所には。うすくして、其薄くする所へ、厚皮面にほたへる故、終に其身の害となるなれば知らざるや。

本朝孝子傳に載せたる、鍛冶屋孫次郎といへる孝子は、常に母を勞り、背中におひてあるきしゆゑ、普く天下に孝の名を得る。又忠臣の清兵衛は主人の長病なりけるを、背中におひて慰めしより。世の人呼んで忠臣の清兵衛と稱す。又本田善光は佛をおひて、道心堅固の名を得たり。同じ背中で同じおうたに違ひはなけれども、親をおへば孝の名を得、主人をおへば忠の名をとり、佛をおへば道心堅固の聞えあり。然るに帶屋長右衛門は、お半を背中におうたゆゑに、浮名を流し、末代までもそしらるゝ。同じおうた背中に、違ひはなけれども、佛をおへば道心堅固、主・親をおへば、忠孝の人、お半をおへば、惡性なと、今にうき名をかつら川、虎石町の西側と、住みし近所も不外聞、人はわづかの心得にて、このたとへにちがひなく、お半をばおふ其手間で、主・親おへば忠孝と、末代の人の鏡となる。佛や、主・親おふ背中で、お半をおへば今の世迄も浮名を殘す、あほうものの。汝は何れを取らるゝぞ。主親おふはおろかに見えて、お半をおふが羨しいか。親に不幸にして置いて、女に孝行いたすのを、誠の孝ぢやと思うてか。一家・別家に不義理を立てるを、義理ぢやとおもふか。家の衰微は嬉しうて、家をたもつがかなしいか。我身の無事は嬉しうなうて、身の滅亡が悦ばしいか。樂はいやにて、苦がおもしろいか。福をいとうて貧を望むか。親をば捨てゝ女をとるか。一家・一門・別家を捨て、よしなきものと緣を結ぶか。返答いかに。なんと。と問ひ詰められて返答なく、息子、赤面閉口々々。

安樂の眞の傳授は何事も、たゞ一ツ母に身をまかすなり。

こゝろこそ心まよはす
こゝろなれ、心に心
こゝろゆるすな

賣卜先生安樂傳授 終

銀のなる木の傳授

客來りて曰く、先生迫々の觀相人にて、御苦勞千萬、御たいくつの上なれど、むかしから銀のなる木がほしいと、誰も申しますれが、銀のなる木のこしらへやうの、御傳授も候はゞ、何とぞ御傳授を願ひあげます。

翁の曰く、隨分ずゐぶん、我心相の植ゑ所にてかれのなる木も、善のなる木も、惡のなる木も出來るなり。古歌にも、

うゑて見よ花のそだたぬ里もなし、心からこそ身はいやしけれ。

兎角、心の置所なり、むかし〳〵、無可有の郷に、人も知らざる、奇妙奇代の植木を所持し、商ひけるに、或富家の何某、遠方の土産に、めづらしき植木をもち行かんとて、此の變木屋に至りしかば、さすがは變木屋にて、家も主も至つて變にて侍りしかば、富家の某、此家に入りて、何んぞ珍敷き木あらば、求めたしと申せば、主の翁、申すには、珍らしからぬ植木、一本もなし。先づ其木を見給へといふ。富家の某、これをみて、いかさま此木は

變木屋といふ、植木屋ありて、世に珍らしく

世にまれなり、此木は何といふ木ぞと問へば、主の翁の曰く、其木は、基木がほたんにて、其ほたんより楠が出て、楠の枝よりけしの花が咲きて、其けしのはなより松の木となり、松の木より稲となり、いねの穂より櫻となり、櫻の枝よりサボテンが出來、サボテンより杉の木となり、すぎの葉より朝がほのつるが出來、朝がほの花より松茸が出來、松たけの笠よりかぼちやとなり、かぼちやよりずつとのひ出るが藤の花なり、藤の蔓より、桐の木が出來、桐の木より麥となるなり。なんと世に珍らしき木にはあらずや。

何某、おどろきて曰く、扨々、世に珍しき事かぎりなし。拙者が、土産に遣し度きは、學者・雅人・風流家への持參なれば、これらによろしき植木あらば、求め申し度しといふ。主の曰く、左樣な學者・雅人の土産なれば、あのズツトはなの、のびた、高い木がよろしかるべし。某の曰く、なるほど、是はなの高くのびた木なり。此木の名は何といふと尋れ侍れば、主の曰く、此はなの高くのびた木を、慢氣といふ。とかく學者や、雅人は、此高まんの木があたりまへなりといふ。某の曰く、あのにぎやかにみゆる木はなんと申すぞ。主の曰く、あのにぎやかに見ゆる木は、若き衆中のこのむ木にして、若い人にはよきみやげなりといふ。某のいはく、あの木は何々が出づる木ぞ、主の曰く、あの木は元

が酒氣にて其酒氣より遊び氣が出て、其遊び氣より色氣となり、色氣より、さはぎとなり、其さはぎより難儀となり、又節季となりて、メツキ・しやくきとなりて、終には親に勘氣となりて、この勘氣より仕方なきに至るなり。勘當の花の咲く木は是なるが、御望はあらずやといふ。

某の曰く、あのむかふに根がゆるみ、ねぢれし木は何んと申すぞ、どうかおもしろき枝ぶりて、あの木からは、何が出來ます、主の曰く、あの根からゆがみ、ねぢれし木は、老若・男女とも、みな〳〵好む木にて、あの木の名は欲木といふ。ゆゑに天然とねぢれ、ゆがみてあるなり、あの欲氣からずつとでるが、望木にて、其のぞみ氣より勝負木・相場木が出て、剛氣ともなり、惡木ともなりて、終には損氣、なんぎと成りて、世に貧乏の花咲くといふは此木なり。是は專ら世にはやる木なるが、求め給はざるや。

某曰く、私の望むは、御女中方によろしき進物になるべき木もあらば、求め申したし。むかふにみゆる、あのちいさき木は、何んと申します。主の曰く、女中方への御進上ものならば、高きも、ひくきも、あのちいさき木が、一致よろしかるべしといふ。某の曰く、あのちいさき木よりは、何が出ます。主の曰く、あの小き木から出るが、りんきなり。其りんきより鬱氣が出て、其うつきより積

氣ともなり、短氣も出づる。それより狂氣・亂氣ともなりて、歸ぬ氣も出れば、去る氣も出る。女中方の土産ならば、此木が誠に一致よろしいといふ。某の曰く、このりん木にはどのやうな花がさきますぞ。主の曰く、りん木に花はないものぢやが、存知の外に實のいるものぢや。

某の曰く。其實は、どのやうな實が出來ますぞ。主の曰く、丁度燒餅のやうな實が、大に出來ます。

某の曰く、此りん木は、朝夕こえでもせれば成りませぬか、又水にてもふだんかけるといふやうな事でござりますか。主の曰く、水かける事も、こえする世話もいらず、唯朝夕ようてかいつて、たきつけさへすれば、ひとりおのづから、榮え、やかましくはびこります。兎角今は世間に、此りん木や、欲木や、又酒木や、色木や、遊び木や、高慢の氣が繁昌いたしまして、何方にもなき所はござりませぬ。

其方もいろ〳〵と吟味し給はずと、此木なれば求めたまへかせ、いたつてそだて安く、ひとり人が來て榮えはびこらしてくれまするほどに、大低こゝらにきめ給へ。某の曰く、成るほど何れも、おもしろき木に候へども、今何とぞ是等と異りし樹の候はば、見せ給へ。主の曰く。貴樣はむづかしき注文なり。これらと替りしといへば、一向土地違ひの、木を見すべしと、よほどあなたへともなひ、此木は

はとんと今の類とは大違ひなり。心なとどめて、此木を得と見たまへといふ。

某とくとながめて、扨々此樹は根から底からまつ直にて、少しもゆがまず、すなほに長き樹なり。先づ此木は何と申す名の木にて、又此木よりは、何々と申す木が出來ますぞ。主の曰く、此樹何國まてもまつすぐにて、ゆがむ事なし。名は正直木といふ。此正直木よりずつと出づるが、實義と德義、其實義德義より忠義も出で、孝行木も出でまする。其忠木・孝木より出るが、仁義禮木にて、其仁義禮木より出來る花が、見さしやれあの富貴の花ぢや。何んと見事なものぢやない歟。あの富貴の花は四季ともにおちず、しぼまず、おとろべぬ故に、長命木とも常磐木共申しますが、なんと又世に盛んなる、うるはしき目出度樹ではござらぬか。

某の曰く、扨々是は格別にて、なにとぞ〳〵拙者は此富貴や、長命木が求め度く候あひだ、早々是を給はるべし。主。大に笑うて曰く、誰にても皆此富貴や、長命木を望むといへど、求めて歸りては みな〳〵迷惑して、枯してしまふたり、又戻しに來たりする物なり。

其譯といふは、此富貴・長命木は、至つてそだてやうが六ケ敷なり。酒のみ過せばかれてしまふ。色なむさぼれば枯れてしまふ。欲がふかければ損じてしまふ。物に腹たて、短慮なればかれてしまふ。

家業ぶせいなれば、損じてしまふ。おごり・やぶさかなれば、からしてしまふ。朝寢なすれば損し安く、美食をなせばかれてしまふ。足ることを知らざればからして仕舞ふ。りんきをすればかれてしまふ。不忠。不孝は根から丸で失ふなれば、中々以て貴樣も、所詮にようそだて給ふ事ならざれば、是非に止め給ふべしといふ。

某の曰く、不及ながら、我深く相つゝしみ、是非に此富貴、長命木が求めたし。此樹のあたひは何ほどぞや、壹貫文にはうれざるかと申しければ、主の曰く、此安き錢壹貫や、貳貫にて、あたべらるべき。むかし値のよき孔子の時分の、壹貫ならばあたへもすべきが、いまのぜにては、中々あたへがたしといふ。

某の曰く、然らば何ほどの錢にては、あたへ給ふぞ。主の曰く、何ほどの是ほどのといふより、此富貴や、長命木がお望ならば、善を山ほどつみて來り給へと申せしとの、むかしばなし、げにおもしろき事にあらずや。

誠に富貴にも長命にも、なりたくおもはゞ、山ほど善をつむ事なり。司馬溫公も、冥々のうちに陰德をつむにはしかじと、のたまひしなり。此陰德をつむ心が、すぐに金のなる木を、こしらへるのよろづになさけうすくして、不陰德の心相にて、たちまち貧乏の短命のなる木なれば、之を深く愼みたまへ、銀のなる木も貧のなる木も、心のたねの儘所なり。

世の人の心ぞ打出の小槌かな、福をださうと貧をださうと。

此道歌はよく〳〵、汝おぢはふべし。

前かた、困窮の男あり。知識に參じて、我に銀のなる木を得させたまへと申ししかば、知識、忽ち撞木をとりてあたへ給ひしかば、彼の男の曰く、これいかなる義ぞと問ひ侍りしかば、知識答へて曰く、此しゆもくに己が職たるの身をはたらきて、鉦にあたればかれをならして、人をも善人におもむかせ、ぼだいにもいたらしむ。又我身を樂し、休み居れば鉦もならず、身もならぬなり。汝ちしゆもくのごとくにて、たゝきやめば喰ひやむ事なしりて、しゆもくの如く其身をつかひ勞しなば、かせぐに追つく貧乏なく、我身より自然とかれの音は出づるなり。鉦にかれの音ありといへど、しゆもくを得ざれば、鳴る事あたはず。撞木にしゆもくの德ありといへど、かれを得ざればうつことあたはず、人に福田ありといへど、かせがざれば富む事あたはず。人に長壽のありといへども、養生をよくせ

秘傳の種なり。又酒色・剛欲・短慮・短氣に・家業不精に、身を奢り、不忠・不孝に、誠なく、

されば高壽にいたる事あたはず。汝も心のしゆもくなおこたらず、菩提の鉦に應ぜば、福田古今變滅せざるの音を出し、人をも善に導くの、其身其まゝ、金色のかれのなる木にいたるべしと、のたまう。言下に發明して、眞の長者となりしとかや。貴樣も爰の所をよく〳〵合點して、眞の長者となりたまへ。客大いによろこび、頓首して曰く、今日先生の御影にて、我が腹の中へ銀のなる木をうゑましたれば、火難・盜難のうれひもなしと、よろこび侍れば、翁の曰くめつたに油斷めされなよ。ぼんなう・瞋恚の火難もあれば、人心・人欲の盜難もはなはだしと笑ひ終つて眼鏡を袋に納めぬ。

銀のなる木の傳授　終

大勢の中に、ひときは立烏帽子、素襖・大紋、歷々といはれど見ゆる人品こつがら、翁の前に威儀たゞし、罷出でたる某は、山一つあなたの大名なるが、今朝より出席し、だん〳〵と先生のしへを聞くに、いづれもみな〳〵一段の事で、ずんどおもしろい事でおりやる。某にも何とぞ開運の傳授しておたもりやれ。

翁のいはく、開運長久を得んとおもひたまはゞ、我職分をおこたらず、民を惠み、賢者をまねき、小人をしりぞけたまふべし。國の興るや、天、極諫の臣を遣はす。國の亡ぶるや、天、亂人と善諛とあり。恐るべし。是は故人より傳はる本方なり。又家傳の秘方は、儉。忍・根氣の此三つなり。是を大事に守り給へ。開運を願ふ人は、士・農・工・商とも此三つを守り行ふ事なり。儉とは則ち、けんやくにて質素を守り、おごりをはぶき、無益のつひえなきやうに、入るを計りて出す事を知り、ほどよく出入をする事にて、吝しよく、しはきの類にあらず。一人儉を知る時は、一家富み、王者儉を知る時は、天下富むとも云へり。又忍とは則ち堪忍の事にて、よく何事にもたへしのびて辛抱つよく、

我意をたてず、短慮を起さず、身をへりくだり、人にはまけて身を守るなり。佛語にも、忍の德たる事、持戒苦行も及ばずとかや。根機とは世俗にいはゆる上根なるなり。石の上にも三年居れば、あたゝまるといふ如くにて、何につけても此根機がよくなくては、萬事とも成就する事あたはず。故に世俗の言にも、運は根なりともいへり。誠に立身出世するも、銀をもうけるも萬の藝能・學問するも、根機つよく、上根に修行すれば、どんな不運ぶきようでも、つひに成就するなり、此成就した所を、開運共、出世ともいふにおらずや。

故に、太公望の困窮に、不運なりしも、文王にまみえ、開運を得給ひしは、八十年の上根と、よく困窮をたえしのび、儉を守りて、天命に順ひ給ふゆゑなり。是にて得と合點し給うて、開運をせんと思ひ給はゞ、賢を賢とし、職分出精はいふに及ばず、此の儉・忍・根氣を守り給へ。是我家の秘密なり。

大名の曰く、我、大名と生れたれば、生得、儉約・質素をしらず。我、人の上に立ち、おもふ事自由なれば、物にたへしのび、負けてゐる事あだはず。我生れついて病身・虚弱なれば、元來根氣よわし。又賢人をまれき、小人をさけ、我職分を大切にする事は、翁に傳授を受けず共、我にかぎらず、世の人のよくしることなれば、なんぞ奇とせん。是等の傳授をのけて、外に心安く、手ちかき開運出世の傳授あらば、つげらるべし。

翁にこ〳〵笑うて曰く、むかし天竺に知賢漢といふ者、三重の樓を普請し、愚頓漢此樓を大いにうらやみ、亭主に申しけるは、此樓をこしらへし番匠を、我にかし給へ。我、過念に此樓に二重ましたる五重の樓を建てい其五重の上にて、貴君を御ちそう申したしといふ。知賢漢承知して、翌日早々番匠を遣しければ、愚頓漢よろこび、此大工に急に五重の樓をたつべしと申し付けるに、番匠も、日夜せいいだせしが、一月ばかりにて、下の一重出來せしかば、早速愚頓漢をまれきて、やう〳〵と一重でき上りし旨を申し、見せければ愚頓漢是を見てて、腹を立て曰く、我は此樓の五重目の上にて、客をなさんと、いそぐなるに、汝、何とて其心を知らざるといふ。大工がいふ。私、隨分其儀は承知仕るなり、それ故に急いで先づ一重は出來せしなり、當月中には、二重目凡そできるべし、來月中には三重目出來申すべし、三重目迄出來候上は、四重め五重目、心安く出來つかまつるなりと申しける。愚頓漢いかつて曰く、我客を早くせんといそぐは、一致上の五重目が入用なれば、汝、其心を知りて先づ、上の五重めを一番にこしら

へ、其次に四重目・三重目・二重目と出來し、今日できし、下の一重こそ、一致あと、とんとのし
まひにこしらふべきな、最初にいたせしは大い
大工あきれていはく、五重の樓をたつるに、上よりもさきへこしらへて、段々下へたつるといふ事の
なるべきや。五重は勿論、二重の家をたつるとても、下の一重よりこしらへずに、出來あがるべきか
と申しければ、愚頓漢の曰く、下の一重より上へ、次第にたつる事ならば、汝が手をからず共、素人
の我々にもたつるなりと申せしとかや。
此咄しの愚頓漢と貴君と、なんぞことならん。おろかなるかな。貴君にかぎらず、世の人皆、下
の一重より立つる事をせずして、只五重目の上を、手ぬらさずに、得ん事をのみ願ふなり。是無理に
て及ぶ事にあらず。我職分、勤行といふ下の一重より、次第に五重の立身開運も至るべきに、勤と
めず、勞せず、忍ばず、儉ならず、根氣をつめず、遊び樂して、開運出世といふ傳あるべきや。
貴君、實に開運を願ひ給はば、何事にもよくたべしのび、つよく萬事を堪忍するといふ地場をかため、
職分を大切に、民を惠むの一重目を元とし、賢を招き、惡を去る二重めを次にいたし、儉を守りて
つゞまやかに、しつくりとした三重目を建て、此四つを出精し、忘らず、守り通して止まざるといふ

上、こんきの四重目出來せば、此上もなき開運出世の五重目に至るなり。四重なくして、五重目は
かり虛空に建つといふ事のあるべきや。たとへば、大病人の藥も用ゐず、針・灸もせず、不養生
にて、息才に、長壽ならん事を願ふと同じ事なり。
烈士、くろしまずんば、なんぞ名をなすにたらんやといふにあらずや。豐臣秀吉公の剛運なる
も、松下が奴よりして、段々と一重づゝ勤行し給ひて、終に五重の雲の上なる、太閤に迄至り給
ふ。韓信が豪勇なるも、市人の股をくゞりし、賤しき地場より起り立つて、終に五重の大元帥に至
りしなり。
此立身出世は何故ぞ。儉・忍・根氣のそろふが故なり。むかし、或者困窮に逼り、何とぞ運をひら
き度く、日夜心をくるしめしかど、かひなく月日を送りけるが、ふと或時、運は天にありといふ事を
思ひだし、早速ゆきて運をもらひ得て來るべしと、すぐさま天に登り、何れによりて運を得んとおも
ひしが、爰かしこといはふより、毎日々々御目にかゝり、親代々より御近付の日輪・月輪の御方へ參
り、愼んで拜し奉り、何とぞ運をあたへ給へと信心堅固に願ひければ、日月は何れも丸き御方にて、
ころ〳〵と笑はせ給ひ、汝びたすら願へども、是を遣はす持ちかへるべしといふて、別にやるべき運

といふものゝあるべきや。然りといへども、亦運をよくし、困きうをまぬかれ、福壽長久の秘密・秘傳なきにはあられど、汝にかぎらず、下界にうまれし、人間は、此傳を聞くといへども、所詮が勤めおこなふ事かたければ、無益のことなり、早々歸るべしとの給ふ。或者、涙をながして曰く、遥く來りて是を願ひ奉るなり。何とぞあはれみ御傳授し給へ。日月ともにの給はく、さらば汝が心せつなるにめでゝ、傳授すべし。汝是を聞くといへども、身に勤めざれば益なし。つよく勤めはげむべし。今こそ大切の家傳なれど、おからさまに汝にかたらん。

そも〳〵運といふ文字は、めぐりうごくといふ文字なり。此運の字に天といふ字をうへにそへて、天運とこそいふなれ。此二字は天の心に順ひ、めぐりうごくといふ字義なり。此字の心を合點し、身につとめ行ひ持つを、天運をよく得たるとはいふなり。此、天運をよく得れば、災たちまち吉事と成り、貧窮變じて富貴と成り、壽命長久うたがひなし。此傳大事の秘事なれば、穴賢〳〵人には秘して語り傳ふな。

或者、感心九拜して曰く、此運の字の通りをつとめ行ひ、天の心にしたがひ、めぐりうごくとは、如何なる事に候や。又此道理を合點して身に行へば、富貴・長命・子孫永久なる譯を御聞せ給はるべし。日輪・月輪、言をそろへての給はく、汝知らずや、天運の通りを近く勤めおこなふものは、品日月なり。天の心に順ひて我職分に毫末ほどもたがはざるなり。是天運を身につとめ、はげみおこなふ所なり。故に我は天運上運を得て、富は世界を丸でたもち、尊き事は日天・月天、天地の間に君たり、王たり。名は大千世界に知らぬものなく、勢ひは乾坤をつらぬき、長命なる事は古今不易不滅なり。子孫多き事は萬物すべて、我子孫なり。家臣の星辰・森羅萬象、我を守護し、よく順ふ。世に我々程、果報なる者はなし。

此果報は何ゆゑなるぞ。前にも申せし天運を身につとめ行ひて、天のさしづ、我職分・業體のみに苦勞して、めぐり動いて間斷なく、是程はやる茶の湯もせず、日々門通れども、ついに生洲へ往たこともなく、酒色は勿論、淨るり見物・俳諧・亂舞・遊藝・遊所・諸勝負事は、猶々けし粒ほどもしら雲と、只青雲の衣裳の外は、萬劫末代、質素儉約にして、少しもかざりつくろはず、元來柔和を體として、折々にこゝ〳〵しては見すれど、つひに人に角見せず、いつもまろ〳〵まろくして、わるい天ぢやの、きたない天ぢやと、毎度惡口いはれても、又犬・猫迄に我顏を踏れても、むさき二便をかけられても腹立たず、諸事堪忍を主として、いきどほらず、只萬物をあはれみて、理非明白に世界

をてらし、職分の外餘念なく、いつ隱居しやうと云ふ心もなく、萬劫末代、根氣よく、めぐり動いて苦勞勤行するが故なり。

おろかなるかな。人間は我等がごとく、職分に出精もせず、儉約もせず、柔和にもなく、諸事萬事に堪忍もせず、元來苦勞勤行に、根氣をつめぬのみならず、あそびほだへて困窮し、運がないの、天道があはれまぬと、不足だらだら、唯天道は善のみにて、人生るやいな、性善といふ大上運の元手を、一人一人にあたへおけば、其性の善なるまゝにめぐりうごいて居さへすれば、何にくらからず、富貴・長命なるやうに、念に念入れ生みつけて遣した身を、いらざる己が人欲にて、性にたがひ、運はくじき、身をうしなふぞ愚なる。

是にのみ、我々も胸をいため苦しむなり。運は天より與へてあれど、なす事は人にあるの勤なれば、なさいるにこそ、こまるなれと、日月ともに御聲くもり、あめさめ〳〵となげき給ひしとかや。

此はなし、世にありがたき咄しにて、此日月の示し給へる慈教の如く、運はめぐりうごくなれば、已が職分は餘念なくうごきめぐり、働きさへすれば、開運を求めいでも、立身出世をねがはいでも、天道の惠みをかふむり、永久なるに違ひなし。故に我職分にうごき、心をめぐらし、賢に近より、儉約を守り、諸事萬事、堪忍をつよくし、何事にも倦みおこたらず、根氣つよくつとむるは、是開運の傳授なり。是にたがひて、心から火にばしくばり給ふな。

大名の曰く、我實に開運の御傳授、承知いたした。是より丹精致すべし。だん〳〵の御教示、忝なう生涯のよろこび是にすぎず、かゝる事をうけたまはれば、切度はげみ勤むる心に相なり申せと、我、元來柔弱にて、早この席を立てば、御教訓をわすれ、聽聞せし善言を、皆々此席に忘れおいて、行き申すに、こまり申す。是も先生の御傳授にて、忘れぬやうの教諭あらば示し給へ。

翁の曰く、むかしある所に知識ありしが、其教化を毎々おこだらず信心し、聞きに出る親父ありけるが、近頃はいかゞしたりけん、たえて說法の席にきたらざる故、知識、不審に思ひて、わざ〳〵彼親父を尋れて至り給ひしかば、親父大いによろこびけて近頃は說法を、たえて聽聞には來らざるやと申し給へば、親父の曰く、されば其儀にて候。私、まい〳〵御聽聞に出で候て、有難き事此上なし、然るに御聽聞申し候座切にて、其座を立出で候へば、すぐに忘れて一向に覺えず。餘り〳〵ふしぎにも忘れ申し候故、或學者に此旨を咄し尋ねければ、其學者、私が耳をつく〴〵と見て、それは其筈の事ぢや。貴樣の耳が元來味噌こし耳といふものにて、

何をきいても、肝心の正味はぬけて、粕ばかりがのこるほどに、以後は聽聞する事を止められよ。返て粕ばかりが殘りてあじいと申されけるを、私も甚だ以て尤なる事とぞんじ、其後は參詣もいたしませぬと答へけるに。

知識、是を聞いて曰く、それは〳〵、味噌こし耳とはよき耳なり。不斷たえず法義といふ水の中に、ひたと、ひたしつけておけば、内にも外にも、一ぱいになるほど、只々怠らず、ひたとつけておかるべし。折々止めて引きあげると、粕のみ殘りて味がもれるぞと示し給ふ。尊ふとき事ならずや。貴君も此の如く、賢者に近より、たしへの中に、ひたと、つかりはまり給はゞ、記憶も、覺もいりませぬ。丸でずんぶり、賢者の中につかり給へ。殊に虚弱の御生れなれば、カネモウカルの良藥を、口に苦くとも堪忍して、根氣つよく呑み給へ。

先生さま、御休なく追々の御傳授、有難き仕合せに存じます。是に、まかりひかへられましたは、私主人、蓮野實之助と申して、當年廿四歳になられます。私は忠右衛門と申しまして、蓮野氏代々の別家の者でございます。此實之助殿、幼年にて御兩親方にわかれられました故、およばずながら私共がうちより、玉手にさはるやうにして養育いたします所が、十五歳・十六歳迄は、とかくうと氣で、

氣分おもく見えまする故、出入の醫者や道具屋などたのみまして、氣なはらさすが何よりの養生と存じますから、開帳・遊山にも御出でなされと、無理無體につき出しましたが、此翌年の夏頃よりは、うつてかへて、どもこもならぬ飛助になられまして、日夜飛び出て留守故に、御一家力や別家共が、意見申しますれば、隨分承知致されまして、少し家内に居られますかと思ふうちに、チヤンと飛で出て行かれますにつき、亦々意見を加へますれば、自分も實々十分愼む心でござりますれど、すぐに飛びぬけられますて、是は自然病氣の事やらも知れぬと、わざ〳〵、上方より大醫をまねき、容體を見てもらひましたれば、其大醫の申されますは、是は勿論病氣の事にて、世にまれなる甑帶病と申すものにて、これを病めば何んとなしに、身がかるうなりて、ひやう〳〵として尻があがり、只ふら〳〵と出て行くものなりと、云はれましたにつき、此御藥を三四年も用ゐましたが、聖はともきまぜぬて、是は見立が違ひましたと、そんじますから、同伴いたしました。先生樣にはかれて人相、御高名でござりますれば、主人の病根御觀相くだされませ。

翁、眼鏡をとり、實之助殿是へ。これへ。何、忠右衛門どの、主人の觀相とくとしましたが、其醫者のいはろ〳〵通り、全く是は瘟癀病でござる。見立はあふたが、療治の仕方が違ひました。

忠右衛門の曰く、何とぞ御醫案御きかせ給はるべし。

翁の曰く、此病は難治の症にて、良藥の意見なしても、なまづな押へるやうに、ぬらりくらりとして用ぬ故に、いかなるよい身分でも、段々となりさがりて、身が輕うなつて、ぶら〳〵と流浪、困窮して、世を凌ぐといふから起つて瓢箪病と故人も名づけ給ふなり。此病、三王・五帝の時分にはなき病なれど、當時は世間一統に、此瓢箪病と癇症とぢや。療治もあれど藥がよほどむづかしい。

忠右衛門がいはく、大人參や、廣東ならば、澤山に所持がございます。

翁の曰く、大人參より、大人につけるが一致よけれど、ずつと落ちて廣東とゆかうか。いやそれより、すつぱりと勘當と行くが、手みぢかでよかろう。是でなくば、此やまひは所詮治すまい。

實之助、ひたひに青すぢ立て、癇てき起して曰く、いらざる翁の御世話なり。我、輩俊出おろくといへ共、青樓のあそびのみにて、役者・藝者を腰つけに致されば、誰もはでなといふものもなく、年分わづか五百兩か、七八百兩あればよき事なれば、我身代ではさいさいの事なり。我には銀あり、貸付あり、掛屋舗あり、舟あり、川あり、山あり、田地あり、其他いろ〳〵家督あれば、こゝ十代や廿代、三十代、遊びくらしたりとも、翁が方へ無心にはまゐらぬから、いらざるくらうに心氣をつひやし、

五臟をもんでわづらはぬやうに、氣病一切丸か、天壽保元丹でものみ給へ。

翁の曰く、瓢箪病は、兎角、鯰おすやうで、ぬらくらぬめたな脉なしにて、どうも藥がまはらぬのぢや。翁が醫案が、あたつた歟。早やめんけんをしてくれれば、とんとすてる病人でもないが、まだ〳〵めんけんしてこずば、今少し療治にはかゝられまい。

實之助はらたて、金の烟管を噛ひしぎ、盆のうへになげつけて曰く、翁はいろ〳〵と、我をてうろうするこそ無禮なれ。汝が、一代喰ふものもようくはずに、篤實・勤行してくらした所が、子孫永々びんぼ人なり。我は十分おごり〳〵て暮した所が、子孫永々家督もちなり。こゝを以て見る時は、我は天よりも果報を持つてうまれし身なれば、難義する事なき運なり。其上金銀・家督、仰山なれば困きうする事決してなし。是にも難義・困窮するの道理ありて、翁がいはるゝ事尤ならば、我あやまりて、此後翁が弟子となりてをしへをきくべし。又返答が分明ならずば、今より汝を辨慶にして、中や、南の味知らすべし。

翁の曰く、おもふ通りに發表いたした。そろ〳〵療治にかゝつてやらう。井の中の蛙といふも職過ぎる。厠の中のせんち蟲、糞より外の世界を知らぬ穀つぶし、翁がいふ事、せんち虫の耳へはいらぬ

道理なれど、心を治てよくも聞くべし。目くさり銀の五十萬兩や、百萬兩の身代を、大きな事とおもひて、十代も二十代も長久なりと心得ること、是、糞蟲の糞蟲たるの了簡なり。汝が身代とくらべなば、一毛と、九儘萬々萬牛より、まだ〳〵大きな大違ひな、富は四海を得て、果報は天子と生れ出たる、殿紂王でも、肝心の人の諫を用ゐず、奢りて二代つゝかず、平家の盛なりしも、宗盛が愚將とおごりに滅してしまひ、北條九代の大家督も、高時がおごり無道で破滅となる。かゝる高大はかりなき大身體でも、上運でも、ちよつと一心があやまる時は忽ち家の身を失ふなり。

家督といふは、金銀・家舖・山・川・舟や田地にあらず。只々己が正根玉なり。何ぞ金銀。富貴によらんや。故に漢の高祖は、なんにもなしの農夫なれども、我正根玉といふ家督を以て、つひに天下の富を得給ふ。源頼朝は、一石の所領もあらぬ流人なれど、我正根玉といふ元手を以て、終に日本惣追捕使・右大將にぞいたらせ給ふ。今汝、少しの金銀・家督を所持したりとも、肝心の正根玉に家督もなく、よい元手もなき故に、瓢箪病の道からすしてなり下り、なりさがり、かるき身となり、ぶら〳〵と世に流浪して、空也堂の門前で鉢坊主でもするものぢや。

實之助、眼血ばしつて曰く、汝、まだ〳〵悪口が申したくば、十分いへと齒をくひしばり、肘をはれば、翁のいはく、或貴人たはむれに、糞蟲を十ばかり取つて、錦の蒲團の上にあげて、伽羅木たそばにて薫きければ、糞蟲、皆々迷惑し、互に咄合ひけるは、どうでも爰は、まづしき百姓の家ならん。きたなきさたなき、むしろの上に、我等をおきて、かたはらにて、ひませの糞をくむなりと、雛義せしとかや。此咄しの如くにて、汝も、厠連中なれば、我いふ事が汝が耳には、悪口と腹が立つや。又我耳には、汝なば、旦那だんなとへつらうて、よろこばす言が、悪口とは聞えるなり。それは格別、爰に一ツの咄しあり、近頃の事にありけるが、石部金吉というて、金甲の細工する職人ありけり。此男生得氣性かたく、質素・けんやくにて生れて一度も美食・遊興せず、日夜かせぐのみにて、勘略なる事は、常に燈心を三まいにおろして、火をともし、香のものを鰕かきでおろして、其一筋を、茶漬壹度の菜と定む。萬事是に應じければ、諸事つひえなく、年をつみて金子三百兩たくはへける。亦此隣家に遊美泰庵といふ醫者ありて、あればありぎり酒にして、米のある間はよびに來ても、療治にゆかず、あそびあるき、呑みあかす放蕩人ありける。然るに或夜金吉方へ盗賊這入りて三百兩の金をのこらずとりて行末知らず逃失せける。其翌日、遊美泰庵きゝて驚き

かあいや金吉がくふものも喰はずに、ためし身の、あぶらのかたまりをとられ、定めて人心地もあるまじと早々見舞に行つて見るに、金吉は、泰然として常にかはらず、ますます細工を精出して、何の苦もなきあいさつに、泰庵もびつくりし、扨々貴様は別人かなて寸陰も遊ぶ事なく、身のあぶらをしぼりくて、年々かいり溜められし銀を、サツパリとうばひとられ、少しも動せぬ其ありさま、古今無雙の豪傑なり。我等ならば亂氣すべし。

金吉が曰く、今三百兩の銀はとられうしなひたれども、我には又此金をこしらへる元手・家督の殘りあれば、心勞もせず。今貴公が、三百兩の銀を得給ふよりも、我三百兩うしなひし方が、家相續には長久なれば、勞する事にあらず。泰庵いよくおどろき、かくいはるゝはいかなる譯ぞ。聞かせ給へ。金吉が曰く、されば其事に候。我等は生れ付いて、酒色・遊興と資事が大きらいにて、質素・儉約と、職分をかせぐ事が好物といふ。正根玉に、元手と家督があれば、此元手、かとくから、三百兩や四百兩は、年をつめばたまるに違ひなし。又貴君は爰にて、三百兩・五百兩、人より貰ひ給ふにもぜよ、元來、酒色・遊興が大好物にて、業體がきらひといふ、正根玉が生れなり。此正根が、一代こんきうするの、家督元手なり。此元手を所持し給ふ故に、よし金銀・家督が何ほどありても、無益の事なり。まして金銀、家督なき貴公なれば、今より心を改め給へと、示されけるとなん。

此咄しおもしろき事ならずや。よくく勘辨しても見よ。

開運出世傳授　下の卷

翁の曰く、扨又貴樣に尋ぬる事あり。汝が一門・別家の中で、一致大切におもはるゝはいかなる人ぞ。

實之助答へて曰く、今橘に一人の伯父貴あり、是は我家の恩人なり。其をぢきと、此忠右衛門なり。忠右衛門は我を誠に子の如く、おもひての深切・忠心世にまれなり。

翁の曰く、其大切なをぢきや、大事に致さるゝ忠右衛門殿に、毒藥をのませ、ぢりくと命を取るものあらば、汝は定めてよろこばるゝ歟。

實之助、聲を高くして曰く、我なんぞ、是をよろこばん。此二人にあだするものあらば、命をすてゝも我是に敵せん。

翁の曰く、予天眼通を以て見るに、此兩人があるうちは、汝が家も、滅し、潰しがたき故に、此兩人をころして後に、自由自在に汝が家をほろぼさんとて、此二人をねらふたり、又毒藥をぢくく

とのますものあり。汝、實に知らざるや。

實之助、おどろきすりよりて曰く、此二人は我家の柱なり。柱なくば家はたもたじ。然るに此二人をころさんといふ、人畜・大惡人はいかなるものぞ、さとし給へ。

翁の曰く予、其惡人をいふとも、汝いかんともようせざる事明らかなれば、申しても益なし。又其惡人にたのまれ黨し、助太刀してともに二人をうしなはんとするものあり。予先づ、是を申し聞かさん、

實の助の曰く、扨々にくき者共かな。助太刀するは何者ぞ。

翁の曰く、二人を殺す助太刀は、まづ壹番に汝がなじみの女郎のあひ方、次に藝子・牽頭、其外汝にこびへつらふもの、おもねり順ふ者共なり。然れども、是等は元來惡心なし。よんどころなく張本人にくみせし迄なり。

實之助が曰く、さて〳〵惡きやつばらかな。とてもの事に張本人を聞かせ給へ。

翁の曰く、今は何をかくすべき。あからさまにかたるべし。今の兩人のみならず、少しにても汝がためになる者は、皆うしないころさんとする大惡の張本は蓮野實之助と云ふ奴なり。こやつ、元來大惡人にて、蓮野の家をつぶさんとて、晝夜飛び出で、金銀を水の如くにつかひ、早くへらして、一日

なりとも、蓮野の家をたゝんでしまはんとすれど、右の兩人ありてよく家を守る故に、此家中々滅れまじとおもひて、酒色・遊興といふ徒黨一味をこしらへ、身持放蕩、瓢簞病といふものを以て、右兩人を心痛させ、氣の毒といふ毒藥にて命をちゞめころしかけてゐる事を汝は知らずや。

孟子にも、杖と刃とことなる事ありや。ことなる事なしと、いうありて、刃でころすも、眞綿で首しめてころすも、又心痛・心勞をさして、命をちゞめ、みじかくするも、ころすになんぞ、かはりはあらんや。あゝかなしきかな。世の中の息子・手代、皆此通りにて己が酒色や、遊興のために、先祖の碎身粉骨の家をほろぼし、主・親を始めとし、己がためになるものには、あゝ氣の毒、扨も氣のどくやといふ毒殺を以て、心勞・苦痛させて命をとるは、盜賊よりも罪猶大なり。

むかし或大儒先生、門人にいざなはれて、始て芝居を見に行き給ふ。歸り道にいたりて曰く、今日の役者中にて、我は只色男になりし敵役が、よくも出來たりとおもふなりと、申されけるに、皆々合點ゆかず。色男になりしかたき役とは、いかなる事と尋ぬれば、大儒先生曰く、各々見たまはずや。艶男がたの放蕩よりして、家國亂れ、忠臣には切腹させ、貞女には自害させ、傾城にふけりて流浪困窮す。今日芝居の大さうどうは、此惡人よりおこりしなりと、示されけるぞ尊き。

汝も、此色男形と同じ仕打にて、汝が身持はうらつは、先祖にあだし、子孫をほろぼし、恩ある伯父の命をうしない、忠臣の忠右衛門が胸をひきさき。心勞さす事、比干をころせし紂王にもおさ〳〵おとらぬ、汝ゆゑ、家をほろぼし、大切の二人をころす、大惡人の張本は、蓮野實之助なりと、いふた翁があやまり歟。汝が家の敵こそ、實之助なれ。實之助が身に惡事をそへて、敵となるは汝なり。此惡人を何れからなりとも、成敗せずんば、ふびんや兩人ともに、命をとられ、いかなる大家も日向の氷、汝、先刻伯父と忠右衛門の二人に、あだする者あらば、命をすてゝもきかじといはれしが、今其敵明白に知れたる上は、汝が成敗見たし〳〵。是れでも翁が不道理か、不道理ならば汝が辨慶とやら、忠信とやらにもなるべし。汝、返答明白ならずば、今より汝を我學僕となして、道や聖人の味、知らすべし。

實之助、赤面・吐息、感心して曰く、誠に我は惡人なれば、生きて世界をふさげんよりは、翁の前にて自殺すべし。

忠右衛門おどろき、呵つて曰く、其癇症がある故に、酒色がすぎばどのやうな、家の大事が起るかと、私を始め、一門別家中の命が日々ちゞまります。それゆゑに、こそ先生が汗水ながして、先刻から、カネマウカルの良藥を、手をかへ品をかへ、いろ〳〵としてのまし給ふと知り給はずや。是より心をあらため、順ひ給へ。

實之助、手あらひ口すゝぎ、三拜九禮して曰く、火にうるほふごとく、我、ばからずも先生に近より、口論いたすと思ひの外、良藥をいつ知らず呑されて弧鼈病をおよそ治したり。御慈敎、中々、御禮、言にのべがたし。此上は門人に加へ給ひ、開運出世、家相續、子孫長久の傳授し給へ。

翁大いによろこんで曰く、貴樣もよほど大病ながら、內損・薄情の性とは違うて、心の臟にまだよい所があるをたのみに、手みじかに大劑劑を用ゐたに、早速應じて御仕合、世の中には今朝から申す通り、心の家督・心の元手より、外に賴にする者はないほどに、翁に順ひ、見聞の二ツを工夫し、我、本心にも近づきになつて、見るべし。

爰に眞一ツよき咄あり。今はむかしになりけるが、或田舍に兄弟の者ありけるが、其父死去の時に、銀子六貫匁ありけるを、兄は四貫匁とり、弟には二貫匁遣し、別家させけり。兄は元來柔弱にて、人が無心言へば、ふと銀をかして、とられもしたり、父我もうか〳〵とあそび、小なぐさみや、酒呑

んで、無益に日を過し、農業を怠りし故、不仕合となり、親よりうけしかれも、田地へらし、困窮は玉りぬ。又弟は剛悪の生れつき故、さまん〳〵と奸曲・非道の事をなして、金錢をまうけ、勝手よくくらしける。然るに此兄、或としの冬、御年貢の銀につまり、致かたなきまゝ、弟が方に行きて金子三兩の無心をいろ〳〵と手をつきて朝より夕に至る迄たのめども、弟きゝいれぬのみならず、悪口しけれども、心にかけず。猶ほおり入りて、弟が妻にとりなしを頼みければ、弟が女房おほきに腹をたてい申しけるは、扨々埒もなき人かな。親のゆづりは過分にとりて、今たらぬとて弟を頼むとは、おろかなる事なり。我、おほいに憐愍を以て、銀はかし申さずとも、これを合力すべしと、錢百文をほりつけしが、兄が眉間につよくあたりけるに、此兄いかり、なんの言もなく、すぐに我家へかけ戻り、算司の脇指取出し、小脇にはさみ、門口さして馳せ出るに、兄の女房、大いにおどろき、顔色かへて、何國へ出で給ふと、一代のちからを出しで抱留めけるに、兄なみだをながして申すには、汝も知る通り、此度、銀につまり、仕方なき故、弟夫婦が邪見は知りながら、彼が方に至り、今朝より今迄頼むといへども聞入れぬのみならず、さまん〳〵と悪口し、其上弟の女房が百文の錢をなげうつて、かく額にきずを得し、此無念やみがたく、すぐにかけゆきてかれら夫婦をころし、我も死すべし。爰をはなし本望をとげさすべし。妻おどろきながら心をしづめ、一々御尤にさふらふなりさりながら、せいては、こしそんじ申すなり。心をなだめてともにすべし。ぬしが弟をころしたまはゞ、我は又弟嫁をころし、夫婦して本望をとぐべし。今行きては利なし。深更に及んで參るべしといふに、夫も尤なりと随ひぬ。

扨女房申しけるは、はからざることにて、主も我も命をすつるなり。是に付けても、是迄大恩あるは、資殘して今所持の田地なり。このおかげにて今日まで命をつなぎし事なれば、一生の名殘にいとまごひに行くべしとて、二人ともに田地に至り、此迄の禮を申し、又二人共今宵はからず命をすつる譯をかたり、いとまごひして拜しけるに、フト女房けはしく夫に申しけるは、今の今迄、此田地が大恩なりと思ひしが、今心がつきて見れば、此田地こそ二人が命をすつるは、弟ご夫婦が邪見より、事起れり、其又元は此二人無心の元は年貢につまりし故なり。年貢につまりし元は、此田地めがおもふ樣に出來ぬ不作からのことなれば、段々元をさがせば、弟夫婦は敵の枝葉にて、悪い根本の敵はこの田地なれば、枝葉の弟夫婦を跡へまはし、根本の大敵の田地を、貰めさいなみ申すべしと申しけるに、夫も尤なりと同心

し、翌未明より夫婦、鋤・鍬をかた行けきと、悪き田地め、元はおのれが不作からおこりて、二人が命をすつるなりと腹を立て、ほりかへし、つきかへし、扨つぎには此田地を弟夫婦の身になぞらへ胥の穣襄が、衣をさきしかくにて、此田地のこゝを、弟のどん腹となぞらへて打たゝき、ほりかへし、又愛が弟の嬶がおほきなふご尻ぢや、ミチヤクチヤの、杓子づらぢやと思うて、ほりかへし、打かへし、腹立まぎれに、日夜寝食をわすれて、さまざまくと田地をなぶり、手をいれし故にや、四五十日もするうちに、次第に田地のすがたも、よくなりけるに、女房、夫にむかひて曰く、先日より二人が腹立つまゝに、精出して耕せし故にや、殊の外田地もよくなりたれば、今年はなんでも上作・豊年ならんとおもふなり。

愛をおもへば、二人の敵の根本は、田地なりとおもひしに、田地は此頃のやうに、油断なく精出せば、是此やうによくなれば、全く田地が知つた事でなし。田地は無心なる故に、此方の情・無精にてよくもあしくもなるものを、それを知らずにうかくと、家職無精に遊んでござるこなた様の、そばに付添ひながら異見をせず、此様にこんきうに至らせましたと、弟公夫婦も、銀も、田地も、敵ではござりませぬ。

眞實の、おまへの敵といふは、つよく異見をよういたさぬ、私こそは敵なれば、御いとまくだされませと申しけるに、夫もつくくと考へて、なるほど二人が、命をすてゝやうといたしたは、弟夫婦が邪見から、其又本は、己が銀につまつたから、て、農作に無精なから、其おれが無精は、其方が己に異見せぬ故といやろけれど、我身が己をいさめ、異見はたびくなるにそれな用ゐず、用ゐぬから家業無精、かげふぶせいゆゑに、こんきうし、こんきう故に弟に無心をいふ。無心をきかぬから事おこりて、彼等をころし、我も死するのみならず、そなたにも、命をすてさせやうとした、大悪人のあだ敵は外ではなくて、即ち我なり。

弟夫婦でもなく、田地でもなく、其方ではなほくなく、己が大のあだ敵といふは、己なる事が、やうくと今知れたり。今日迄うかくとして、困窮させ、いろくと憂目にあはせ、其上人をもこゝろし、我夫婦が命をすてさせんとしたる、にくいくと大悪の我敵は外にもあらぬ、我なりと知れしこそうれしけれとて、

是よりは、我身を我が敵と定め、朝の寝むたきも、己がやうなにくい敵に、朝寝をさしておくべきやと、未明より無理におきて、身をはたらき、夜の早く休みたきも、己がやうなにくい敵を、うまくと

と休すべきや、と夜なふかして、夜仕事をいたし、うまいものゝ喰ひたきも、己がやうな悪い敵に、美食をさすべきやというて麁食し、灸のすゑともむなきも、己がやうににくい敵に、遊興さすべきやとて。よいきみなりとて灸治し、物見・遊山のおもしろきも、我身でわが身を敵として、日夜おこたらず、麁食・麁服にて、少しの遊びつひえなくかせぎければ、せぐにおひつく貧乏なく、年をかさねて、此所にてならぶものなき、長者と栄えくらしけり。

然るに彼弟夫婦は、うかめる雲の、銀もうけなりける故、今はおとろへ、こんきうし、今日の烟もたてかねけり。此やうすを兄の妻傳へ聞きて、夫に申しけるは、儀の様子なれば、金子二百両ばかり、御恵みて遣はさるべしと申しければ、夫、不承知なりけるに、女房の曰く、弟公に先達て、けつこうなる元手をもらひ給ひたればこそ、今かゝる富貴となり給ふにあらずや。然れば此度、其恩がへしに、銀なめくみあたへ給ふべし。

夫の曰く、そなたは何を申さるゝぞ。弟夫婦は、某がわづかの無心をきかず、悪口し、其上錢をなげうつて、我ひたひに今にきずあと此通りなり。然るにけつこうなる、元手をもらひしとは、たはむれもことによるなりと、不興のなりけれども、

妻の曰く、されば其儀にて候なり。先達て、無心に御出の時、弟公が快く銀なかし給はゝ、まづうれしやと、當分のがれにて、又うか〳〵と日を過し、今頃にはいかな難儀、こんきうにも至るべきに、弟ご夫婦が、邪見・無得心にて、悪口也、あまつさへ錢をなげうつて、我ひたひに、いきどほりを起し、其怒が元手となりて、かせぎ給ひし故にこそ、かゝる富貴・安心を得給ひしにあらずや。是まつたく、其時のつらかりしは、御身の開運出世にて、けつこうなる元手をもらひたりとは、おもひ給はずやと申しけるに、夫も横手をうつて、賢なるかな、汝がいさめ。おろかなるかな、我心。元手といへば、金銀のみとおもふこそちがひなれ。弟が我につらかりしは、誠に大いなる元手をもらひしにて、それよりして、身をつゝしみ、銀のつるに取つきしなりとて、よろこび、すぐに弟が方へ行きて、此道理を一々かたりて、金子三百両出して、弟夫婦にあたへければ、弟夫婦大いに恥ぢ入り兄夫婦が善心に化せられて、心をあらため申しけるは、ありがたく候へ共、今此大金をもらひなば、又此金がある故に、生れつきの、大欲心・非道が出て、天理にそむき、此上いかなる難儀に至るべきも、知れざれば、まづ〳〵金子は、御預りくだされるべし。不和の中也、わざ〳〵銀まで持つて來り給ひし御懇情の有難さ、すぐに我元手として、相つゝしみ、正直・正路にかせぎ申すべし。銀があ

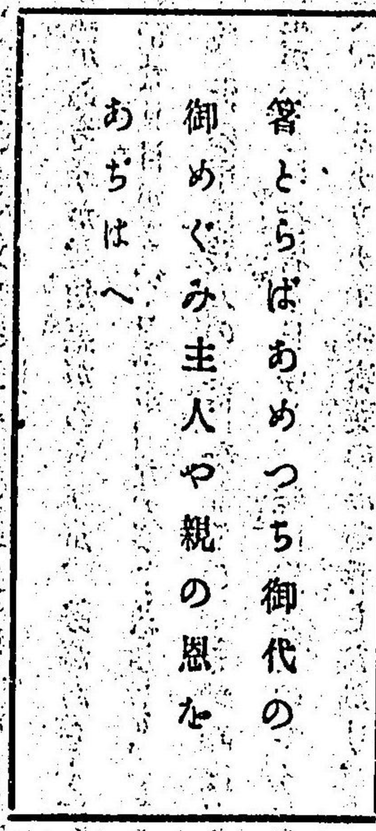
れば返つて怠りの心生るなり。我々も兄貴の吉例にならひ、困窮を元手として、かせぐべしとて、弟夫婦善心にうつり、晝夜おこたらず、正直にかせげれば、年をかさねて、其所にて、兄につぎし、身代と、富榮えて、兄弟むつまじく、子孫長久なりしとかや。

此咄し、實にあつたる事にあらず。是名々の腹の中、心のうちを申したるものなり。皆我人の腹の中には、親のゆづりは相應にうけながら、うかゝとあそび暮して、こんきうに至り、又一朝の怒に其身をわすれ、人をもころし、我も死にかれぬ、短慮・短氣の兄といふ心もあり、又銀をもうける事には、非道をもなしかねず、人になさけなき邪見なる、弟夫婦といふ心もあり、此よからぬ心を、腹の中に所持して居れども、元來性は善なれば、一念惡心が出る時は、それはあやうし、よからぬと留むる本心といふ兄嫁あり。此本心の兄嫁のいさめをきゝて、まかしておけば、わざはひも、さいはひと成り、貧も富となり、不和なる中もむつまじくなる。なれど、かなしきかな、貴樣にかぎらず、總て世の人、本心といふありがたき兄嫁を、腹の中に入れながら、此なしへいさめをきかずして、兄のごとくにあそびくらし、難儀にいたり、弟のごとくにて非道をなして、困窮す。故に、聖賢神佛のをしへを聞いて、道はしばらくもはなれぬやうにすべきなり事なり。

今の咄しの兄がおろかなるも、よき女房の諫を聞きもちゐぬた故に富をなし、弟夫婦が邪見なるも、善に化し、心をあらたむれば忽ち富貴に至るなり。貴樣も是をふかくあぢはひ、金銀貸付が元手・家督長久でもなし、家屋舖・舟・川・山・田地・藏・畑が家督・元手ではなし。眞の元手、眞の家督は、前にも申した正根玉なり。開運出世・子孫相續長久は、よき人に近より、惡き友によらず、人の諫をよく用ゐる事なり。和漢ともに人にひいでし豪傑の、家國をほろぼし、身をうしなふは、皆よき人のいさめを用ゐず、きかぬにあるなり。銀があらうが、知惠があらうが、勢があらうが、位があらうが、力があらうが、學問があらうが、いかな見目がよからふが、なんでもかでも、よき人のいさめを用ゐれば、運をくじき、身をうしなふなり。世の中に善人の言、たもちひ、きかぬほどの毒藥はなき故に、カネナウナルの藥味のうちでは、是がおもの役者と見ゆる。殊に貴さまのやうな豪家へは、寄るもく〳〵へつらひ、こびるものばかりにて、カネナウナルの毒藥のみを呑したがり、カネモウカルの良藥は、すいむる者がないものぢや。此後とても、油斷めさるとば、先刻も一寸申した見聞・覺智の工夫めされ。兩人感涙頓首百拜。

（脇坂義堂愚述）

開運出世傳授 終



答とらばあめつち御代の
御めぐみ主人や親の恩を
あぢはへ

(一)福相になるの傳授

客來りて曰く、先生さきに、安樂傳授をあらはし、又其後に金もうかるの傳授を述べ、次に開運出世の傳授を書きて、人をさとす。我も此三部の書を得て、朝夕讀むといへども、御存知の微運なれば、銀ももうけず。銀なきゆゑに安樂には猶ほならられず。爰をおもへば、世に又となき貧相なり。かゝる微運。貧相も、上運・福相となるの傳授・秘密もあらば、なにとぞ隱徳とおぼしめして、傳授したまへの翁の曰く、人の貧富の境界は、我人相のよしあしにより、其人相の善惡は、我心相のよし惡に順ふものなり。故に、貧相を福相に致すの傳授、いとやすき事なり。能々心をさめて聞かれよ。

むかし〳〵、或所に、貧相を福相と轉じ、富貴となすの傳授、といふ看板を出し、此傳授料百金なりと譬して、行きかふ人に見せしかば、誰も彼も是をみて、行人もあらざりしに、其所にて家がりの町人、福尾溜助といふ男、彼家に行きて百金に迷惑し、貧相を轉じ福相になるの傳授し給へと希ふ。

主の翁、異人にて、白髪に鶴髭を著し、溜助に問うて曰く、扨其元には、いまだ若年なるに、

よくきどくにも來り給うた。逃に、傳授を致してもよけれど、それではかへりてお爲にならぬあひだ、今日より身心ともに、おだやかに清淨にして、七日が間、相愼み、來り給へといふ。

溜助、尤とよろこび、家に歸りて、よく〳〵七日相愼み、八日目の朝早天に、翁が家にいたりて案内を乞へば、見目いやしからぬ女、兩人出でゝ客の間へ通し、只今主は他行にて、程なく歸り給ふなり。暫く御まち給はるべしとて、四方山の咄もいとやかに、おくゆか數くも思ひ侍るに、又次の襖をあけて、それは端近にさむらへば、此間へ入らせ給へよと、禮義正しく手をつきて、あいさつ いたる婦人をみれば、其美麗なる事魂をけし、おもはゆげに會釋すれば、彼婦人ぜひに是へ入らせ給へと、手をとりて席にすゝめ、女三人取りかこみて申すには、我方の主人は、老人とまをし、殊に至つて惡堅くろしき氣質にて、私共が、朝夕心をのばし侍るの暇なし。けふ幸に主人の留守に君來り給ふぞ、世にひろゐなきよろこびなりとて、美酒・美肴を出して、れんごろにうちとげ、さま〴〵の物語りに、溜助は本心をうしなひ、酩酊に及びし頃、主人翁歸り來れりといふ音に、婦人は酒・肴をかくし持ちてにげ失せたり。溜助は肝をけし、醉もさめて、翁にあひて福相に至るの傳授を希ふ。

翁の曰く、今汝が相貌を見るに、酒色に染みて心相を汚す。酒色の情を發する時は、貧相につちかうて、短命の相を出し、福相を滅するの大禁物、毒藥なり。今あらためて七日物忌致し來れ。今日傳授なりがたしと、大いに怒りて奥に入りければ、溜助は本心をうしなひ、酩酊に及びし頃、主人翁歸り來れりといふ音に、婦人は酒・肴をかくし持ちてにげ失せたり。溜助は肝をけし、醉もさめて、翁にあひて福相に七日の物忌、丁寧にて、八日目の未明に翁が庵にいたれば、下男、立出でて今朝は、主少々持病の疝痛にて、只今針治致し侍る。是へ來りて暫く御待ち給はるべしと、奥の書院へ通し、茶・多葉粉出して、男は去りぬ。

溜助一人待つまに、フト床の一軸をみれば、瑞圖が山水の見事なるに、こなたの額を見れば、子昂が馬の自畫讃なり。襖は永德・古法眼、床の、をひろげてみれば、宋より明までの名家の書畫の數々仰山なり。かたへの屏風は、かたしは行成、かたしは佐理卿の眞筆なり。隅に立て、垢づきし張まぜの小屏風は、顏魯公・米元章・歐陽詢や、懶素の草書の見事なるに魂を飛ばし、障子をあけて庭を見れば、其物好み格別にて、五百兩や千金にても、世には得がたき石燈籠や、手水鉢・飛石・樹木に吐息をつき、此樣子にては、茶器や道具の所持の數々、名物・奇品廣大ならむ。いかなれば、此翁、かゝる福相果報ぞや。我も今日福相の傳

を得て、此主の如き境界を得んと、大いにうらやみ侍りし折ふし、下男來りて、只今あろじ御目にかゝり可申候。是へ來り給へと、男が案内につれ、一間一間に行けば行くほど、けつこうにて、善つくし美つくし侍るを大いにうらやみ、終に主が居間に至りて平伏し、今日こそ御傳授をしたまへかしと申し述ぶれば、

翁、大にしかつて曰く、汝、心身ともに、清淨に致し來れと申し侍るに、大いに心をけがし、欲心を生じ、人をうらやむ人相あり。物をもてあそぶ時は、其心ざしをうしなふといひて、皆貧相にこえなして、福相にいたるの大毒薬なれば、今日傳授致し度くても、其毒薬にて出來がたし。早く歸りて今あらためて七日の間、深く心身ともに清淨にいたし、重れては福相をけす毒薬を、所持いたし來るまじといかりけるに、溜助は仕方なく、又々七日の物忌を、怨に致して、後、翁が方へ至り案内を希へば、老女出でて申すには、今朝より來り給ふを、翁、大いに待ち給ひしなり。はやく〳〵此椽側を眞直に通り給へといふ。

溜助悦びて、今日こそ傳授速なれと、椽側をあゆみしが、唐犬一疋かけ來りて、溜助が裾を引きくはふるを、ふりはなして行くに、又かけ來りて裾に喰ひつかんとするを、溜助いかり腹を立ていへ、扇

を以てさん〴〵に打ち、追走らしめて、主が居間に至り傳授を希へば、翁、莞爾笑うて曰く、汝いまだ怒氣・短慮の相ありて、心誠に靜ならず。すべて短慮は貧相をまし助けて、福相に至るを消す大毒薬なり。此毒薬を所持する間は、我いかやうに、福相に轉じ度くおもへども、此毒薬が貧相をまし、福相を滅して、我ちからにも及ばぬなれば、早々歸りて今七日、とくと心身ともにきよめ、淸淨になし來れよと、座を立ちて奥に入れば、

溜助、今はちからなく、又々七日、物忌つよく堅固にして、翁が家に行きて、溜助參上と申せば、侍出でゝ是をとりつぎ、翁唯今少々用事にかゝれり。暫くまちて居候へとて、半時までどおとづれなく、一時までど何の沙汰なく、二時・三時・小一日まて共、更に、主、對面致さゞれば、今は根氣もつき果てゝ、既に其まゝ歸らむとおもふ折ふし翁、出て對面し、今日は是非、福相の傳授いたし可申と存の外、福相には大禁物の、下根・辛抱薄きといふ毒薬を所持めされたり。診にも、運氣は根氣にあり、辛抱が寶、かんにんが銀なりといふにあらずや。然ろに汝、辛抱薄く、根氣なきは、是貧相を助けまして、大いに福相を消すの毒薬にて、此毒薬のある間は、どうしても福相には轉じがたし。早く歸りて今又七日、相愼みて後に來れよ、と襖立てきり入りければ、

溜助は、たゞ茫然とあきれはて、宿に歸りて、又々七日、深く心を清淨にいたし、身を愼み、八日目の鷄鳴に衣服あらため、禮服著し、翁が家にすゝみ行くに、翁、はやく門前に出でゝ是をむかへ、早くも能く來り給ふ。汝が人相、今日こそ實に無欲・無心にて、放心・短慮の邪念なく、よく物事を辛抱するの、かんにん滿ちて、福相となるの血色、明潤なれば、我亦これを明らかに告げむと、自ら案内して、奥のおくたる大奥の閑室幽亭にともなひ、溜助を坐せしむ。

溜助愼んで一禮をのべ、頭をあげて此處の樣子を見るに、異香紛々とみちて玉をつらね、錦繡をのべ、其けつこう人間界ともおもはれず。實に爰こそ仙境なれと、猶ほ愼んで一心に、福相に至るの傳授を願ふの外、餘念・他念のあらざりしかば、翁よろこびて曰く、アヽ、得たるかな。汝今日は、毫厘も餘念・放心なく、實に信心堅固なり。是れすぐに福相に至るのはじめなり。今こそ汝に貧相をつし、大福相に至り、家長久に、子孫繁榮の傳授すべし。餘人は格別、一子たりとも相傳すべからずといふ、かたき神文誓紙をとりて、また一間奥へいざなひ、愼んで傳受せよ。さらば福相にいたらしめんと、いふ言葉に、溜助毫厘の餘念なく、一心不亂に有りがたく、頓首平伏す。

翁は閉目金聲にて、得よや得よや。今こそ傳授殘りなしと、錦の几帳を引きあぐるに、溜助信心

膽にめいじ、首をあげて是を見れば、世に溫順にて、柔和、笑顔ならびなく、胸ひろく、腹滿ちて、左の手には團扇を持ちて、右の手には童を撫で、はりふくれたる大袋に、もたれて坐せし布袋和尚の、福壽滿々たるの、世に大なる木像なるに、溜助おもはず橫手をうち、アヲ、有りがたや、ありがたや。唱ふれば佛も我もなかりけり、南無阿みだ佛〳〵。

と、古德は詠じ、郭然大公、物來りて順應すと、儒には申し、金剛經には、應無所住而生其心、と聞くといへど、發明せしは卽今唯今、餘念なければ、布袋は我なり、我は我なし。布袋の外には我といふもの毫厘も、本來無一物にて、天地同體同性にて、苦なし、貧なし、災なき、皆性善の大福相なり、酒色邪見に、欲・よこしま・短慮・奢に、辛抱なきの放心、迷の貧乏神にさそはれて、貧相に至るといへども、ぼんなう、すなはちぼだいにて、貧相其まゝ、すぐに福相、我は布袋に、布袋は我、蝶は莊子に、莊子は蝶、柳はみどり花はくれなゐ、あらおもしろの腹のけしきや。言句にはかれぬ以心傳心、不立文字、端的無二の御示敎にて、生死・苦樂の境を離れ、貧富解脫の眞の福相、とくと御傳受致しました。

翁、眼をむき出して曰く、おろかなるかな。汝が見識、其一法を知りて萬法をしらず。道は近きに

あり。然るに汝、遠きを求めて、其あしもとの肝要を失ふ。知る事は、三尺の童も知るといへども、行ふ事は、八十の老翁も行ひがたし。今汝が見たる所の見識も、是皆すぐに貧相なり。是等を以て、何んぞ福相の傳授とせん。目くらにみする術もなく、つんぼに聞かす法もなしと、翁はいかりて座を立ちて入らんとするを、溜助おとろき、引きとゞめて曰く、成る程翁ののたまふ如く、我れ實に高遠に心を馳せて、其近きを知らず。其源を見るといへども、流に益あるの道理を得ず。是を得ざるは、誠に誠に、未だ貧相なまぬがれざるなり。先生深く慈悲をたれて、福相にいたらしめたまへ。

翁、顔色をやはらげて曰く、汝、汝がいまだ至らざるを知るは、其至るの道なり。汝、未だ貧相をまぬがれざるをしるは、是其貧相をまぬがるゝに、至るの道なり。よつて我今こそ、底意なく大福相にいたるの道を說かむ。

其福相に成るの傳授は、則ち此布袋のごとく、常に柔和・にんにくにて、明けても暮れても笑顔よきなり。親にむかうてにこ〳〵すれば、孝子なり。主にむかうて柔和なれば、家内和合繁榮し、兄弟・朋友ににうわなれば、悦んでむつまじく商ひするにも、たがやすにも、細工するにも、唯柔和にて、にこ〳〵すれば、笑ふ門にぞ福來り、榮ゆるなり。或人の句に、

月は秋、人は笑顔と定めけり。

此發句の如く、唯定め度は、人の常に笑顔なり。笑顔ぞすぐに福分にて、あしき事は笑顔にては出來ぬ物なり。喧嘩・口論・短氣・短慮は笑顔で出來ず。りんき・やきもち、損と貧乏は、笑顔で出來ず。邪見・剛欲・病氣と、死するは笑顔で出來ず。其外、悪事の數多けれど、笑顔で出來るものはなければ、ひとへに笑顔をよくしたまへ。去りながら、色と、酒と、遊興と、へつらひは、笑顔でおつる邪路もあれば、此一方のみ用心すべし。

扨又、此布袋のごとく、萬事に胸をひろく致し、大いに胸を大くして、誠を濟たしめ、何事にも如在なく、有のまゝに胸も腹も打出して、かくさゝれば、常に安樂にて、此上もなき福相なり。右の手に持ちたまふ團扇こそ、人欲の塵を拂ひ、帶に心をすゝしからしむ。左りの手に撫る童子は、無我無心にて、色にも欲にもかゝはらず、萬の事に執著せず。朝夕恵り、ぶせいせず。走りまはりて、速なるを願うてなり。

又、何なするにも、此布袋の如く、ドツサリと腰や尻なすうるが、福相なり。子は孝行に尻なする、妻は貞なるみさを正敷に尻なする、弟は弟たる道に尻なする、君は臣なおはれみ深きに尻なする、親は子を慈愛するの誠らしきに尻なする、士・農・工・商、其職分に脇目なく、ドツサリと尻なする、にうせはてい、世にも目出度き大福相にいたるなり。

然りといへども、此道、中々安く至れる事にあらず。顔色をよくし、にうわにするも、胸を廣くするも、腹を大いにするも、腹に誠なみたすも、人欲を拂ひすつるも、無我無心にいたるも、己が位に素して、ドツサリと尻なする、世にむづかしく、成しがたき大事なり。其成しがたきなすの、爰に秘事口傳あり。

其秘事口傳といふは、則ち此布袋の、常にはなしたまはざる袋なり。其袋が成しがたきなし、出來がたき出かすの福相の眞の傳授なり、といふの傳授が口傳にて、元來袋といふ譯は、汝知れりや、如何にといふ。

溜助答へて、我、袋といふ義理なしらず。

翁曰く、汝知るまじ。是を知るものは、端的に、忽ち福相に至り榮ゆるなり。

溜助百拜して、是を傳授したまへ。

翁の曰く、世に、袋といふ譯を知るもの、至つてまれなり。是を實に知りて身に行へば、貧相忽ち福相となる事速かなり。今こそ汝に傳授いたさん。袋といふ事は、福は勞なり、福は勞にありといふ事なり。古への天子は、民のために勞し給へば、四海安き福分あり。諸侯國の爲に、勞し勤めたまへば、國萬代の福分あり。士・庶人、己々が家業職分に勞して、怠らざれば、家身榮ゆるの福分あり。子、親のために勞し、孝あれば、萬善の福相となる。家來、君の爲に勞し、忠あれば、家祿相增すの福相となる。妻、夫の爲に勞し、貞あれば、美名世にあらはるゝの福相となる。兄は弟のために勞しあはれみ、弟は兄のために勞し大切にすれば、兄弟和合の福相となる。朋友、互に勞して、誠を以て善にすゝむ時は、ともに繁榮の道に至るの福相となる。主人勞して、家來を善に導く時は、家正敷の福相となる。親勞して子を敎ふれば、子孫長久の福相となる。夫勞して、身持正しく妻をさとせば、家全きの福相となる。朝の寐むたきも、勞して早く起きれば、すぐに福相、夜の寐むたきも、勞しておそくいれて職分すれば、すぐに福相、酒を呑

みたきも、色のむさぼり度も、切度勞して相愼めば、すぐに福相、欲のなし度きも、腹のたつも、物にたいくつ、せいのつきるも、切度勞し、辛抱・かんにんすれば、すぐに其まゝ大福相、身勝手のしたきも、いひたき事も、りんき、やきもちのやきたきも、人のそしり度きも、勞しくるしんで、切度相愼めば、安樂世界の福相となり、けいこ事、學びごとの、爲とむなきも、勞して修行怠らざれば、上達・上手の福相となり、病人のたへがたきも、勞して養生よくすれば、無事・長命の福相となり、貧窮の身の難義なるも、勞して晝夜家業をはげめば、福相となり、身體の持ちにくきも、勞して質素けんやくを守れば、すぐに福相となる大舜が、父母につかへ、くるしんで、勞がつもりて、四海を保ち給ふの大福となり、太公望が八十年の勞がつもりて、周をひらくの大福となり、韓信が股をくゞりし、かんにんの勞がつもりて、大元帥の大福となり、漢の高祖や、越王勾踐が、辛抱づよき勞がつもりて、大業をなす大福となる。其外和漢に苦勞をかされ、辛抱・かんにんの勞をつみて、大福相と成りし人々、かぞへがたし。よつて、福をなさんとれがふものは、偏に勞しつとむる事なり。

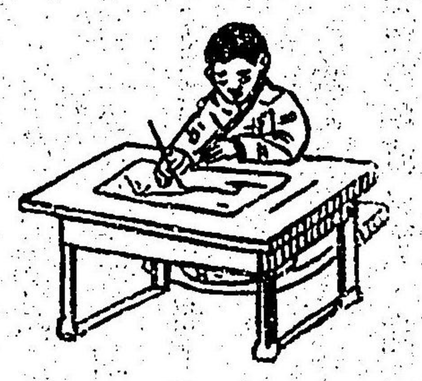
故に福は勞にありといふ事にての袋勞なり。布袋和尚は常に福は勞にありといふ事をさとりて、かんにんの口、しかとしめて、此福勞を滿たしめ給ふがゆゑに、則ち、福神なり。笑顔をするも、安

きにあらず。勞してとつめ、爰に至り給ふなり。胸をひろくし、腹に誠を滿たしめたまふも、安きにあらず。勞しつとめて、爰に至り給ふ。人欲をはらひ捨て、無我無心の童を愛し給ふも、安きにあらず。勞しつとめて、爰にいたり給ふなり。萬の事に放心なく、其位に素して、何事にもドッサリと尻腰をすゑ給ふも、安き事にあらず。勞し學びて、爰に至り給うて、萬古不易の大安樂富貴、無量壽廣大にて、腹に金玉滿堂の大福和尚は、勞なりと、勞を滿たして、福にいたり、福は勤めて勞にありと、寢てもさめても、立つても居ても、此福勞にもたれかゝりて、少しも餘念なきがゆゑなり。

此大切の傳授をば、汝が信心堅固なるにめでゝ、傳ふるぞかし。福は勞なり。勞し勤めて福相に至るべしと、いふかとおもへば、翁も見えず、布袋も見えず。我はもとより、猶ほ見得ざるに、おもはずしらず横手をうち、我勞をつみかさねたるかひありて、今こそ眞の大福相にいたりしぞや。誠に、福は勞にありと、悅ぶ夢も明け方の目さめ、あふいで空をみれば、鳶飛んで天に至り、うつむき伏して地をみれば、魚は淵にをどりしとの、むかし話、誠に〳〵世に福相の秘傳秘術、人相の極祕なれば、是をよく〳〵翫味致さば、間に髮を入れず、直指人心、福相成佛、心外無別相と示しけるに、客、感涙膽に徹し、今こそ貧相を解脫して、眞の福相となれりと、歡喜して去りぬ。

閑をせず身をはたらきて
勤めよや萬の福は勞にこ
そあれ

賀樂亭笑顏



福相になるの傳授 終

和合長久の傳授

私は、當春、御覲相に預りましたる時に、とかく夫婦合がよろしからず、夫婦中のあしきは家のすゝぴちやほどに、何事もまけてゐよ、やきもちも。なまやきにせよと、御親切の御しめしなれど、とかく夫の心がよろしからぬ故に、是非々々、此たびは、去り狀をとるつもりに候へ共、是も又々心相によつて、夫婦和合するの人相にもなられます歟。何とぞ〳〵夫婦和合の人相に至られるの御傳授を被遊被下ませ。

翁の曰く、何事も、心相のよしあしにて、相は變ずるものなれば、隨分不和合の相も、和合になるの人相の傳授がござる。

むかし〳〵、或國に、中のあしき夫婦ありて、朝夕、喧嘩・口舌の絶間なく、互にしゆらをもやし侍るを、其隣家に、諫度言といふ歌人あつて、まい〳〵是を氣毒におもひ、さま〴〵意見せしかども、夫婦、不用してあらそひしを、猶々ふびん、きのどくにおもひ、或日夫婦のものを我方にまねき、十分に馳走を致し、扨夫婦にむかひ申さるゝは、其方兩人とも、常に不和合にてきのどくなり、よつて

我等、まい〳〵意見すれども、かりにも聽かず、もちぬされば、仕方なけれ共、互に日夜、しゆらをもやすは、世にかなしき事にて、第一家も治らず、身も勞しくるしむなり。

我、これをかなしくおもふあまりに、フト存じ付きしは、二人とも、埒もなき事どもを云ひ上りて、心にはさまで不存候得ども、とかくさがなき言より、云ひ上る事なれば、明日よりは、我、歌人の隣家にすむのきどくには、互にいひたき事も、又互に云ひ度惡口・雜言も、さがなく申さず、三十一字につくり申されなば、互に惡き惡口にても、少しはやはらぎ、風雅なるべき事なれば、くれ〳〵夫婦とも、ちそうにはなる、親切なれば、切度相心得、何事も、明日よりは、三十一文字にて云ひ合ふべしと、ちかひて歸りしが、翌朝起るや否、夫婦喧嘩を仕出せしが、夫、女房にむかひ、扨々己がやうな見とむなき、猿の顏に壁土ぬりて、黑豆と小豆をなし地にまきしやうなつらな嗚を、我なればこそ、八年の十年と、持つて遣はせと、惡口しけれども、妻はらを立てい、こなたは〳〵、昨夕となりの宗匠にて、今日からは何事の惡口も、三十一文字にて言ふとやくそくしながら、其またさがなき言葉は何事ぞや。今の惡口が、三十一文字や百字かといかれば、

亭主が曰く、己が不風雅で知らぬなり。總て歌には、前書といふものがいるものぢや。我今いひしは前書なり。さらば是から、己を歌にて見知らせんとて、座をしめなほして、

あづき餅のやうなつらをふくらかし、猶ほやきもちをやくたいもなき。

といふ。

妻ます〳〵、腹を立て、みそすりながら答へしは、

またしても又あく性をすり鉢の、嗚が顏までみそを付きやるか。

と返歌し侍るに、

夫も今二三首も、惡口云ひたけれど、雙方ともに初心なれば、遲吟にて、今日の喧嘩はこれかぎりと、自然とやみしも又なかしき。

此夜、宗匠、夫婦が今日の歌をみて、大いに擧めて曰く、扨々、二人とも能くも出來たり。此樣子にては、後には天下に聞ゆる歌人となるべし。とてもの事なれば、明日からは、互に、喧嘩・惡口の歌に、四季の心をこめてよめば、風流にて、古人に恥ぢぬ所ありて、一入よかるべし。

亭主は先づ春の季を入れてよめよ。妻は答ふるに、夏の心を入れてよめよ。又亭主は秋の季を入れ

て惡口せよ。妻は冬の季にて是をうけ、互に四季の心を用ゐよ。又爰に、よく〳〵合點すべきは、總て和歌の大意は、只すなほに、心を持つて、かりにも人を敵とせず、やさしくも其身に立ちかへりて、あだをも恕でかへすの心なるを、本意とするぞかし。此心の誠が通れば、天地・神明も感應ありて、其身榮え、心安し。くれ〴〵その身に立ちかへりて、心を直ぐ、すなほにして、あだをも恕でかへすの、いとやさしきの心を、主とすべしと、くれ〴〵さとして、兩人に大に酒飯をあたへければ、夫婦とも大いによろこび、何れ明日からは、夫婦げんくわに、切度四季の心を、こめ侍るべしと、宗匠にちかひ、宅に歸りしが、

又翌早朝より、夫婦げんくわを仕出し、妻かしましくいへど、亭主さわがず。汝まづせわしくふべからず、今朝のいさかひには、春の季をいるるによつて、ひまどるなり。何んぞ我ひきやう・みれんにて、汝におくるゝにあらずと、首かたむけて、今こそ一首よみなしたり、とりわけ此歌、實情にて能く出來たり。耳をさらへてよくきけよと、高聲に

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、こちの鳴めも早う死なぬか。

妻、是を聞いて腹を立て、かなしくも泣出し、かくも心をつくしつれそふ此身を、何死れとや。めつたに死んでよきものかと、なき〳〵ながらも夏の季にて、夫にむかひ、

ほとゝぎす啼きつる鳴は長命し、あほう親父の跡にのこれり。

亭主、大いに腹を立て、己れ其まゝおくべきやと、秋の季にて

秋が來て顏はもみぢのつらにくや、はらが立田の山の神めが。

山の神めが、やまの神めが、大やきもちの山の神めが、と惡口すれば、今は女房こらへかれ、モツ歌所ぢやない、眞劍ぢやと、般若の如き顏色にて飛びかゝつて、亭主が鼻に喰ひつかむと、すでにせしが、よき言は聞かう事にて、夜前宗匠が、和歌は其身にたちかへり、あだをも恕にて返すやさしき心を天地・神明も守り給ふといふ事を、フと、思ひ出で〳〵世に、せつなく、くるしき胸を撫でおろし身はふるへども心を治め、みづから息を呑みこみのみこみ、鬼の顏をば地藏と轉じ、夫にむかひ冬の季にて、

寒氣よりはげしくあたる親父めへ、熱酒一ぱいのましやりたや。

と、よみ侍りしかば、亭主よろこび、

古今の名歌をよみしぞや。其歌のごとく、早う一ぱいのましもらひたやと、言へば、女房、早々に

酒を上かんにして夫にすゝめ相和合せしも、和歌の徳かや。

此夜、宗匠、今日の夫婦が歌を聞いて、大いに感心し、扨々妻が上かんの歌は、いかな鬼神も感動するの名歌なり。又亭主の此歌を聞いて、んを呑みて、意地・意根なきも、其心いうにやさしくして、和歌三神の心にも能々かなへり、あまり感心のあまりに、両人へはうびとして、今宵我下の句を遣すあひだ、明朝よりは、此下の句にかなふやうに、上の句にて悪口をいひ、けんくわすべしと、亭主には、

かんにんするが家の福徳

といふ下の句をあたへける。

まけてさへゐりや其身安心

夫婦とも、此下の句をよくおぼへ、家に歸りて夫のいはく、扨々女房や、此方の夫婦げんくわも、カウ、日々にむづかしく成つてきては、後には互に、一句もいへぬやうになるべしと、笑うて休ひぬ。

扨翌朝は、又々例のけんくわを仕出し、亭主、妻にむかうて、已今日は下の句に十ぶんかなふや

うに、手極りつぱに、悪口せんとて。

にくい鳴横つら一ツくらはそと、かんにんするが家の福徳。

と、仕侍りしが、まてよ、是では下の句にかなひがたし。おのれやれ、かうもあろか。

鳴殿がやきもちづらをふみつぶし、かんにんするが家の福とく。

まて〳〵、是でも下の句とは大いにちがふ。扨々、今朝は六ケ敷、先々暫く工夫すべし。已からさきへよめ〳〵といふ。

妻曰く、其方のやうな初心にては、中々宗匠のたまはりし、下の句にはかなふまじ。いで〳〵私が名句をいはんとて、

悪性な親父がつらのつらにくや、まけてさへゐりや其身安心。

またじやれ。カリデはない。是では上の句が下の句につきがたし。

去るならは銀澤山につけてくせ、まけてさへゐりや其身安心。

どうしても猶ほつかぬ。なるほど、今日はむづかしく、猶ほとくと案じて見ませう。マア其方から、よ

まつじやれ。

夫、得と思案し、嗚かうもあろか。
我よきに嗚のあしきはなきものと、かんにんするが家のふくとく。
要、是を聞いて横手なうち、扨々よくも出來ました。誠にそこが上下かなふ福徳にて、それこそ、和
歌の意味ならん。私もかくなんと、
何事も我をあやまり順ひて、まけてさへゐりや其身安心。
といしました。どうでござります。
夫の曰く、扨々よくも出かされたり。女の道は、そこにありて、其心こそ其心より、福も、壽
も、子孫の榮えも出づるなりと、大いに夫婦和合して、嗚、今までは何事も己がみなわるかつた、
我よきに嗚のあしきはなきものと
今こそ、會得致したりと悦べば、妻は、大いに平伏し、もつたいない、何んにもお前のわるいぢや
ない。皆、私が女のつたなき心から、かあいがつてくだされる故に、つけ上り、妻のつまたる女の道よ
り内職のやきもち屋が、夕べにも朝たにも、皆牝鷄の我慢の數々に、家をも、身をも、つぶすべき
に、是迄全くあなた樣の、御心長き御慈悲と御となりの、宗匠樣の御しめしにて、

何事も我をあやまり順ひて、まけてさへゐりや其身安しん。
にて、女は順ふが道にて、殿達樣とは、ちがひ、まけてさへゐりやかあいがらるゝなり、我と我
てにくまれましたが、今心がつきてみれば、扨々安心安樂世界でござります。
夫の曰く、さういうてたもれば、たもるほど、己も我身の非をば知る。元來女は世間見ずにて、
心小く、氣もせまく、女童とさへいふものなり、おとなげなくも相手にして、海といふと山へ行き、
川といへば、山の神めがチヨコザイな、と腹たつまいに酒なのみ、ない事いうて案じさし、にくい中
にも可愛かして、己がつらいを腹立てい、ヒヨツト不埒はあるまいかと、まはる因果の火の車、のら
ぬ顔する其心勞、實は我等も大やきもち、家業精出し、酒のまず、惡性せねば、世の中の女房に、
鬼はなきものを、亭主の罪の深きより、妻をも奈落へつれて往て、修羅のちまたのたゝかひの、しの
ぎをけづる不和合の中でも、子をば生したり、つまらぬものは世の中の、ドウデモ、男はあくしやう
もの、今よりあらため、嗚大明神と敬ひ尊み、晝夜わかたずかげひなたなく、大切にいたすべ
しとて、是迄の非を悔みて、
女房は愛する物と知りながら、讐は寃末にせしぞおろかや。

妻、涙ながし、おもはず知らず、盤にかしらをつけ、やいばならぬ誠の其言、眞實心に御もつたいない、とかく女と申すものは、少し夫がけつこう成ると、我も知らずにつけ上り、心がほこりてなんぞといへば持病ぢやの、しやくきぢやの、かんしやうぢやのと、いふものを、みかた、うしろだてとして、おろかなる嗔恚の、ほのほふきたてゝ、我とむかふる火の車かなにて、いとなしさうにいふべて、夫は高きも、ひくきも表をつとめ、家職・家業の心勞多く、其上妻子・從類はじめ、世の世話多き苦勞の重荷、ちと時々は息杖い酒も、あそびも、あらざれば、つゞきたまはぬものなるに、戻りがおそいとしやくきをおこし、外所の女中にやはらかな言があると、すぐにうたがひ、貝の尻、まはる心の引臼は、子をなしたりとも油斷なすなとは、ほんにようも申したものゝ、女の心、丸で夫にやしなうてもらうてゐる、恩はいつの間にやら棚の上、ころりとおちた、ほたもちのやうな、見とむなき形より、心をば、鏡にうつすものなれば、嘸や姿の見にくかるらんと、先非を悔いてよみし歌に、

夫にはしたがふ物と知りながら、夜のみとこそ思ひしそうき。

と、夫婦互に大笑ひにて、むつまじく、和合の中に、これよりは猶ほ別ありて、行義だゝしく、相つつしみしかば、自然と家富み、繁昌して、子孫目出度、長久なりしとかや。此はなし、げにもなかしくおもしろき事にあらずや。汝も實に此妻のごとき、今にも心相となれば、忽ち夫婦和合、子孫繁榮の相となるべし。女大いに感心して、誠に世にありがたき御傳授、得と仕り、すぐに安樂安心となりましたとよろこびて歸りぬ。

和合長久の傳授 終

むつまじきふうふの中は千代八千代
子孫榮えて繁昌となる

長命になるの傳授 卷の上

或人、來りて曰く、翁、前にはかれもうかるの傳授をあらはし、それより、安樂になる傳授、又孝行になるの傳授、夫婦和合するの傳授、福相になるの傳授、開運出世するの傳授をしるし給ふをみて、一々、御尤に存じ候が、わたくしは、殊の外なる長命ずきにて候へば、何とぞ〳〵長命になる傳授がさづかり申したく、わざ〳〵參り候なり。翁のいはく、長命になる傳授も品々ござるが、まづ其もとの望まるゝ、長命はいかやうなるが、所望でござる。

或人のいはく　私が望みまする長命は、第一たくさんにかれを持つて、不自由なく、命はなるたけ、一年にても長いが好みでござりまする。

翁の曰く、そのかれを持つて、長命がいたしたくば、早速によき傳授がござる。その傳授といふは、むかしの人の道歌に、

朝起や身を働きて灸をすゑ、れふたがらずに家業精出せ。

此歌、誠に貴様の注文の長命の傳授なり。其わけは、とかくに身をはたらくが長命なり。又第一の傳授は、此れぶたがらずに、朝おきなするが、壽命ものびる、かれもふゆるの傳授なり。ゆゑに貝原先生も、人にしめして申されしは、世の人の盛になるも、衰ふるも、その家の主たるもの、朝早くおきると、朝おそくおきるとの二つにて、よく知らるるなり。朝早くおきる家は、かならずさかえ、朝おそく起きる家はかならず衰微するもの也とかや。此示し、まことに手近く深切なり。愚老が年來みあたり傳ふるに、すべて朝はやくおき出てはたらく人に、貧も短命もなきものなり。又朝おそくおきる人は、其朝を怠るのみにあらず、其一代を怠るゆゑに、皆貧なり。短命なり。故人の語にも富人は怠らずともあれば、まづかれを持ち、長命のいたし度と申す傳授は、こゝにあるべし。ある人の前句に

次第々々におとろへにけり

とありしに

重盛の外は平家の朝寢ずき。

と、附けたりしもかしこき。まことに此道理にて、朝れは壽も、福もうしなふなり。

むかし、あるをとこ、大黒天へ參籠し、富貴・長命を丹精しいのりければ、或夜の夢に、大黒天あらはれ出てて、のたまふには、汝、長命・福分がえたくば、我なれがひたのまんより、朝起大菩薩をいのるべし。かならず福壽を、即時に得るべしと、告げ給ふと見しが、夢はさめたり。此男、すみやかに手あらひ口をすゝぎ、大黒天をふしをがみ、扨夢中に神のわれをたのまんよりは、朝起大菩薩を祈るべし。たちまちに、福壽ありとのたまふ、朝起大菩薩は、いづくに居給ふ佛にや。何方に向ひたづぬべしと、さま〴〵工夫をこらし、丹精いたせしうちに、おもはず悟り得て横手をうち、扨も〳〵ありがたや。今こそ朝起大菩薩の、本體を拜み得たれ。實に此佛を信心し、此ほとけと合一なれば、忽ちすぐに長命も出來、福分も出來るなりと、手の舞ひ、足のふむ所をわすれ、大きによろこび侍りしかば、家内の銘々來りて、いかなるとそとたづねければ、此をとこ申すには、汝等も眞實に長命・福分を得んとおもはゞ、ひとへに朝起大菩薩を祈るべし。たちまちに福壽を得るなり。そのわけをいはゞ、

世の人、毎日々々一時づゝ、朝はやくおきれば、世の人とは、現在に、一日に一時づゝの長命を得るにあらずや。扨また、一時づゝ朝寢をすれば、毎日々々一時づゝの死人におなじ。二時づゝの

朝寢をすれば、二時づゝの天壽ならずや。又毎日一時づゝはやく起きて、家業をなせば、一時づゝのたちまち福分を得るにあらずや。又二時づゝ朝起してはたらけば、忽ちに、二時づゝの福分を得るなり。扨此日々一時づゝの朝起を、一ケ年三百六十日にてみれば、四百廿日にいたるなり。わづか一ケ年の間にて、六十日は、世の人と、多く長命するなり。又此六十日はたらくは、別に食事も、別に衣服も、別に家居も、何もかもいらず、無雜用にて、六十日かせぐは、たちまちに大福を得るにあらずや。此一時づゝの、一ケ年に出づる六十日が、十ケ年にては六百日の長命・福德、又人間一代、六十年とみれば、世の人とは三千六百日餘長命なり。これ長命のみならず、此三千六百日には、一錢の雜費も無く、物入もなくして、はたらけば、働く程の福分わき出づるなり。又此うらにて、毎日々々一時づゝ、朝寢して、一時づゝ、死んで居る人は、一ケ年に六十日の貧天なり。人間一代六十年にては、三千六百日の貧天にいたり、死人に似たり。此一時づゝ朝寢をする人と、又一時づゝ朝起してはたらく者と、損德ともに打あはせみれば、人間一代六十年にては七千二百日の損德となり、長命となり、短壽となり、福壽・貧天のちがひに到るなれば、人は一念わづかの心得が、善惡・壽夭・貧福のちがひに到るなれば、古歌に

よしの川その源をたづぬれば、むぐらの雫萩の下つゆ。

このわづかの一時が、つもり〳〵て一日となり、其一日が、つもり〳〵てもつて、久年をなすなれば、禹王は寸陰をしみ給ひ、晉の陶侃は分陰をしみしとかや。

のちといふその念りにひかされて、今日を空しく暮らすはかなさ。

此念らず、油斷せず、かせぐ打出の小槌からこそ萬の福分は出るなれと、大黑天は、しめし給ひ、又福は勞にありと、毎日々々朝起して、身を勞するのかんにん袋にこそ、壽命を目出たく納めるなりと、大黑天の教なり。此大黑天の御本地佛こそ、朝起大菩薩なれとの、靈夢をさとりえたりと示されけるに、家内みな〳〵、此ことわりを會得して、我一と朝起大菩薩を信じ、朝起して、家職をはげみ、かせぎしかば、皆々長命・富貴に到りしとかや。此咄、おもしろきことにて、現在一日に一時づゝはやく、目をひらけば、一日にて一時の長命ならずや。又一日に一時づゝかせぎはたらけば、一時づゝの福分に非ずや。貴樣の、長命・福分をねがふの傳授には、此朝おき大ぼさつの御利やくが、何よりもつて專一なるべし。くれ〴〵是を信仰あるべし。

次は、唯ぞ、これへ〳〵。

ハイ、私は、幼年にて、母にわかれ、今は老父のみでございますが、一昨年より老父大病で、既に當春はあやふく、大切でございましたを、醫師はもとより、神・佛を祈りましたるや、必死をふしぎにまぬがれましたが、亦此ごろは、兎かく父の顔色あしく、痩れがみえまして、日夜の心勞、申す言葉もございませぬ。何とぞ〳〵參りました。ひとへに老父が長命いたし給ふの、御傳授なされくださりませ。

翁、大に賞美ていはく、扨も〳〵ありがたや。孝子には我身なしと、貴樣もみれば最はや〳〵五十歳の餘の人なれば、まづは、我が息災無事の間に、年より給ひし、父が送りたし。是が順當ぢや。ひよつと我身のうへに、いかなる不幸などが、あつてはなどい、心にもおもひ、口にも言ふが、農・工商の、人の常なるは、只いつくまでも、老父を長命させ度きより外に、前後の頓著なきは、よくも〳〵孝心なるぞ。出かされたり。貴樣が其孝心がすぐに、老父の壽をながくいたし、子孫長久の傳授ぞや。

心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん。

人は只、此誠さへあれば、萬の心願、成就せずといふとなし。ましていはんや、我朝の長命

するの願ひなればなぞ、神佛の利益あらずといふことなし。是につけても、翁が此座の人々へ、申し聞かせたき咄しの候は、卽ち今の事に候が、其大略なり、一寸つまんで語ります。

此京の東、清水門前五町目、紙屑をかうて世を渡ります、大和屋善兵衞と申す人の養子、榮次郎は、文化甲子の年、九月二日、十三歳にて、養父善兵衞、世を過ぎ行きしかば、母と共に、父が病中の遺言にまかせ、家財殘らず、賣りはらひ、宿料にはじめ、買がゝりの不足等をすましければ、跡にのこりて、四五百銅の錢を持ちて、紙屑をかひあるきて、苦勞の中にも、我妹の二歳になるをつくしみ、母の病氣の節は、れんごろに乳などもらひ歩きて、妹をいつくしむ。實情ふかく、又母が右二歳の妹を、大阪なる緣者へあづけ、母は外へ、かせぎに出でんと申すを、榮次郎、大になげきとどめ、母病身なるうへに、他に出ての勞ないとひ、又世の心なやしなうて、申しけるは、いかなる貧苦にても、親子一所に住みてこそ、過ぎにし父も悅び給はん。又父が追善佛事いたすとても、親子兄弟はなれずなすこそ、父もうれしく思ひ給ふべけれと、達て母をとどめ、我身は豊夜なわかたず、家業に精だし、母への孝心、妹への慈愛、まことに幼稚者のなす所にあらず。

元來榮次郎は、二歳の時に涙華、順慶町の邊なる、某より養子に來りし者なれば、其かたより

も、榮次郎をとりよせ、母へは、相應のことを、なし遣さんと申し來りける。又榮次郎が住みける近所の富家よりも、榮次郎を養子にもらひたしと、度々申し參る方ありといへども、榮次郎少しも心をうごかさず。天地の間に親といふは、死にし父と、今の母の外に親はなし。親はもたず。いかなる富貴の家に至りて、身の安からんよりは、此身は、いかやうに辛苦しても、母と妹と一所にくらして、父が追善に、一文餅一つあげても、佛事いたすが樂みなりと、申しけるとかや。

かゝる義氣にてかせぐゆゑに、其日其月の烟は、ほそ〴〵立ち候へども、母とかく病身と申し、又妹も折々の不快に、物入等もありて、何事も心にまかせぬといへども、心正直けつぱくにて、紙屑を買ひ持ち歸りて、自然目方など買ひし時より、多きことなどある節は、速に其買先へ行きて、扨私は不調法いたしました。昨日こなた樣にて、御もらひ申しました紙屑が、夜前かへりて掛けて見ましたれば、何程目かたがおもうございますゆゑ、今此くらひ、鳥目を持つて參り候と、斷を申して、それだけの料を、持參りし事も、折々ありしとぞ。

またかゝる困窮の内にても、聊づゝの錢をつみ置き、我は夜分寢ずに、ぞうり・草鞋をつくり、又ある日は、一食にてもくらしたり、又ある日は五文の餅、二つ三つにて過したりなどいたして、亡父

の一周忌迄に、石碑を建て、それより後は母子共、凡そ日々、墓所に詣うでぬ日はなしとかや。

此孝心なんぞ空しからんや。德孤ならず、必ず隣ありと。五條の邊り、大黑町となんいへる所に住みける、入江氏の父子とも、是を大にあはれみ、又五條不明門に住する、近江屋某の親子も、此孝子を感じ、いとねもごろに力となり、助け給ふよりして、翁がかたへも、つれ來り給ひしなり。隱れたるより見はるゝはなし。誠なるより明らかなるはなしと、此榮次郎が、義氣・孝心、天に通じ十九歲の時、去る文化七年十月廿七日に、恐れ多くも御役所へ、榮次郎をめされて、ありがたくも、白銀十枚被爲下置候は、世にありがたくも〳〵、堯代・舜恩の御慈悲、廣大の御冥加、申すも中々恐れ入り奉ることでござります。

此義は申さずとも、目のあたりの儀で、各方御存知の事でござれども、かゝる有難き御仁惠は、折々思ひ奉るが民の良藥、身の守りでございます。又は榮次郎ごとき孝子も、怠り易きは世の常なれば、愚老が時々に、此咄しをいたしますとも、第一に榮次郎が、大に〳〵愼み、良藥ともなります事でござります。右の榮次郎が母は、いたつて病身でござりましたが、此榮次郎が孝心にて、今は大に〳〵息災無事に候よしなり。爰をおもへば、父母長命の傳授は外にはござらぬ。只眞實に、

太切に〳〵、誠をつくし、よく父母に孝心をつくすより外には、正法奇どくなしにてござります。いや〳〵それは餘り〳〵知れた事ぢやと、申す人もござらうが、なれど、その知れた事、其誰れもよくぞんじた事が出來ぬものなり。知れぬものでござります。父母によく事ふれば天地の、神も惠みの深しとぞ。

我親の長命祈るまことこそ、我も長命子孫長久。

無二齋や萬能齋のきどくより、親孝行は何につけても。

次はたれぞ。

長命になるの傳授 卷の下

ハイ私なりと、高慢らしくすゝみ出てた女は、見目かたちはなかしけれども、衣服のはなやか、匂ひ袋に、鼻を突きぬき、紅おしろいにて、面をかぶりたるかと、疑はるゝ、異相の女房、問うて曰く、私も何とぞ〳〵長命が望にて、よけいはいらねどもわづか千年か萬年計りは、いたしたうござりますが、其長命も、年つもるにつけ、しわがより、腰がかゞみ、婆々になりてはおもしろからず。千萬年も此うつくしい、今の通りの色女にて、此愛らしき私が、今の姿を少しもかへずに、長命いたしまするの御傳授、なされ給はれと、ストン〳〵座したる其尻、富士の山ほどありける。

翁もおもはず、笑うて曰く、其元は、其元が身を、實によき見目かたちとおもひ給ふか。

女房のいはく、何も、さほどのきりやうともぞんじませねど、天道が正直にて、世の人々が、みな私を唐土の楊貴妃に似たと申されますから、此楊貴妃のすがたをかへずに、千萬年も、人に戀ひしたはれつゝ、長命がいたしたうござります。

翁、腹をかゝへながらも、歎息して曰く、誠に〳〵、女童かな。此楊貴妃も、赤子におとれりといふ。

女、大きに聞きとがめて曰く、此先生いかなれば美女に對して、無禮なるぞや。肝心の傳授はなさずに、女童の赤子におとるの惡言、いかなることぞや。我に、遺恨ありての事か、但しまたよき老年をなしながら、我艶色に心迷ひてのうた言なる歟、女童といふ由來をきかん。

翁、また〳〵笑うて曰く、まづ〳〵楊貴妃、怒りを、しばしゆるし給へよ。我汝にかたる咄しあり。唐土に夫婦の者ありしが、夫は篤實のものなれど、みめあしく、年卅歳なれども四十餘にも老けて

みゆる不男なり。又女房は、美目相應にして、年廿歳なれども、十七八歳とみゆる花美ものなり。故に此妻、常に夫を尻に敷き、己が貌かたちを高慢して、朝夕に夫にむかひ、亭主のやうな仕合ものはない。我が如き若くみゆる美女を妻にもつとは、扨も〳〵仕合ものなり。又我は、亭主のやうな、年老いて見ゆる夫を持ち、世界の中の不仕合ものなりと、不足のみ申しけるに、此夫も日々迷惑いたしけるが、此男或日、深山へ參りしに、一人の鶴髪たる仙人にあふ。此仙人申しけるは、汝は正直篤行のものゝに、今は、日々妻がために、氣を屈しはべるぞきのどくなる。故に我、汝に此三粒の丸薬をあたふべし。此薬、一粒を呑めば、忽に年十歳わかくなるのみならず、容貌も古今無双の艶男、大色男となるなれば、汝速に一粒用ゐるべしといふ。

此男、世にうれしく大に謝し、速に一粒をふくすれば、年廿歳の大美男となりて、宿に歸り來れば、女房ひと目見て仰天し、夫はいかなれば、かゝる美男となり、かく年まで若やぎ給ふといふ。夫のいはく、扨々、汝は仕合なるものなり、かゝる、又我は、かゝる年行きし妻をもつとは、不仕合なりと笑ふ。妻がいはく、いかなれば、かゝる男粧とはなり給ひしぞ。

夫のいはく、我、三粒の仙薬をもらひ得たり。此二粒を呑めば、忽ち十歳づゝ若くなりて、其上にかゝるよき男粧となりしなり。一粒呑みて、此姿となりぬ。今跡に二粒あり。是は我、又今十ヶ年立ちし時に、是を呑めば、又廿年の艶男となるなり。其時には、つもかはらぬ、又廿歳の美男粧となるべし。其時には、なもつとは、扨も〳〵、世に果報もの仕合ものなりと。妻大に、赤面して申しけるは、何卒その一粒の薬を、夫あきれて曰く、汝は、今年廿歳なり。然るに此一粒を用ゐては、いかで我世帯のなるべきや。無用々々と申しけれども、妻我慢ものにて、此夫が持ちし、二粒の丸薬をうばひとり、呑まんとする、夫は驚き、是を二粒とも呑みてたまるべきやと、もぎ取らんと爭ふうちに、妻二粒とも、口に入れしに、夫なほ〳〵おどろき、吐き出させんとするひやうしに、此薬二粒とも妻が咽に通りけるや、いな、忽ち夫の膝のうへに乘りて、ホギヤア〳〵〳〵、と申したりとかや。

此なかしき、唐土の咄より出でゝ、女の前後わからぬ愚疑・もうまい・我慢・しつと・りんき・

やきもち・短氣・やぶさか・奢・高ぶり、色におぼれて、欲にふけり、利をむさぼり、邪見・不仁の理非わからぬ、童にたとへて、女童と申すなり。此咄しの女計りが、ホギヤア〳〵に非らず。世の人皆々此通りにて、悭氣・短氣にて、跡さきも見えぬ癡凝のホギヤア〳〵もあり、又色や、欲におぼれて、我を知らぬ愚癡無知のホギヤア〳〵もあり、酒や、美食や、奢・吝に、己が身を知らぬ、無知のホギヤア〳〵もあり、學問はありながらも、只高慢を發し、身を修むることを知らぬ、無知不學のホギヤア〳〵の類ひ、世にあげてかぞへがたし。是れ、そこの、楊貴妃どの、貴さまも我身で、我身の知れぬ、ホギヤア〳〵でござると申しても、それがわからぬ、ホギヤア〳〵ぢや。よいかげんに、馬鹿つくされよ。顔かたちが道外がたのみならず、眞實貴樣は腹のうちまでが、ちやり頭ぢや。

女、膝を立てなほして曰く、此の親仁、何とて我をあなどり、めつたむしやうに、ホギヤア〳〵づくし、聞きにくし。既に聖人も、大人は赤子の心をうしなはずと、とき給ひしを、汝知らずや。その赤子はホギヤア〳〵にてはあらずや。

翁、ます〳〵笑うて曰く、大人は赤子の心をうしなはずと、の給ふは、人の性は皆善にして、誰しも、生れ出でし時は、只天なりうけし性のまゝなり。此性のまゝにてあれば、本體の明、常にあきらかにして、よく五常を保ちて、外物に放心せず、故に大人は常に此天よりうけし、性善の赤子の心を、うしなひ給はざるなり。しかるに世の人、生れ出づるやいなや、見るに迷ひ、聞くに迷ひ、其ふるまひものに、まよひ馴れて、其本性の德をうしなひ、放心し、身をうらなふなり。故に一休和尚も

生れ子の次第々々に知惠づきて、佛に遠く成るぞかなしき。

と、よみ給ひしとかや。人みな、生れ出でし時は、佛性のみにて、一毫の私心のあらざれども、只次第に知惠づくより、鏡にさびの出來るごとく、いつか迷ひの生ずるなり。然れども。元は、あきらかなる鏡にて、其くもりは、跡よりつきし者なれば、本來は無一物、何の處、塵埃をひかん。只時として昧きことあれど、元來我本體の性に迷ひ、生れし時は、其生れ子が、我本性、壯人なるに至りては、壯人なるが我本性、老いては老いたるが性のまゝなるに、ア、汝は年よる事、千萬年に及んでも、今の楊貴妃のすがたにて、長命いたしたしと願ふは、小人故、赤子の心をうしなうて、其本性にもどり、天命にさからふことを知らぬ、ホギヤア〳〵なり。君子、其位に素して行ふとあり。人はその位に素し、其分に素し、其身の程々を知るを以て、人とするなり。汝も其位に素し、己が己と己が身に立ちかへり、己が身を己がよく〳〵實知せられよ。

女、忽ち懐中鏡とり出し、ためつながめつ、我顔を見ていはく、われと我身に我と立ちかへり、見れば見る程、我ながらも古今見目よき、楊貴妃なりといふ。

翁、眉をひそめ、歎じて曰く、汝が申す所おろかにあらず。世上の人、皆々以て、我をあしきとおもはぬが人間世なり。むかし或雲の上つかたの坊官に、猿坊官と名を得たる人あり。其容貌、誠によく猿に似たりしかば、世の人かくは名づけしとなり。此坊官、ある日去る御宮の御殿へまかりて、玄關へぴかへありける時に、ある門跡がたの坊官、跡より來りて、是も玄關にひかへしが、此坊官の顔も、誠に、猿にそのまゝよく似てありしかば、先に座せし猿坊官の申しげるは、扨其元の御すがた、よくも我に似申し候。以後は御むつまじく交り給へと申されければ、跡より來たりし坊官、あつく禮をかへして、扨も〳〵君にむかへば、我姿を鏡にうつす如しと笑うて、兩人一度に手を拍ち、猿が我か。我が君か。猿が君か。猿が我かと、いとむつまじく語りあひしかば、詰合せし家中の人々、是をみてをかしさにたへがたきまゝに、あるじの御宮に申し上げしかば、此御宮きかせ給ひ、此兩人の坊官に御賜はりものおほく有りしかば、兩坊官、時の面目、世にありがたく謝し奉りて歸りぬ。

此御宮の家老、此兩人にもの給はりし、君が御心を尋ねしかば、御宮のの給ふには、すべて世の人みな我身の事を我身にては知らず、知れぬよりして、皆我をよきものとのみおもふなるに、此坊官兩人とも、よくも〳〵我と我身の猿に似たりしを實知せるこそ、世に神妙なれ。故に物遣し侍ると給ひし、此坊官の給ひしをきゝて、家中の銘々、恐れ入り、銘々我身不相應の奢りをやめ我分に不相應なる、大言驕慢やめ、我心に不相應のかしこげなる顏をやめ、皆々その身のほど〳〵を知り、其位に素して、外なれがはざるの安心を得しとかや。

此道理にて、只々見えがたきは、我身の上なり。今汝が其身にかへりみれば、ヤツパリ楊貴妃と申すも尤にて、人間世界、誰にても、皆我を、楊貴妃なりと、おもふ心の迷ひより、我身のあしきを知らず、其あしき知らぬ故に、我と我に、誰も迷うて、同じ、かく申す翁も、我を我と身びいきするの、まよひなのがれず。人間萬事、皆々我を楊貴妃とおもふ心のさらぬなりと、天を仰いで一人歎じぬ。

女の曰く、翁、無益の言葉をやめて、我今の艷なる此すがたを、いくつになりてもかへずして、長命するの傳授たなせよ。

翁の曰く、汝今朝來りて、今午時に過ぐるなり。汝が今朝の身と、今の身とは一つ歟、二つ歟、別歟。同じ歟。

女の曰く、別といはゞ、千差萬別。一といはゞ古今一體。

翁のいはく、汝が眼を見しや否や。

女の曰く、眼、眼を見ず。指、指をさゝず。

翁もくして靜座す。

女、橫手を打つていはく、我、天地とひとしき長命を傳受し、古今變滅なき艷なる狀貌を崩さずと、已に克つて、禮を作し去る。

（脇坂義堂愚述）

長命になるの傳授　終

鳩翁道話　卷の上

孟子の曰く、仁は人の心なり。義は人の路なり。其路を捨てゝ由らず。哀しい哉。是は、孟子、告子の上に見えます本文でございます。

扨て此仁と申すは、諸先生いろ〳〵に御註をなされたれ共、むつかしう申しては、女中方や、子供衆の耳へ入りにくい。それを、たとへをもつて御はなし申しませう。

むかし、京に今大路何某といふ、名醫がござつて、名高い御人ぢや。或時鞍馬口といふ所の人、霍亂の藥を製して、賣弘めまするにつき、看板を今大路先生に御願ひ申して、書いてもらはれました。其看板に、○○○○の藥と、假名で御書きなされた。ソコデ賴んだ人がとがめました。先生是はくわくらんの藥では、ござりませぬか。何ゆゑはくらんとは、なされましたぞ。先生笑うて、くらま口は、京へ出入の在口、往來は木こり・山賤・百姓ばかり、くわくらんと書いてはわからぬ、はくらんと書いてこそ、通用はするなれ。眞實の事でもわからぬときは、役にたゝぬ。たとひ、はくらんと書いても、藥さへ功能があれば、能いではない歟と、仰せられました。

いかさま、是は面白いことでござります、聖人の道も、チンプンカンでは、女中や子ども衆の、耳に通ぜぬ。心學道話は、識者のためにまうけました事ではござりませぬ。たゞ家業におはれて、隙のない御百姓や、町人衆へ、聖人の道ある事をおしらせ申したいと、先師の志でござりますゆゑ、隨分詞をひらたうして、譬をとり、あるひはおとし話をいたして、理に近い事は、神道でも、佛道でも、何でもかでも、取りこんで、おはなし申しますことでござります。かならず、輕口ばなしのやうなと、御笑ひ下されな。これは本意ではござられども、ただ通じ安いやうに申すのでござります。

時に仁と申す事は、畢竟トント無理のないと、申す事でござります、此無理のないのが、則ち人の心ぢやと、孟子は仰せられました。此無理のない心をもつて、親につかへまするとが孝行になり。主につかへまするとが忠になり。夫婦・兄弟・朋友の間も、又々此通りで、五倫の道はやすらかに調ひます。

其無理のない仕樣は、親は、親のあるべきやう、子は子のあるべきやう、女房は女房のあるべきやう、此あるべきやうが、無理のないところで、則ち仁なり。人の心でござります。

たとへて申さば、此扇は誰が見ても扇ぢや。扇としつて、これで鼻汁かむ人も、冗ぬぐふ人も

ない。これは是扇のあるべきやう、禮儀に御用ゐなさるか。開いて風をもとめる歟。この外に仕樣はない。此見臺もその通りで、棚のかはりにもならず。又枕の代りにもなりませぬ。やはり見臺は、見臺のあるべき樣に、御つかひなさる。しかれば親御さまも、親御さまと御らうじたらば、御孝行になされるが、子たるものゝ有るべきやう。是が仁なり。人の心でござります。かやうに申してゐると、餘所のはなしのやうなれども、則ち御銘々さまの御心が、トント無理のない仁の丸無垢。いまあなた方の御心の店おろしを、いたして居まするのもぢや。よそ事のやうに御聞なされては、迷惑にそんじます。もしあなた方が、親御へ口ごたへをなされたり、また親を泣かせたり、主人に心配させたり、難儀をかけたり、夫に腹を立てさせたり、女房に心づかひをかけたり、弟をにくんだり、兄を悔つたり、世間へ難儀をかけちらすは、皆扇で尻をぬぐひ、見臺を枕にしてござるといふものぢや。御當所には、左樣の人柄はござるまいけれども、天竺の横町には、此連中がたんとある。御用心なさりませ。

つくづく思うて見れば、いたし方がござりませぬに、幸に御たがひに、無理のない心を持つて、うまれましたは、千萬金にも替へられぬ、有がたい事ではござりませぬ歟。この無理のない心を、我方で本心と申します。尤も仁と、本心と、となへ所によつて、すこしの差別

はあれども、そんな事の吟味すると、長うなる。唯本心は、無理のないものとおぼしめして、間ちがひはござりませぬ。今日各々様に、御一人〳〵、御目にかゝらいても、おの〳〵さま方のお心に、すこしも無理はござりませぬと知れまする。其證據は、いふまじき事をいふ歟。すまじき事をするお、忽ち腹の中が何とやら、心わるう覺える。是無理のない心をもつて、無理をする故、心がねぢれて、心わるいのでござります。是はこれ、千人萬人みな同じ事でござります。古歌に

鳴瀧のよるの嵐にくだかれて、ちる玉ごとにやどる月かげ。

とゝれ、月は一ツなれども、ちる玉ごとに、各そのかげをやどす天理の妙用。仁はひとつの仁なれども、萬人みな是を分けて持つて居りまする。ソコデ世界中の人のこゝろに、無理のないといふ事が、チヤント勘定が出來まする。さるに依つて、此無理のない心にしたがうて、物ごとをすれば、皆あるべきやうに成て、孝行・忠義もおのづから出來まする。ナントはやい學問ではござりませぬか。タツタ一ツ合點すると、百年學問した人と、行ひにおいて、何もかはつた事はござりませぬ。ドツゾ本心に御もたがひなされい、是を先生として、御稽古をなさるが、よろしうござります。我本心を師匠にすれば、御祝儀もいらず、暑寒の見舞にもおよばず、心やすう忠孝はつとまる。ありがたいをしへでござりま

す。しかしあまりやすいと、得て御うたがひの起るものぢや。決してやすものでも、御買かぶりの氣づかひのあるのではござりませぬ。押切つて、本心におしたがひなされるが、宜しうござります。中庸には、性に率ふ之を道と謂ふ。と、急度御證文の、請合がござります。御氣づかひなしに、御つかわれ、義は人の路なりとは、義といふは、無理をせぬ事なり。無理をせねば、人交りは申すにおよばず、萬物と交はつてよろし。かるがゆゑに、古人も義は宜なりと仰られました。家來としては、奉公に精を出すがよろしい。嫁としては、舅・姑に、孝行にし、夫を大切にするがよろしいちやござりませぬ歟。其外何事でも宜しいのが、義でござります。其宜しいのが人の道ぢや。道とは古人の曰く道は猶ほ大路のごときなりと。江戸へ行くも、長崎へゆくも、雪隱へはいるも、皆それ〳〵に道がある。もし道をゆかぬと屋根ごしをしたり、溝へはまつたり、野ごし、山ごしと、つけもない所へうろたへまする。是と同じ事で、人の上でも、宜しうない事をすると、道ではござりませぬ。子は親に孝、妻は夫に貞、朋友は互に信、一々いはいでもしれてある。其通りさへすると、道ぢやによつて、五によろしけれど、親をなかせたり、夫に腹たてさせた

り、人を恨んだり、恨まれたり、是みな宜しうない事ぢや。是は道でない故に、川へはまつたり、荊の中へかけ込んだり、どぶへ飛びこんだりすると、同じ事で、扨も難儀千萬なものでございます。尤も道は、どこにあるやら、とくと考へれば成りませぬ。

幸ひ中澤道二先生の御はなしを承はり傳へました事がございます。序に御はなし申しませう。

中澤先生、ひとゝせ、攝州池田へ道話に參られました。ある豪家に逗留いたした所が、その家の主人、もとより心學執心ゆゑ、先生をもてなしのあまり、十四五になる娘を呼び出し、道二先生を饗應させられました。此娘御、容儀もすぐれ、行儀もよく、花をいけ、茶をたて、琴をひき、また先生をなぐさめ、歌などをよまれました。ソコデ先生、その親たちへ挨拶に、是ほどにおそだてなされては、なか〳〵の事ではござるまいと申されたれば、親達が圖にのり、嫁入して、先方で恥をかきませぬやうにと、只今いたした外に、松明・花むすび・晝も、少しは習はせましたと、段々と娘自慢、ソコデ先生が、それは中々大ていの事ではござりますまい。夫なれば、さだめて肩こしを採む、按摩の稽古も、御仕こみなされたであらうといはれた。主人むつとしたる顔つきで、貧乏はいたしてゐれども、娘に、按摩のけいこは、まだ習はせませぬといはれた。道二先生笑ひながら、それは近ごろ、

御心得ちがひでございませう。貧乏・金持によらず、女は夫の家にかしづけば、先方の親たちを、我親としてつかへるが道ぢや。其大切な勇。姑御が、御病氣のときに、爪かき・花むすび・茶や・花で、御いはうは出來ませぬ。出入の按摩や、たなご衆の手をからず、嫁御が、眞實に親たちの肩こしなをさするが、嫁御の道でございます。其道の修行に、按摩の御稽古はまだ數と、申したのでございます。とかく役にたつ御稽古が、肝要ぢやと、いはれました。流石の主人も、大きに我を折り、赤面して、御詫を申されたと承はりました。

なる程、琴・三味線も、よろしいが、撫さすりの介抱を心がけるが、子たるもの、道ぢや。是で道はどこにあるやら、とくと御考へなされませ。遊所ぢかいところでは、得ては娘の子に、琴・三味せんを稽古させて、藝者の風俗を見習はす。ぢやに依て、娘らしうそだつが、すくなうございまして、親の目をぬすんで逃げたり、走つたりが、多うございます。これは娘御の、わるいのぢやない。親御のそだての、わるいのぢや。尤も、琴・三味線、端うた・淨るり、やくにたゝぬと申すのではございりませぬ。心をつけて見ますれば、端うた一ツでも、皆善をすゝめ、惡をこらすのをしへでございます。アノ四ツの袖と申すはうたに、

うき中のならひとしらばかくばかり、花のゆふべのちぎりとなるも。

此唱歌で、御考へなされて御らうじませ。是はこれ、若い男と女と、親のゆるさぬ縁むすび。面白からうと思ひのほか、おもふやうにならぬ。うらいつらい世の中ちやとしつたら、かうはせまいものよ。後悔した文句でございます。こんなことは、世間にはまゝあること。嫁を貰うたら面白からうのと、鍋尻こがさぬ畑水練の、ムチヤクチヤじあん。思ひの外に、所帯持帯を持つたらうれしからうのと、鍋尻こがさぬ畑水練の、ムチヤクチヤじあん。思ひの外に、所帯持つて見ると、面白うもなんともない。唯今日に追廻され、髪も、かたちもかまはゞこそ。まき髪に前垂帯、ふところへ子をねちさんで、みそこしさげて歩行て見たがよい。どのやうなものであらうぞ。是みな、親の教訓をきかず。時節到來をまたずして、はやまつて餓所帯。これは誰がしつた事ぢや。皆おのれ〳〵が、いたづらから、夫を何の分別もなう、三味線さへひくと、面白い事に思ひ、五ツの勘辨のない女の子に、大きな三味せんをだかへさせ、仕かたがない故、つぎ棹にのぼりついて、キイナ聲出して、唱うてゐるを、よろこんでござる親達は、御氣の毒千萬なものでございます。御油斷をなされまするな。うろたへると、琴・三味せんで責つた子は、親をすてゝ走つたり、鈦落ちしたりする事があるものぢや。すべてうはきらしい、花やかな事には、かならず、ひよんな事が出來ます

る。此四ツの袖も、作者のこゝろは、いたづらをいましむるをしへの道ぢや。芝居・浄瑠璃・はやりうた、とかく目のつけやうがちがひますると、大間違になるものでございます。琴・三味せんを教へて、嫁入先で、間に合さうと思うたが、思ひの外に間に合いで、嫁入せぬさきに、忍び男をこしらへて走るのは皆目の付けやうの、ちがふに依てぢや、

是で面白い話がございます。むかし京にすむ蛙が、兼れて大阪を見物せんと、望で居りましたが、此春おもひ立つて、難波名所見物と出かけ、のさ〳〵と這ひまはり、西の岡、向の明神から、西街道を山崎へ出で、天王山へのぼりかゝりましたが有つて、是も西街道、瀬川・あくた川・高槻・山崎と出かけ、天王山へのぼりかゝり、山の嶺で、兩方が出合ひました。ナニが互に仲間同志なれば、めん〳〵の志をはなし、扨兩方がいふ樣は、此やうにくるしい目をして、漸々とまだ中程ぢや、是から互に京・大阪へゆきなば、足も腰もたまるまい。爰が名におふ天王山の嶺、京も、大阪も、一面に見わたす所ぢや。ナント互に足つまだてゝ、背のびして見物したら、足のいたさが助からうと、相互に相談きはめて、兩方がたちあがり、足つまだてゝ、向ふをきつと見わたして、京の蛙が申しまするは、音にきこえた、難波名所も、見れば京に

かはりはない。術ない目をしてゆかうより、是からすぐに歸らうといふ。大阪の蛙もめなばち〳〵して、嘲笑うていふやう、花の都とおとにはきけど、大阪にすこしもちがはぬ。さらば我等もかへるべしと、双方互に色代して、又のさ〳〵と這うて歸りました。これが是、おもしろいたとへではござりますれど、つひに御合點がまゐりにくからう。

蛙は、むかふを見わたした心なれど、目の玉が背中についてあるゆゑ、ヤツパリもとの古さとを見たのぢや。何んぼほど、にらんで居ても、目の付所の、ちがうてあるには、氣が付かぬ。うろたへたかへるの話し、よう聞いて下さりませ。或人の發句に、

手はつけど、目は上につく蛙かな。

おもしろい發句でござります。ハイ〳〵畏りました。左樣々々。御尤でござりますと、口にはいへども、目は上につく蛙かなで、おれが〳〵の向ふみず、是を其心を放つて求むることを知らずと申します。なんぼ、おれが〳〵で、物をやり付けるとしても、中々おれがの細工では出來ませぬ。斯樣に申せば、おれがからだでおれが働き、おれが錢をまうけて、おれが口におれが物をくふのぢや。人さまの御世話にはなるまいし、おれがでなうて、どうして世間がわたれるものぢやと、滅多におれがないふ人があるものぢや。是はきつい了簡ちがひ。御上樣の御政道が、なかつたら、一日もおれがではゐられぬ。

昔一の谷のいくさのとき、源義經公が、丹波の三草から攝津國へおしよせらるゝとき、山中に日を暮して案内はしらず、武藏坊辨慶をめして、例の大松明をともせと、御意なされた。辨慶畏つて、諸軍勢に下知をつたへ、走りよつて、谷々にある家々に火をかけますれば、一面にもえ上り、此火のひかりを便として、一谷へ出られたと承りますが、是はおれが藏ぢやの。是はおれの家ぢやの、これはおれが田地ぢやの、是はおれが娘ぢやの、是はおれが女房ぢやのと、どの樣に、おれが、おれがなど、かつぎあるいても、天下のみだれてあるときは、スツポンの間にも合ひませぬ。

有がたい事には、四海太平になさまり、御仁政のいたらぬ隈もなく、それ〴〵の御役人さまが、夜のまもり、晝のまもりと、御まもりなされてござればこそ、屋根の下に寢てはゐられ。どうしてゐれが細工で、手足のばして、ねてゐるゝものではない。雨戸をしめた歟。表の戸を締めたかと、吟味しまはつて、まづこれで用心よしと落付いて御やすみなさる。その用心は、どんな用心ぢや。四分

板一まい。しかも裏表からけづりて、二分板一まい。何ほどの用心ぢやぞ。大きなおならしても、ひゞきわれる位ぢや。それを盗賊がこはがつて這入るまいか。チト思案して御らうじませ。皆これ御上樣の御仁德。けつこうな御代に、うまれ合した、冥加のほどと思はずに、おれが〳〵と氣隨・氣まゝないひつのつて、こちの身代は千貫目、仰向けにれてゐても、五百年や七百年は、あそんでくうてゐられる。藏が五とまへ、家屋敷が二十五ヶ所、かしつけの證文が三百貫目。これほどあると、土佐をどりして奢ても、五十年や百年は、貧乏する氣づかいはないと、脊中に目のある蛙了簡。むかふ見ずの胸算用、大丈夫な、御要害ぢや。何んにも頼みにはなりませぬ。寢てゐるうちに、彼の大松明にならうやら、大地震がおこらうやら知れぬが、浮世のありさまでござります。此頼まれぬといふについて、今一つ話がある。眠さましに能う聞いて下さりませ。

アノ榮螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。ソコデあの榮螺が、何ぞといふと、うちからふたを、びつしやりしめて、丈夫な事ぢやと、思うて居まする。鯛や、鱸がうらやましがり、コレさゞえや、おまへの要害は、大丈夫なものぢや。うちから蓋をしめたがさいご、外からは手がさせぬ。さりとては結構な身のうへぢやといへば、榮螺が髭をなでゝ、おまへ方が其樣に、

いうてくれるけれど、あまり丈夫な事もない。しかしながら、マアかうしてゐれば、まんざら難儀なこともないと、卑下自慢をしてゐるとき、ざつぶりと音がする。榮螺は内から急に蓋をしめて、じつと考へてゐながら、今のは何であつたかしらぬ。網であらふ歟、釣針であらふ歟。是ぢやによつて、要害が常にしてないと、どうもならぬ。鯛やすゞきは、取られたかしらぬ。さても心もとない事ではある。シタガまづ、おれは助かつたと、兎角するうち時刻もうつり、モウよからふと、そつと蓋をあけ、あたまをぬつとさし出して、そこらを見まはせば、何となう勝手が違ふやうな。よく〳〵みれば、魚屋町の肴やの店に、此さゞえ十六文と、正札付に成つてゐました。ナントおもしろいはなしでござりませぬか。おれが〳〵を引さらへと、家も、藏も、智惠も、分別も、臺も、後光も、丸でとられてしまうた事はしらず。氣のどくな榮螺、この樣な連中が、からや、天竺には、得てあるものでござります。

とかく、おれが〳〵は、たのみにはなりませぬ。ある人の道歌に、

はしなうて雲のそらへはのぼるとも、おれが〳〵はたのまれはせず。

これを其心を放つて、求むることを知らずと、仰せられたのでござります。何事も、わが身へ立ちかへ

つて、手まへの吟味には、氣もつかず。たゞ向ふへ〳〵と、目のつくが放心でござります。放心ぢやというて、心が飛でしまふのではござりませぬ。身に立かへる事の出來ぬのぢや。すべて是まで申すところは、金銀・財寶の事ばかりではない。器量をたのみ、奉公をたのみ、知惠をたのみ、分別をたのみ、力をたのみ、格式をたのみ、これさへあれば、大丈夫ぢやとおもふでござる人は、みな榮螺の御連中ぢや。とかく何事も、身にたち反つて、御吟味が御肝要でござります。（休息）

鳩翁道話　壹の下

人、鷄・犬の放るゝこと有るときは之を求むることを知る。放心有れども、求むることを知らず。學問の道他なし。其放心を求むるのみ。是は、孟子、たとへを以て、御しめしなされたのでござります。鷄・犬とは、犬・にはとり、すべて飼猫、あるひは鷄など、いつも家へ歸る時分に、かへらぬと、其飼主がうろうろと、たづねまする。犬にとられはせなんだ歟。蛇にとられはせぬ歟。もしや人がぬすんだかと、向三軒・兩隣、まよひ子を尋ねるやうに、モシこちの三毛は、こなたに居ませぬか。鷄はまゐりませぬかと、たづねあるくは、人情でござります。こゝが入用のところぢや。

犬・鷄は、紛失しても、格別害には成りませぬ。心は、身のあるじと申して、一身の旦那樣ぢや。その心が、物のために奪はれると、親のいけんも耳へいらず、主人の教訓も、空ふく風。蛙のつらに水かけた樣に、目ばかりぱち〳〵して、口には、ハイ〳〵というてゐれど、心こゝにあらざれば、見れどもみえず、聞けども、聞こえぬ。うまれもつかぬ、片輪ものゝ仲間入。これは是、みな心の紛失してあるに依てぢや。此こゝろを尋ねやうとも、さがさうともおもはず、親がわるい。主がわるい。夫がわるい。兄がわるい。八兵衛はわるい奴ぢや、おまつはいけぬ女ぢやと、むかふへばかり目を付けて、我身にたちかへつて、心を尋ねる事はせぬ。ナント、むごい事ぢやござりませぬか。

犬・鷄は尋ねても、肝心の心はたづねぬ。よくうろたへたものでござります。是ぢやに依つて、聖人はこれを御歎きなされて、人の道ある事を御しめしなされて下さる。此御示しを承はるを學問といふ。其學問の趣意は、此心を、たづねさがすのでござります。

故に、學問の道、他なし。其放心を求むる而已と、仰せられました、而已とは、盡き〳〵て、餘りなきの辭。心を求むるの外、別に學問らしいものはないと、急度御うけ合なされた御證文でござります。強ち、唐・やまとの古事來歷を知り、文字の穿鑿ばかりするを、學問とは申しませぬ。兎角心のとぢ

や。八千餘巻の經論も、諸子・百家の書物も、皆心のゆくへをしるした所書でござります。

此心を求むるとは、前以て申す我身に立ちかへる事でござります。立ちかへる事をしらぬと、恐しいものぢや。どこまで往うやら知れませぬ。又立ちかへると、有りがたいものぢや。孝子にも、忠臣にも、立どころに成られまする。善惡二つは、身に立ちかへると、かへらぬとの、二ツの境。道二つ、仁と不仁と仰せられたも御尤でござります。

是に付いて、おそろしい、又有りがたい話がござります。御れむからうが、聞いておくれなされませ。去る田舍に、相應にくらす百姓がござりましたが、夫婦の中に、男の子一人。ナニか可愛さのあまりに、牛が子をれぶる樣に、愛だてなうそだて上げられました。ソコデその子が、次第に横著ものに成り、馬の尾を拔いたり、牛の鼻をくすべたり、近所の子たちを、假初にもたゝいたり、泣せたり、わやくの中に成人して、とう〳〵手にあまる不孝者、小力はある大酒はのむ、小博奕はうち覺え、いつしか神事相撲を取覺え、かりそめにも、喧嘩・口論・女郎買やら、妾ぐるひやら、たま〳〵親達が、意見すると、大聲をあげてはりこみをくはせ、こなた衆が、放蕩者ぢやの不孝ものぢやのと、其不孝ものは、誰がたのんで生んだのぢや、おれはうんでもらうて、迷惑してゐる。夫ほど放蕩もの

が、きらひなら、元の所へなさめて貰はう。さうすると、おれもたすかるなど、滅法な口ごたへ、親たちも詮方なう、其身はめい〳〵年は寄る、息子は次第にいきりをる、可愛いと、仕樣がないとて勘當も得せず、氣隨・氣まゝをさせておくと、いよ〳〵圖にのり、かしこでは投げたの、こゝでは腕をれぢ折つたのと、あら〳〵しい大喧嘩。其たびごとに、親達はいふに及ばず、親類・緣者の胸板に、釘うつ樣な恐しい、惡巢ものがござりました。

是はこれ、腹のうちから、此やうなわんぱく者ではなけれども、おれが〳〵が增長して、心を取失ふたばかりで、此やうな難作もの、ナント放心は恐ろしい事ぢやござりませぬ歟。勿論親類・緣者から、親達へ勘當せいと、たび〳〵催促はするけれども、何分一人子の事なり、けふは勘當、あすは義絶と、口ではいへども、勘當もせず、徒にとし月が立つて、かの横著ものが、二十六歳に成りました。次第に惡行はつのる。後々は、親類・緣者へ、どのやうな難儀を、かけやうやら、怖氣が立つたもの故、一同に評定して、親たちへ言うてやるには、急に勘當をさつしやれぬと、親類は申すに及ばず、村中へも、いたされば成りませぬ。アノ息子を、あのまゝにしておかれると、親類中、各々方と義絶どんな難儀がかゝらうやらしれぬ。御夫婦には、恨はなけれども、面々、家が大事でござるによつて、

義絶を願ひませう歟。勘當をさつしやるか。有無の返事が聞きたいというてよこした。ソコデ親達も、せんかたつき、子ゆゑに親類義絶になつては、先祖へもすまぬ事、さらば今夜、みな寄合をして下され、相談の上、願書をしたゝめませう。勿論、親類中、いづれ御連印下されればならぬ。御苦勞ながら、印形、御持參にて、暮早々より、御より下されいと返答せられた。古語に、老牛、犢をれぶり、牝虎、子をふくむと、畜類でも、鳥類でも、身にかへて子を可愛がる、ましてや、人のうへで、其子を勘當せにやならぬ樣に成つたら、さぞかなしい事でござりませう。これみな其子の放心から起る事ぢや。身に立ちかへりさへすれば、波風もなうをさまるのにさり迚も、身に立ちかへる人がない。親は勘當しともなうて、成らぬけれども、子の方から勘當してくれと、突付けろには、こまつたものぢや。近世、德本上人の歌に、

これほどによれつもつれつする彌陀を、あべて頼まぬ人ぞはかなき。

是はこれ、佛の大慈・大悲をいふのぢや。我方では、本心が、それはわるい。これが宜ないと、明けてもくれても、御世話をなさるれど、身最負・身勝手の私心・私慾が、さうはまゐるまいと、兎角本心にそむきをる。親の子をおもふも、不孝ものゝ、親を思はぬも能う似たものぢや。あべてたのまぬ

人ぞはかなき。銘々本心に立ちかへつて、御助かりなされませ。

さてかの野良息子は、この日、近村で、博奕をうつてをりました。折から、村の友達が來て、今夜貴樣を勘當すると、親類が參會するげな。何んぼ、貴樣のやうなものでも、勘當しられたら、定めて難儀をするであらうと、半分きかずに、大聲あげて、何ぢや。今夜おれがうちで、勘當の評定歟。こいつ面白いことが、出來てきた。全體、親父や、母者のほえづらが、此とし頃、見とむなうて、氣色がわるうて、こたへられたものぢやない。勘當うけたら、一本だち、唐へ飛ばうが、天竺へ宿がへしようが誰が點のうち人がない。このやうなありがたい事はないぞ。さらば今夜、評定の席へ乘り、こんで、何でおれを勘當するのぢやと、一番圖十郎をふんで、ゆすりかけたら、五十兩や七十兩の退代は、巾著へ入れたやうなものぢや。其金持つて、京歟、大阪へ出て、見せ付やはじめたら、おもしろい事であらう。ドウゾ今夜、首尾よう山のあたるやうに、前いはひに一盃せうと、同じ仲間の惡鬼たちと、茶わん酒の大酒もり、日のくれまへに、泥のやうに醉うたところで、さらば、此勢ひに、内へいんで、一ト勝負はつて來やうと、大脇ざしをぼつこみ、我が居村へ歸つた時分は、丁度初夜まへ、大かた今時分は、親類どもがより集り、ない知惠の底ふるうて、評定をして居るであらう、その所

へなどり込んで、大たいけにたいけたらば、百両ぐらゐは、つかめるであらうと、既に我が家へ歸らうとしたが、きつと思案し、親類よつてゐる中へ、おれが顔を見せたらば、皆俯いて居をるであらう。其中で大聲あげるも、何とやら、拍子がない。おれが事をあしざまにいうて居る。其圖にのり、踊りこまぬと、座つきがわるい。コイツハ一ばん、思案を仕かへて、うらの藪から、さためておれが、あくそ、もくそを、店おろしする。り、一家のやつらが、評定を立ち聞きしたら、座敷の椽さきへまはであらう。其拍子に、戸・障子、蹴破り、大がみなりと出かけたら、拍子があつておもしろいと、ひとり思案の、雪踏をぬいで、腰にはさみ、尻引からげて、裏の藪から、切戸をこえ、椽さきへ廻つて、見れば、果して内には、ひそ〳〵と、評定の最中、雨戸のすきから覗いて見れば、親類・緣者が、車座に直り、めん〳〵願書に判をおしてゐる。

その願書が、兩親の前へくると、かの息子がこれを見て、サアこいが勝負ぢや。親父が判を、仕やるな相圖に、この戸を蹴やぶつて、飛込まうと、居合ごしに成つて、息をつめてのぞいてゐる。

ナント人もおそろしい心に、なれば成るものではござりませぬか。孟子の、人の性は善なりと、仰せられたるに、微塵も違ひござりませぬども、其習、性となるときは、此やうなおそろしい惡蟲もの

が出來まする。此とき孔子・孟子が、千日道を御ときなされたとて、立かへりさうな勢ひぢやない。かう堅まつた惡人は、むけん地ごくの、釜ごげとなをとりをめされても、中々性根のつきさうな事ではないが、不思議にこのむすこが、惡心をひるがへして、大孝行の人になるといふ、是れからが成佛の段でござります。

人の親の心はやみにあられども、子をおもふ道にまよひぬるかな。

かの親たち、夫婦のまへに、勘當の願書がまはつてくると、母親は大聲をあげてなき出だす。爺親は、齒もなきはぐきを、くひしばつて、さし俯いてゐらるゝ。やがてくもつた聲で、おばゝ、印形を取つてござれ。母親は、返事も出でかれ、なく〳〵簞笥のひき出しから、革財布に入つた印形を、爺親のまへにおくと、彼のら息子は、兩戸のそとから息をつめて伺うてゐる。そのうちに、ごて〳〵と財布の紐をとき、印形をとり出し、肉をつけて、既に判をおさうとするとき、母親がその手にすがつて、先づ待つて下されといふ、てゝ親は、此期におよんで、親類中が見てゐらるゝ、未練な事をいはしやるなといへども聞かず。マア、私がいふことを聞いて下され。尤も、あの不孝ものに、此家を譲つたら、三年たゝぬうちに、草をはやすでござらう。それがかなしといつて、天にも地にも、タツタ一

人の子を勘當したら、跡へかはりをもらはねばならぬ。其貰うた養子が、實體で、こちら夫婦に孝行なし、家も相續してくれいばよけれども、どうもたしかに、養子は孝行なと、定まつた事もござるまい。モシその養子が不心得で、家を野原にしようやら、此方等のやうな、肩のわるい夫婦なれば、そのほども知れぬではござらぬ歟。おなじ子ゆゑに、つぶす身代なら、悴のために家をうしなひ、なじんだ村をたち退いて、夫婦、袖乞になるとも、我子の尻からついて歩行いたら、わしは本望におもひます。五十年このかた、一生に一度のれがひ、ドウゾ聞入れて、勘當をやめて下され。子ゆゑに、乞食をすると思へば、恨にもおもひませぬと、聲をあげて泣々いはるゝ。親類もこれを聞きて、一同に顔を見合せ、親父が何といはるゝぞと、まもりつめて見てゐれば、爺親は、何おもふた歟。印形を財布へいれ、手ばやに財布のひもをしめて、かの願書を、親類のまへにさしもどし、さて〳〵一家中へ對して、面目ない事でござれども、いま、ばゞがいふところ、尤もにおもひまするゆゑ、向後、悴は勘當はいたしますまい。かういへば、其あまい心でそだてた物ゆゑ、あの樣な不孝ものが出來たと、定めて御まへがたが、笑はつしやらうが、笑はれてもくるしうござらぬ。勿論アノ悴を勘當せれば、この家がつぶれる事は、物三年もちはすまい。わが子ゆゑに、先祖代々の家を野原にするのは、先祖

へ對してすまぬといふ事も、能う合點して居りまする。又勘當せれば、おまへがたと不付合になり、親類の義絶も合點でござる。必定こちらが村を立ちのくとき、無心・合力でもいはうかと、その用心の義絶であらうが、かならず案じて下さるな。世間の義理も先祖への不幸も、親類の義絶も、かへりみぬのは子が可愛いばかり。その子の尻から、ふしもの決して御まへがたへ無心、合力はいひませぬ。ハテ何で死ぬるも一生ぢや。可愛い子のために、大道にのたれ死、並木のこやしになるのも、このんですれば恨とはぞんぜぬほどに、早々おまへがたも内へ引取て下され。翌日から物もいひませぬぞ。子ゆゑなら何といはれても、かまひはござらぬと、同じく大聲をあげて男なきに泣るゝと、はゝおやも勘當せぬと聞いて、これもうれし泣になく。親類緣者はあまりの事にあきれ果てて、返答もせず。たゞ夫婦の顔をうちながめて居るばかり。

ナント、親の子にまよふあはれなこゝろを、御推察なさりませ。猫が、子をくはへあるくやうに、蔭になり、日向になり人のそしりも、先祖への義理も、わが身のつまらぬ行末もかまはゞこそ。子の可愛いにとられ切つて、迷ひにまよふた親の心。實にあはれに、氣のどくなものでござります。是が持つた親の心は、みなこの通り。先師石田先生のうたに、

子にまよふ親の心を見るにつけ、我かぞいろもかくやありけむ。

人の親の、子にまよふを見て、我父母もかくぞおぼしめさんと、おもひやりて、御よみなされた歌ぢや。實に此通りに、違ひはござりませぬ。此親の、大慈・大悲の光明が、かの不孝もの〳〵腸へしみわたると、有りがたいものぢや。さしもおそろしい、鬼のやうな横著ものも、五體を〆木でしめらるゝやうに覺え、何といふ事はしられとも、胸さきへ涙が突つかけ、聲をあげてなかれはせず、かます袖を口にくはへて、大地にたふれてしめ泣になないてねる。

圓位上人のうたに、

何事のおはしますかはしられ共、かたじけなさに涙こぼるゝ。

能うよんだ歌でござります。此とき、かののら息子が、親をかたじけないとおもうたでもなく、又有がたいとおもふのでもない。何かはしらず、親の慈悲心がはらわたへこたへると、能うしたものぢや。立つても、居てもねられぬ。これが是、人々固有の本心というて、あきらかな徳に、生れ付いてはねれども、おのれが氣隨・氣まゝの身勝手で、しばらくその光りをかくしてねたのぢや。されども、親の大慈・大悲の光明で、はらわたを貫かれ、自然と息子のもちまへの光明が、さそはれて、輝き出すと、氣隨・氣まゝのむら雲は、いづくへやらきえうせて、眞實そこから、親の慈悲がありがたう成つて來る。

とくさかるそのはら山の木の間より、みがゝれいづる月のさやけさ。

格別の惡黨ものが、本心にたちかへると、一際すぐれて、みがゝれ出づる月のさやけさ。ナントありがたいものではござりませぬ歟。

さて、彼息子はすぐさま座敷へかけこみ、親たちへ詫言せんとはおもうたが、まてしばし、此まゝ騙し込みたらば、親類・緣者もおどろき、いかなる事、仕出だすぞと、親達も御こゝろづかひであらう。何知らぬ顏にて、表口から座敷へ出て、親類について詫言せんと一決して、しのび足に、裏よりおもてへまはり、わざと雪踏の音たかく、咳ばらひとともに座敷へ通れば、親類は大におどろき、親達はにくい我子の顏を見て、夫婦とも泣いてござると、かの息子も何もいはずに、さしうつぶいてねる。良ありて、親類中へ、さて是までは、勘當々々と度々聞きましたれども、さのみつらひとも存ぜなんだが、今夜の寄合とうけたまはり、どうした事やらしきりに心ぼそう覺えまする。何分これまでは、重々〳〵の無調法、此うへは急度あらためますするによつて、今夜の勘當しばらく御用捨を下され。

ながうとは申しますまい。わづか三十日の日のべ、其うちに性根があらたまらずば、其時勘當しられても、一言も申分はござらぬ。ドウゾ、御まへがたの御取なしで、親達が三十日、日延をいたしてくれらるゝやう、御詫びをなされて下されいと、いつにない頭を盤へすりつけて頼む。此とき親類中は、親達が手づよい返答に、その座しらけて、立つにもたゝれず、拍子のない折から、此息子が一言に、これ幸ひと一同に口をそろへ、今夜の所は待つてやつて下されと詫言する。親たちは、本心に立ちかへらいでさへ、勘當はせぬ心、まして今の一言を聞いて、たゞうれし泣にないてゐらるゝ。親類もこれをしほに、隨分孝行にさつしやれと、云ひ捨てゝ、其夜の評定はやみました。

これから彼息子どのが、手のうらを返す様に、孝行な人になり、二親につかへるありさま、實に小兒の父母を慕ふがごとく、これまでの悪行は、あとかたもなく消え失せました。此事世間に取沙汰がたかうなり、半年たゝぬうちに、御地頭様の御耳に入り、つひに御目がれを以て、大庄屋役をかの息子に仰付けられました。是でかの息子の孝行のしわざ、御推察なされませ。さて、其のち三年ばかり立つて、母親が大病末期に、かの息子どのをよんでいはるゝには、いつぞや勘當の評定の節より、何とおもうたか、志があらたまり、此うへもなう孝行にしてくれる。モシ其時に、そなたの心

が改まらず、其うちにおれが死んだらば、地獄へゆかうより外はない。今は其方が孝行にしてくれる、何もおもふことがないゆゑ、今死んだら極樂へゆくにちがひはない。スリヤおれを佛にしてくれるは、皆其方が孝行のゆゑぢやと、手をあはせて拜みながら、臨終をしられたと申す事ぢや。

なるほど現在の因を以て、未來の果をしると、この世で心ぐるしければ、未來もまた心苦しい。今日の手おくれはあすへ付いてまはる。心の苦しいは地獄、心のらくなは極樂。親の苦樂は、子たるもの、所作にある。子善なれば、親は佛。子悪なれば親は鬼になりますぞと。一旦若氣のあやまりで、何の分別もなう、親に心づかひ懸けたり、親をなかせたりの不孝も、此道理をわきまへて、今日たゞ今ごゝろざしをたて直し、我身に立ちかへて孝行すれば、親御様は、今日から極樂ぐらし、又立ちかへるをがならいで、是までの不行狀のやみませぬと、親御は其まゝ地獄ぐらし。地獄・極樂はたゞ身にたちかへると、かへらぬとでござります。ここのたち返るな、放心をもとむるといふ。是すなはち學問の事ぢや。猫ほまたあとは明晩御はなし申しませう。（下座）

鳩翁道話　貳の上

孟子の曰く、今無名の指、屈んで信ぴざるあり。疾痛事に害あるにあらず。如し能く之を信ぶる者有るときは、晉・楚の路を遠しとせず。指の人に若かざる爲なり。指、人に若かざる則は、之を惡むことを知る。心、人に若かざる則は、惡むことを知らず。此を之、類を知らずといふなりと。

さてこれは、前晩辯じました、仁は人の心なりの次の章でございます。則ち學問の道、他なし。其放心を求むるのみ。といふ言によつて、孟子、またたとへを引いて、人の心の大切なる事を御しめしなされたのでございます。今とは、今こゝにと申す事ぢや、無名の指とは、小指の隣の指でございます。其外の指は、親ゆびを大指といひ、人さしゆびを頭指といひ、高々指を中指といひ、小指を小指と申します。たゞ小指の隣のゆびに名が無い。尤も紅さし指とは申しますれど、是は御婦人がた計の事で、天下通用ではございませぬ。ソコデ名のないが、名と成りまして、無名指と申します。何ゆゑ、まだ名がないぞといふに、トント用のない指ぢや。物を握るは、親指、小ゆびの力、つむりなかくは人さし指、酒のかんを試むるは、小指の役。皆それ〳〵に用があれども、無名指ばかりは無用のゆび、あつて邪魔にならず。なくて事は缺けませぬ。一身のうちにて、尤も輕いものぢや。

其指が屈んでのびぬ。勿論、いたみもかゆみもない。故に、疾痛、事に害あらずと申してある。畢竟なくても苦しからぬ指なれば、まがつて有つても、いたみさへなくば、捨てゝおいて能い筈なれども、もしこれをよく信してくれる醫者どのがあると聞いたら、道の遠いもいとはず、さだめて療治をうけにゆくであらう。それは何ゆゑ、指が世間の人と、少し違うてあるゆゑ、恥かしうおぼえて、治をうけまするのぢや。晉・楚の路とは、晉の國と楚の國とは、道法が千里、これは違いところをいとはずと、いふたとへぢや。是其指の人なみにないを、いやがるから參ります。ソコデ、指の人にしかざるが爲なりと申してございます。

成ほど、能う人は恥を知つたものぢや。其筈でございます、羞惡の心は義の端と申して、恥をしるが人の生れつき、しかしながら其恥をしるに、二樣ございまして、姿の恥を知つて心の恥をしらぬ人がございます。是はきつい御了簡ちがひぢや。心ほど大切なものはございませぬ。心は身の主と申して、一軒の内では旦那どのと同じ事ぢや。其旦那どの〳〵心が、煩ひ、くるしんでゐるを捨て〳〵置いて、家來のからだばかり可愛がり、膝がしらすりむいた、ほくちを付けい。灸がいぼふた、膏藥はれつ、風ひ

いた、葛根湯・根ぶが雑炊・生姜ざけと、かりそめにも、身體の御世話はなされますれど、心の事は一切御かまひなしぢや。人にうまれて、人のやうな心をもつたり。蛇のやうな心を持つたり。烏のやうな心を持つたり。狐のだばかり吟味してござるは、どういふ所から間違うてきたやら。此間違ひは、ふろうある事と見えて、指、人に若かざるは、之を悪むを知る。心、人に若かざる則は、悪むことを知らず。此を之、類を知らずといふ。と、孟子も、おほせられた。

是は、重いとかるいと分らぬのぢや。大を捨て〳〵小をとると申すものでござります。人情は、一般、小はきらひ、大はすき。輕いはきらひ、重いはすきぢや。ソコデ、親類・縁者へまねかれて、御馳走にあづかるとき、本膳が出る、あとから焼物を引いてまはると、はや目の玉がきよろつき出し、向三軒。隣どなりをにらみまはし、わが焼ものと見くらべて、隣のやき物が五六歩ほど大きいと、肝癪がむれにつつばり、これの亭主は何と心得てゐるぞ。太郎兵衛も御客、おれもお客ぢや。なんでおれには、ちいさい焼ものをつけたのぢや。何ぞこれには、意趣・意恨でもある事歟と、腹の中がれぢれ出す。能うおもうて御らうじませ。焼ものに何の遺恨があるものか。是ほどの僅な事でも、小をきらひ大をとる。夫に何ぞや、指のまがつたのを恥かしう覺えて、心のまがりは苦に成らぬといふは、大をすてて小をとると申すものぢや。

さるによつて、孟子も、此を之類を知らずといふと御しかりなされた。ナント、人は能ううろたへたものぢやござりませぬ歟。古歌に、

かたちこそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなん。

指や足に、かいはつた事ぢやござりませぬ。皆心のことぢや、心がまがつて有つては、色は白からうが、鼻すぢは通つてあらうが、夫は見せかけばかりで、何のやくにたゝぬ事、時絵の重箱に、馬の糞入れたやうなものぢや、これをほんの見かけ倒しと申します。

飯たきのおさんどのが、ながしもとで鍋の尻をあらうてゐる。丁稚の長吉が側へ來て、おさんどん、御まへの鼻のさきに墨がついてある。見とむないと教へてくれる。おさんどんは嬉しがつて、そうかへどこに付いてあると、指のさきに手拭をまいて、額口でおのれが鼻の先をながめ、後藤が目貫をほるやうに、そこら中ひれくりまはして、長吉どん、モツとれたかへ。イヤ〳〵ほうべたの方へ餘計になつた。ドレ〳〵どこにと、水鏡に顔をうつして掃除してござる。おさんどんの心には、アノ長吉

どんは可愛らしい子ども衆ぢや、晩の御菜を、杓子あたりで御禮申さにやなるまいと、滅多にうれしがつて、禮をいふ。

もし此長吉どのが、コレ〳〵おさんどん、おまへの根性は、しぶとい根性ぢや。チツと、ふくれづら、やめなされといふたら、お三どんが何といふであらうぞ。チト考へて御らうじませ。あた、なめくさつた、小丁稚づら、わしが心がゆがんであらうが、三角に成つてあらうが、おのれが世話になるもの歟。おのれ覺えてけつかれ、小便たれても、ふとんの洗濯はしてやりはせぬと、角のはえぬ鬼の様に成りまする。

これは、おさんどんの事ばかりぢやない。イヤナニ、軍太兵衛どの、御上下の御紋がすこしかたよつて見えまする。軍太兵衛、しかつべらしう肩衣を正して、コレハ〳〵御氣を付けられ、千萬忝うぞんずる。何なりとも、相應の御用もござらば、承るでござらうと、嬉しさうな顏して挨拶せらるゝ。こいつが間違うて、時に軍太兵衛どの、足下の御心術、甚だ以て其意得ませぬ。チト心を正直に御持ちなされ。心のゆがみが見えて、甚だ見ぐるしうござるというたら、どうするであらうぞ。刀にそり打つて、鍔うちならし、忽ち双陽におよぶであらう。

ナント、人はからだのと世話してやると、滅多にうれしがつてなほす。心のせわをする人があると、眞黒になつて腹をたて、その心を直さうとせぬは、どういふ拍子の間ちがひで、是ほど迷うたものでござりませうぞ。是はよその事ではない。御たがひに大歟小歟、色かへ品かへ、こんな間ちがひは得てありたがるものでござります。よう、御吟味をなさりませ。是がこれ、形は人の目にかゝれども、心は人の目にかゝらぬゆゑ、ゆがんで有りても、まがつて有りても、くるしうないと、此無分別からおころ事ぢや。是ぢやによつて、少しも油斷はなりませぬ。

ある所の旦那どのが、臺所に居眠てゐる。長吉および起して、コレ長吉、御客さまが、もう御歸りなされた。奥にある酒やさかなを、臺所へはこんだがよい。長吉目をこすり〳〵、ぶしやうに返事しながら、奥へ往つてそこらを見れば、硯蓋やら小鉢やら、うまいもの、勢ぞろへ。こはいものぢや。誰が催促もせぬに、目の玉をきよろつき出し、なんぢや、こいつは味さうなものがたんとある。硯ぶたは鷄卵の巻燒、タツタ一ト切はかのこつてない。よう喰ふ客ぢや。こいつは何ぢや。ハア、蒲ぼこぢやさうなと、ひと切つまんで口へほうばり、側をみれば、飯蛸が七ツ八ツ、南京のどんぶりの中に車座に座禪してゐる。こいつはえらいと、つまむところへ、旦那のあし音、これではな

らぬと秩べおしこみ、銚子・盃を俯伏いてとる拍子に、飯蛸がたもとからころ〳〵と落ちる。旦那目ばやく、それは何ぢや。長吉ぬからぬかほで、畳をたゝいて、おとつついこい〳〵と申しました。何んぼ蜘蛛おしらひにしても、飯蛸は蜘蛛には見えぬ。隠れたるより、顕はるゝはなしぢや。これぢやによつて、人の心は隠されませぬ。

心に、怒があると、額に青すぢがたちまする。心にかなしみがあると、目になみだがうかみ、心にうれしみがあると頬へたにゑくぼが入り、笑ひ顔に成りまする。是みな心よりして顔へ出まする。目に涙が出て、心がかなしうなるのではございませぬ。額に筋が立つて、おとからはらの立つのではございませぬ。何事も心がさきぢや、その心におもふ所は、皆かたちへあらはれまする。これを中に誠あれば、外に形はるゝと申します。ナント、是でも、心のゆがみが、かくされるものでござりませう歟。口答も心の煩ひ、曇うたも心のわづらひ、早う養生をいたしませぬと、立煩ひは本腹がむづかしい。もし大病に成りましては、善婆・扁鵲が配剤でも、どうもいたし方はござりませぬ。さるによつて、其大病にならぬうち、心學を御すゝめ申しまする。一度、本心を、御ゑとくなされまするとゝ、奇妙なものぢや。ちよつとした身贔屓・身勝手でも、直に胸へこたへまする。

之について、ある人前かた、物がたりのついでに、さる兩替屋の主人の、得意のはなしなりとて申されたるは、兩替渡世は、金銀のよしあしを見分くるが肝要ぢや。其見わけ様を小者になしふるに、其家々にて違あれども、この兩替屋の主人のをしへかたは、始より少しも悪銀を見せず、たゞ宜しき銀を日々に見せ置き、しかと、よき銀を見覚えたるところ、ソト悪銀を見すれば、忽ちに、あしき銀としる事、鏡をてらして、物を見るがごとし、これ一目下に、悪銀と見極むる事は、最上の銀を見覚えたるゆゑなり。かくのごとくをしふる時は、この小者、生涯悪銀を見損ずる事なしと申されたるよし、承はりました。此はなしの眞偽は、そんじませぬけれども、道理においては、成ほど尤なをしへかた、實にあぶなき氣のない稽古でございます。

しかしながら、最上の銀を見覚えても、半季・一年、外商賣をして金銀を取りあつかはぬと、又もとの素人方同様になりて、よしあしを見分くる事が出來ませぬと、申されました。是でよう御合點なされませ。一たび本心を見覚えまするとゝ、其あとから、すこし計の身贔屓・身勝手が、出來ても直に知れる。なぜなれば、本心のあきらかなる、無理のない事を見覚えた故、ちよつととても無理らしい事は、中々うけつける物ではございませぬ。

しかし、又本心に遠ざかり、本心を見わすれると、以前の通り眞黑に成つて、惡銀が見えにくうなりまする。御用心をなされませ。わろうすると、本心ぢややら、惡心ぢやから、我とわが手に合點がゆかず、そのくらゐ心から、おもひつくほどの事が、思ふやうにゆかぬと、ハアスウ〳〵と、肩で息をせにやならぬ。難儀なものぢや。せめて、だまつてなとゐれば能けれど、かり初にもくるしい、せつないと、腹の中のゆがみを、人にあふては白狀をいたしまする。さり迚は、こまつたものぢや。是ぢやに依て、何とぞ一度、本心の正銀を見覺え、人欲の惡銀を見損ぜぬやう、どうぞ御互に一生、道にはなれぬ樣に、いたしたうございます。

これに付いて、おもしろい咄しがある。序に聞いて下さりませ。秋も夜さむになりました頃、相應にくらす町人衆が、五六人云ひ合せて、鹿の音をきゝにゆかうと、何が辨當、小竹筒を用意をし、ある山寺に心やすい和尙がある、これを心あてに尋ねゆき、客殿をかりうけ、とまりがけの遊山、鹿の音をまちわびて、歌をよむ人もあり、あちらでは詩を作り、こちらでは發句、さいつ、押へつ、入相のころになつても、トント鹿がなきませぬ。初夜になつても、四ツになつても、鹿の音は一切聞こえず。これはとうぢや。モソ鹿がなきさうなものぢやと、までどもなかず。そろ〳〵眠氣はさいて來

る。詩も、歌も、いやになり、あくびに、うき世咄もとぎれ、みな默然としてゐる中に、五十ばかりの男、盃を前にひかへて、

さて今晩は、いづれもさまの御かげで、背からゆるりと、御物がたりをいたして、能いたのしみをいたしました。しかしながら、私は箇樣に樂しんで居りますれど、さだめて家内のものが、心づかひをいたして居りませうと、不圖そんじ出ましたれば、どうやら、酒が、理に入るやうに覺えますといふ。座中の人が、夫はどういたした譯でござりますぞ。サア、御聞き下さりませ。御そんじの通り、一人の悴、當年二十二歲に成りますが、去とてはこまつた奴で、私が宿に居ますれば、しぶら、こぶらと、店の用を手傳ひますれど、私のかげが見えぬと、尻に帆かけて遊所がよひ、勿論、親類・緣者ども、いろ〳〵と敎訓をいたしてくれまするが、一向馬の耳に風同樣、アノやうなやつに、身代をまかさにやならぬかと、ぞんじますれば、心細いものでござります。おかけで、何一ツ不足のない、私の身分なれども、子ゆゑに、毎日、毎夜、血のなみだ、さりとてはこまつたものぢやと、吐息をついて咄されると。

傍から、四十四五の男が、イヤ〳〵あなたのは、御難儀とは申すものゝ、畢竟、御子息に金つかは

ろ、といふ迄の事で、強て御心配にはござりますまい。私などは、中々左様な事ではござりませぬ。兎角近年、店のものどもが、假初にも引負をいたして、五十兩はまゝよ、七十兩はまゝよと、年々の帳面の明き、能うおぼしめして御らうじませ、鼻たれの時分から、世話をいたして、どうやらかうやら、少しばかり、店の用にたつ時分、引負をこしらへてくれては、主人は何に成りまするものぢや。それから見れば、あなたのは、我子に金をつかはれるばかりの事といへば、

またかたはらから、イヤ〳〵、店の衆に金をつかはれるは、まだしもぢや。此方どもは、近頃都合がわるうござつて、得意さきが、かたはしから倒れまする。あちらでは三貫目、こちらでは五貫目、實に氣の滅るやうにござりますと、いふ下から、

向ふの席にすわつてゐる老人が、扇ばち〳〵ならしながら、何れもの御愁歎、御尤でござれども、又親類・緣者どもから、金の無心をいはれたり、印形をしてくれといはれたり、家内づれのかゝり人、これもまた、困つたものでござりまするとて、半分いはず、隣の人が、イエ〳〵、いづれも樣のはみな榮耀ぢや。私の、つらい事を御きゝなされて下さりませ。どうした事やら、家内のものと、母との中がわるうござつて、日がな一日、牛の角づき合ひ、内中が

くすぼりますゆゑ、イツソ、里へ歸しませうと思へば、幼少のものは二人も有り。挨拶すれば、女房の顯眞をすると、母親の機嫌がそこねまする。女房な叱れば、他人ぢやと思うて、ひとりむこう、つらうさつしやると恨み、イヤモウ中にたつた柱で、つらいの、苦しいのと、申すやうな事でござりませぬと、拍子にかゝつて、身のうへの難儀ばなし、其内に、一人氣が付いて、ほんにモウ鹿が鳴きさうなものぢや。あまり咄にしこりが來て、鹿の音を聞きはづした歟しらぬと、緣の障子を引きあけてみれば、大きな鹿が、庭さきに默然としてゐる。是はどうぢや。そこにゐるなら、なぜさつきにから鳴かぬぞといへば、鹿がぬからぬ顏で、イエ〳〵わしは、おまへ方のなくのを聞きに來たのでござるといふた。

ナント、おもしろい咄でござりませうがな。老いたるも、若きも、男も、女も、金の有るも、金のないも、おしならして、晝夜愁歎のこゝろはやみませぬ。これが皆、心の煩ひずや。畢竟、すこしばかりの身びいき、身勝手のために、ならぬ事を無理やりに、やり付けうと、無分別から、さま〴〵の苦なうけるのでござります。一たび、本心を會得すれば、ならぬ事はならぬと知り、難儀な事はなんぎと合點して、強て身を遁れやうとはいたしませぬ。是を中庸には、富貴・貧賤・夷狄・患難、君子入

ろとして、自得せずといふ事なしと、いうてございます。此味がしれませぬと、苦樂は、體にあるやうに覺えて、心はわきへ捨てゝ置いて、ひたすらに形の樂を、もとむるところから、奢にうつり斉しよ〳〵になり、却てこゝろに苦をうけて、泣いてばかりゐる樣に成りまする。兎角何事も心の事ぢや。ドウゾ皆さま、御なきなされぬ樣の、御用心を御たのみ申します。（休息）

鳩翁道話　貳の下

心からよこしまにふる雨はあらじ、風こそよるの窓はうつらめ。

此うたは、高祖日蓮上人、身延山御隱居の節の、御詠歌でございます。人の心は、眞直ながうまれつき、其心のゆがむのは、是みな見たり聞いたりするに、取らるゝによつてぢや。たとへば、雨は眞直にふるもの、なぜなれば、空より下へおちるもの故。ゆがんで落ちる筈はないのぢや。夫に、窓へ横しぶきにあたるは、畢竟かぜの爲に、ゆがむのぢやと、御よみなされた歌でございます。

論語に子曰く、生けるや直し。罔て生けるは幸にして免る。と申して、なるほど、人は正直にないと、天地の間には起つてゐられぬ筈の事なれども、こゝろをゆがめて、まご〳〵と生きてゐるのは、ほんの是が、こぼれざいはひといふものぢや。生きてゐるといふもの〳〵、世間で、人のやうには申しませぬ。その筈でございます。人の心がないによつて、生きながら、鳥類・畜類の仲間いりを、せにやなりませぬ。

わが神國のたしへも、正直を本とすとあれば、見ますれば、おもい兩掛を、竹杖一本で、輕々と肩やすめする。能うかんがへて御らうじませ。あのほそい竹杖で、二十貫目の重荷が、杖のさきにかゝつてもたれぬのぢや。たてい置くによつて、二十貫目の重荷が、かゝつてもたれぬのぢや。

ある人の道歌に、

すぐなればおもにかけてもたれぬなり、世わたるわざの息杖ぞかし。

三間間口でも八間間口でも、息杖は大黒ばしら一本なり。五人ぐらしも、十人ぐらしも、旦那どのの心ひとつで、家内中の重荷が持つてあるのぢや。もし旦那の心がゆがむと、家内の重荷がひつくりかへり、大こく柱に蟲がいると、八けん間口がへたばつて仕まふ。兎にもかくにも、眞すぐな力は、有りがたいものでござります。大黒柱に、蟲が入つたのを、大工どのに見せると、建てなほさうより、

什様がないといふ。旦那どのの心に蟲が入ると、これも同じことで、焼直さうより仕かたがない。どうぞ、蟲の入らぬ間に、ゆがみを直すことがかんえうでござります。箇様には申すものゝ、誰ぢやというても、我こゝろをゆがめやうと、思ふ人はなけれども、難儀なことは、見るにとられ、聞くに取られて、思ひの外にゆがみます。このゆがむについて、おそろしい咄がござります。

ある御國に、三百石どりの次男、としごろは、廿ばかりの人、色情の事について、若氣のあやまりより、俄に、出奔をせし事あり。其節、夏のころにて、ことさら夜分なれば、浴衣に大小のみ、袴もきず、懐中ものもなく、城下へしのびて、遊びに出たるまゝにて、其場よりの驅落なれば、もとより何の用意もなく、無弐の朋友一人に此事をあかし、いかゞはせんと相談をいたされました。其朋友も無分別なわかき人なれば、何の思慮もなく、手紙一通したゝめ、其ところより、七八里ばかり隔てたる、さる山寺の和尚にしる人のあれば、此寺へ行き、此書状を出しなば、かくまひくれるであらう。國元の様子はあとより追々しらすべき間、まづかの山寺にかげを隠されよと、をしへました。こなたも無分別な若ざかり、何の用心もなく、心得たりと、かの書面な懐中して、ゆかたのまゝにて、城下をたちのきました。

さりとては、若い衆は無分別なものでござります。諺に、若いは能いが、しどがないと、親の案じる事も、ゆくさきのつまらぬ事も、道で難儀する事も、弁へのないは、夢のやうなものでござりまず。或人の道歌に、

わるいとはしりつゝわたるまゝの川、流れて淵に身をしづめけり。

まんざら、若い衆ぢやとて、氣のつかぬのではなけれども、一度おもひつくと、能うても、わるうても、一足あとへたちもどる事が出來ぬ。ソコデ、忽ち行きあたり、鼻打つてから後悔して、どんな事をした、これはつまらぬといふ内に、又つまらぬ事を思ひついて、我とわがてに、淵に身をしづめけりぢや。此咄の事ばかりぢやござりませぬ。兎角わかい御衆は、平生のより所が大事ぢや。猫はなまぐさきをこのめど、寺にかはれると、據なう精進する。蛇はのらくらと、ゆがむが持合せなれど、竹の筒に入れられると、據なう、眞直に成つてゐる。とかく身をよする處が大事ぢや。わかい衆は、このはなしを聞いて、能う腹の中へたち反つて、吟味して御らうじませ。どんな所へ入り込んで遊んでゐるぞ。中宿か。料理や歟。女藝者のふるびた所へ這入りこんでゐやせぬ歟。能う御せんさくをなされませ。

扨かの御侍は、つひに生れてから、親の懐を一日もはなれた事のないのに、心からとて、夜通し、に知らぬ道を、彼山寺へ尋れてゆく。是ほどのはらたきを、主人か親のためにしたら、大きな顔をなさるであらうに、どうやらかうやら、尋れあたつてゆきついた所が、山中の古寺、親のまへでさへかいめぬこした、滅多に御じぎし、彼の手紙を出だされると、和尚がうけとり、開いて見て、此手紙の様子では、まづ此方にしばらくござらずばなるまい。しかしながら、小個とてもなし、下男もつかはぬ貧僧でござれば、どうで、水も汲んでもらはにやならぬ。其外、ふきさうぢやら、又寺役のあるときは、穴も掘つてもらはにやならぬ。マアその心得で、そこらで足を洗うて、上つて茶粥でもくはつしやれと、目見にきた門番へいひつけるやうに、舌長にいはるゝ、かなしい事は三百石取りでも、國を立ちのいてみれば、つぶ三文、まうける術はしらず。路用とても一文もなし。さし詰め居さふらふのあたりまへなれば、口をしながら、ハイ〳〵というて、庭のすみで足をあらひ、和尚のくひ殘された、氷くさい茶がゆを一ばいすゝいつて、夜通しのつかれもやすまる事歟。猿つかふやうに追ひまはされ、仕なれもつけぬはき掃除、ナント氣の毒なものぢやござりませぬ歟。此とき、親の慈悲をおもひ出し、百まんだら後悔しても、あとへはかへらぬ。是ぢやによつて、足もとのあかいうちに、用心

なせにや成りませぬ。かう成つてからは、鶺桶へ、足をふみこんだやうなもので、國へもいかれず、寺にもゐられず、外に仕おぼえた事はなく、是につまらぬ〳〵と思ふうちに、秋もはや夜さむに成つて來る。ある日、和尚が朝から托鉢に出られたあとは、そこらはき仕まひ、夫からはしよさいはなし、時は、八月の中旬、國から著て來たゆかた一まい、汗づいたのと、よごれたので、どろ〳〵としてあろた、曠著にも、常著にも、タツタ一まい。ソロ〳〵寒さには向うて來る。せんかたなさに、客殿の椽にれころんで、猫のやうに丸う成つて、日向ぼこりしてゐながら、つくづくと思へば、おもふほど、とんとつまらぬ。國からは便もなし。和尚の顔つきも、此ごろは、めつきりわろし。寒そらには向うてくる。どうしたら能からう。イツソ腹切らう歟。首縊らう歟と、腹の中は、かき亂したやうに成つて、見るともみぬともなしに、籠のかたを見やれば、庄屋殿のうちが、目の下に見える。此寺は山の尾さきに建つた寺で、客殿の椽から見れば、一村は目の下、庄屋どのは、寺の椽から人の見てゐるもしらず、村方のあつめ銀を、數をあらため、つゝ、包み直して、金戸棚の引出しへ入れらるゝを、彼息子は屹と見とめると、ぞつとする程ほしう成つた。

こゝが、人の一大事の所ぢや。室鳩巣先生の歌に、

朝夕にたもつわが身はからごころも、たちねにうつせ道のすがたを。

心が、こゝろの有所にないと、何時無分別がおこらうやら、こはいものでござります。是ぢやにより、金銀の取りあつかひは、みだりに人に見せる物ではない。金銀は、人の身に、いたつて大切なものなれども、能く又人の身を害する媒となるものぢや。何の心もない人でも、是を見ると、何となう心が出來る。心なければ何ともない筈でござります。兎角おそろしいものは金銀、人に罪をつくらすのも金銀。されどもなければならず、あれば煩はし。さておもふやうにならぬは、浮世のありさまでござります。何分程ようせればならぬ事ぢや。

時にかの息子どのが、庄屋の金を一ト目見るより、身にしみ〴〵と欲しう成つて、どうしたら能からうと、椽はなにれこゝろびながら、胸算用、つく〴〵と足場を見るに、忍びこむには究竟の家だち、家内はわづかに五人ばかり、もし見とがむる者が有つたら、夫こそ百れんめ、蹴ちらかしてあの金をこしにつけ、幸ひ八月十五日、月は有あけ、立ちのくには手極の勝手ぢや。首尾ようついたらば、人しらず、盗み取つて、京歟、江戸か、大阪か。三ケの津の間へ出でて、どう成るとも、身のかた付は出來るであらう。所詮この山寺に、いつまでゐたとて、國へ歸られるわけでもなし。和尚のつらくせはわるし、身のまはりはうすし、イツソ今夜たち退くが上分別ぢやと、無分別のてつぺんを、かんがへ出した。

ナント恐ろしいは、人のこゝろでござります。心はそこなふ事をおもひつく。尤も、本心は善ばかりなれども、かやうなときに、うごくこゝろは、意識というて、得て惡を思ひ付くやつぢや。禪家の語に、爾が心を信ずる莫れ。爾が身の仇なり、と、いふてござります。成ほど、油斷のならぬ心ぢや。ある人の道歌に、

こゝろこそ心まよはすこゝろなれ、こゝろに心こゝろゆるすな

又大學の傳には、小人閒居不善を爲す、至らざる所なしと。兎角、からだを隙におくは、大きな毒ぢや。どうでのらのらとしてゐると、ろくな事は思ひつかぬ。此息子殿も目くら歟、イツソいそがしうて、走りあるいたら、こんな無分別はおこりはせぬ。大それた人のかれを盗んで、また人をころして、立退かうといふ分別が、どういふ所から出でましたぞ。チト考へて御らうじませ。

むかしから、家業を精出したものが、盗をしたためしはない。盗をするものは、皆家業がきらひぢや。御たがひに身のうへに立ちかへつて、商賣がすきか。きらいか。折々せんさくして見ぬと、腹の

中から、何時石川五右衛門や、熊坂長範が出まいものでは、ござりませぬ。心にこゝろゆるすな。

折角吟味が肝要でござります。

ソコデ、かの息子が、いよ〳〵今夜と一決して、足場をとくと考へおき、首尾がようてもわろうても、今夜のうちに、十里の道ははしらにやならぬ。今のうちにとつくりと寢ておいて、晩につかれぬ用心しようと、目をふさいで見ても、胸がもやつき寢入られぬ。どうぞ一ト寢入れたいものぢやと、今度は客殿の方へむかうて、こゝろりと寢返りなして、内をうそうそ見廻せば、座敷のすみに六枚屏風がたてゝある。色紙がたの小倉百首、見るとはなしに見てゐるうち、ふと目にかゝつたは、

あひみてのちの心にくらぶれば、むかしはものをおもはざりけり。

何とおもうた歟。かの息子が、此うたを二三返吟じて居るうち、俄にこゝろがかはつて來て、今夜の仕業をやめにする氣に成つたら、脇の下から冷汗が、びつたりと出たと申す事ぢや。

これは何で、にはかに善心に成つたのでござりませうぞ。此歌は、中納言敦忠のうたぢや。歌のこゝろは、おもふ人に、一度あひましてからに、逢はぬさきの心とくらべて見ますれば、逢はぬ先は、物おもひがなかつたのに、逢うてからのちは、物おもひがたえぬと、よんだ歌でござります。今この

息子どのも、此歌で、心のたて直しが出來たのは、なせなれば、今此寺に居れば、國からはたよりはなし。和尚の顏つきわるし。寒そらにはむかふ。小遣錢はなし。仕おぼえた商賣はなし。仕付けぬはき掃除はくるしい。是はつまらぬとおもうてねるがぴこんで、金を取る歟。モシ見咎められたら切殺すかがれぬ。たとへ京・大阪へ出て、立身出世をした所が、盜人の名はのがれぬ。けふはあらはれる歟。あすは召捕にくる歟と、人のさゝやく聲も、肝にこたへて、廣い天地の間に、五尺のからだの置き處がない樣になつたときの、つまらぬのと、今かうやつてねて、せぬさきのつまらぬ方が、遙にましぢや。盜んでからつまらぬときは、むかしはものをおもはざりけりと、其時後悔やくにたゝぬ。夫より此まゝじつと、辛抱してゐたら、其内には國から便もあらう。滅多にうろたへる所でないと氣が付いて、立もどりの出來ましたのは、ナント、ありがたい、歌の德ではござりませぬか。

一日に、一字まなべば、三百六十字。一字千金にあたると、高いものぢやうなれども、今この場所で見まするとと、中々高うはござりませぬ。若し此男が無筆であつたら、此立ちかへりは出來ませぬ。三

十一字がよめたおかげて、首が胴についてある。一字が千兩なら、三十一字で三萬千兩ぢや。ナント
あなたがた、三萬千兩の金を進上するがい、首をおくれなされと申したら、たとへ千萬兩の金にても、
替へるいのちは、ないとおつしやらう。して見れば一字千金、たかいものではございませぬ。どうぞ
ちいさい時から、手習よみものを精を御出しなされませ。此やうな利益がございます。
是から、彼息子どのが、年月をじつと辛抱してねらるゝうち、國方から、親類が來て、寺へも厚く
禮をいひ、始て山寺の苦患をのがれました。しかしながら、一旦出奔したものなれば、國元へは歸ら
れず、そのまゝ町人に成つて、家業を精出されたところが運よう商賣も繁昌し、れき〳〵の商人に
成つて、能いかげんな親仁に成つた時分、わかい人を見ると、昔のざんげ咄に、かならず此はなしが
出て、若いときには、どのやうな不了簡が出ようもしれぬ。もし、あひみての歌がなかつたくらゐな
ら、どのやうな、事にならうやら、今はなすもおそろしいと、毎度ざんげばなしした、惡意の人が承は
りましたが、又私へはなされました。あまり有りがたい事ゆゑ、今ばん御はなし申します。
此息子どのは、能う立ちかへりが出來たものでござります。百人に五十人は、この立ちかへりが出
來にくい。我身が可愛〳〵とおもふより、いつしか心を押しゆがめて、たわいもないものに成りま

する。目が可愛いによつて、面白いものが見たし。耳が可愛いによつて、三味せん・太鼓の音が聞き
たし。鼻が可愛いによつて、掛香や、松金油の匂がかぎたし。舌が可愛いによつて、うなぎ・すつ
ぽん。茶椀むしがくひたし。からだ中が可愛いによつて、商賣が仕ともない。ソコデ次第に貧乏し
て、三疊敷にちんからり、百文が米なかひかれぬとき、こんな苦しい世帶をしようより、例へ死ぬと
も一トおごり、奢つて死んだら、一生のおもひ出、たれが百年いきるもの歟。あした死ぬるも來年死
ぬるも、おもへば同じ短い命ぢや。疊のうへで往生するも、河原でのたれ死ぬるも、しぬる味にかは
りはない。さらば今夜、どこでなりと盜にはいりて、金二三百兩ふところへれぢこみ、おもう存分お
ごりちらかし、首とられて仕舞ふ方が、埒あきが早うて樂ぢや。こんな貧乏を長うするは、埒があか
いで、氣色がわるいと、無分別な、石川五右衞門・熊坂の長範が、得てあるものでござります。首尾
よう盜みおほせる事歟。はした金をぬすまうとして、おもひの外に引き〳〵られ、獄屋のうちへ打ちこ
まれて、握めしに香のものかぢるとき氣がついて、どんな事をしたゝやはり元の三疊敷ちんからり
に百が米、貧乏でもわが所帶ぢや。斯うやつてゐれば、日の目をがむ事はならず。近所あるきもす
る事ならず。我がからだを我れながら、自由にすることのならぬとは、何の因果ぢや。どう見ても、

うちの貧乏が有りがたう慾しうなる。

逢見ての後の心にくらぶれば、むかしはものをおもはざりけり。

扨御役人の前へ引出だされ、水責・火せめのくるしみを受くるときは、はじめの獄屋の中がこひしうなり、早う貴苦を助かつて、獄屋へかへりて、休みたいと、むかしはものを思はざりけり。やはりあとが慾しうなる。そのとがにんが、罪きはまつて、首の座へ直るとき、どこが慾しいぞ。たとへ水責・火責はおろか、骨をひしがれ、肉をさかれても、いのちさへある事なら、ヤハリもとの貴苦が慾しい。昔ある人の發句に

　手にとるな、たゞ野におけよげんげ花。

兎角、今日の有りがたい事をわすれて、外をれがふ所から、思ひの外に心がゆがむ。さらば、人は苦しみに生れたもの歟といへば、安樂は人のうまれつき、先師のいろは歌に、

　らくがしたくば心をしりやれ、らくは心のうまれつき。

此樂な、心をもちながら、くろしんでうろたへるを、たとへのはなしがござります。ある獨り者が、

よう寢てゐるとき、隣が火事ぢや、近所は、やれそれと騷ぎたつ。朋友が馬提灯さげて見舞ひに來た所が、門の戸がしまつてある。南無三八兵衛、のみ過ごして寢てゐると見える。燒ころしてはならぬと、戸を蹴やぶつて內へはいる。その物音に、八兵衛、ふと目をさまし、うろたへて赤裸で庭からとんで出る。友だちが、持つた提灯、鼻のさきへつきつけ、隣が火事ぢや。見廻に來た。八兵衛よろこび、夫は能う來てくれた。其提灯かして下さりたり。うらへ出たり。又表へかけ出したり。しきりにうろたへさわいでゐる。友達が合點がゆかず、八兵衛なにを捜すのぢや。八兵衛ゐからわらぬ顏で、行燈がきえてあるゆゑ、火打箱さがしてゐるといはれた。これが銘々共に、よう似たはなしぢや。結構な提灯のあかりを、己が手にもちながら、火打箱を、さがしてゐるは、やはり闇がりの心もちぢや。明らかな本心を御たがひに持つてうまれて、樂はどの樣にも出來るものを、苦しんで一生くらすは、此八郎兵衛の御連中ぢや。このくらゐ心がら物の大小・輕重が、わからぬ樣になり、大切の心のゆがみは、捨ておいて、指のかゝんだ苦にやんで、療治する。ソコデ孟子も御しかりなされて、此を之類を知らずと、仰せられました。猶ほ明ばん御はなしを申しませう。（下座）

鳩翁道話 參の上

孟子の曰く拱把の桐梓。人、荷も之を生ぜんと欲すれば、皆之を養ふ所以の者を知る。身に至りては之を養ふ所以の者を知らず。豈身を愛する、桐梓に若かざらんや。思はざるの甚しきなり。扨て此章ば、前晩のつゞきにて、孟子、またたとへをまうけて、御しめしなされたのでござります。

拱とは、左右の指をもつて、圍みまはしたるを拱といふ。把とは、雙手握りを把と申します。桐とは きりの木、梓とはあづさの木でござります。畢竟、拱把の桐梓とは、わづか一握りや、二握りのほそい小さい植木でも、これをそだてやうとそんじますれば、かならずこれに培なし、養ひをなしてそだつる事を、しらぬ人はござりませぬ。故に人荷も之を生ぜんと欲すれば皆之を養ふ所以の者を知ると仰せられました。

サアこゝが、入用の所でござります。植木をそだつる事は、養ひがなければならぬといふ事を、知て居る人が、己が身を、やしなふことをしりませぬ。是はどうしたものでござりませうぞ。養ふことをしられねばこそ、明けてもくれても、思ひつく事は錢がほしい。金がほしい。よいものが著たい。うまいものがくひたいと、得手・勝手な事ばかり思ひ付いて、我身の倒るゝことも、我身の害になる事もかまはず、無分別ばかり。是即ち、うゑ木をそだつる事を知つて、我身をやしなふ事をしらぬ。故に、身に至つては養ふ所以の者を知らずと仰せられました。畢竟わが身を、可愛がる事を、しつてゐるはナント無分別ではない歟と、扨こそ豈に身を愛する桐梓に若かざらんや。

思はざるの甚だしきなりと、御叱りなされたのでござります。

さてこゝに、身を養ふと、申してあれども、強ち身の事ばかりではござりませぬ。即ち、心のやしなひぢや。身心一雙と申して、心をやしなふ事を、しられば、身をやしなふことが出來ませぬ。心をすてゝおいて、身ばかり養はうとするは、所謂、身勝手と申す、私心・私欲のかたまりに成りまする。その私心・私欲で、身を養はうと、いたしますると、かへつて身をそこなひまする。こゝに、扨の境がいたつて六かしい所ぢや。心を捨てては、何もする事はござりませぬ。心有つたら、みな身最屓・身勝手でござります。古歌に、

つく〴〵とおもへばかなしいづまでか、身につかはるゝ心なるらむ。

なるほど心が主人となつて、身を家來としてつかふ時は、皆道にかなひまする。身を主人として、心をつかひまするは、心をすつると申すものぢや。心が身につかはれまするといつても道にはづれて、みな身贔屓・身勝手になりまする。此道理は、能う辨へてゐながら、ヤツパリ身贔屓・身勝手がやめられず。身に心のつかはれてゐるは、口をしいと詠んだうたでござります。

いかさま、身びいき・身勝手をする人の、はらわたの開帳に、能う似た咄がござります。至極、尾籠なはなしなれども、れむりさましに聞いて貰はにやならぬ。これは、都のはなしでござりまするが、花のころに成りまするとて、あらし山・御室の櫻がりとて、京中の貴賤、皆花見にまゐります。其中には、大家の奥さま、あるひは娘御、または遊女町の藝子・女郎、衣裝に花をかざり、こゝを曠と見物にまゐりまする事ぢや。嵐山までは、京をはなれて一里半ばかり、何んぼ美しうかざりたてた娘御でも、出もの、はれもの、所きらはずといふ、たとへの通り、途中で便所へ行きたい事がある。流石に野中で尻もまくられず、通り筋の見ぐるしい百姓家へかけこんで、御無心ながら、てうづ場を、ちよつと御かし下されませと、赤い顔して斷りいひ、裏口へ出て見た所が、うすぎたない、狐だれの雪隱、これには京の女中がだが、毎年大きに困る事でござります。

成ほど人間かしこしと申して、ある通り筋の小百姓が、此事を考へ出して、かし雪隱といふ事を始めました。其趣向は、門口に雪隱をたて、側に手水鉢をすゑ、墨ぐろに、かし雪隱、一度三文と、かき付けた、看板を懸けました。尤も、これは甚だおもしろい趣向で、至極重寶な事ゆゑ、花のころは、けしからず流行ります。勿論これは兩徳の趣向で、女中がたは、赤いかほして口たれて、きたないめをせいでも、三文で挨拶なしに、我家の雪隱へはいるやうな顔つきして、用がといのひまです。又、雪隱のかし元は、三文のかし代をとるばかりぢやない。あとへ糞がのこりますゆゑ、これも至極勝手がよろしい。全くかしざしきから、おもひ付いた趣向とみえまして、此ごろめつきり身代を能ういたしました。或人の道歌に、

よい中も近ごろとく成りにけり、となりに藏をたてしよりのち。

とかく人の銀もうけが、羨しうて、又れたましうて、かちおとしてなりとも、己が田へ水の引きたい例の身贔屓・身勝手の強欲ものが、其村方にござりまして、或時女房をよんで、相談するには、八兵衛が、近ごろ、かし雪隱で、めつきり錢儲けをしをる。おれも此春は、かし雪隱をこしらえて、八兵衛の銀もうけを、たゝきおとしてやらうと思ふが、どうであらうぞ。女房中々合點せず。夫は、

こなたわるい分別ぢや。たとへ、こちのかし雪隱を、こしらえた所が、八兵衛殿は仕にせも古う、得意もたんとあるであらう。こちはまた新店なり。はやらぬときは、貧乏の上ぬり。それはやめにさつしやるが、能からうといへば、イヤ〳〵、それはわれが、何もしらぬによつてぢや。此たび、おれがおもひ付いた雪隱は、八兵衛のやうな、きたない雪隱ではない。當時、京の町は、茶の湯がはやると聞いたゆゑ、茶かたの雪隱をたてるつもりぢや。先づ四本柱は、よしの丸太ではきたない。北山の入節をつかひ、天井は蒲天井にして、蛭釘をうつて、釣釜のくさりをぶらさげて、きばり繩のかはりに用ゐるのぢや。ナントきめう歟。窓は下地窓。ふみ板はけや木のじよりんもく。きん隱しは、さつま杉。穴のぐるりは、蠟色ぶち。壁は中ぬりの切かへし。戸は檜木の長へぎ。白竹おさへ。屋根は杉皮、青竹おさへのわらび繩、大和葺にこしらへ、沓ぬぎはくらま石。かたはらに、青竹まじりの四ツ目垣、橋杭の手水鉢に、かゝりの松は、ひよろ〳〵とした、女松をあしらひ、千家でも、遠州でも、有樂でも、逸見でも、何でもかでも、取りこめるこしらへ。おそらくは、こいつを出したら、八兵衛の雪隱は、へたばるにちがひがないと、自慢顔にいひならべると、夫れは奇麗でよからうが、かし代は、なんぼ取るのぢや。しれた事、一度が八文よ。イヤ〳〵それはわるい分別。茶方でも、水かたで

も、どちらのみち、きたない所、三文でも安い方が、ヤツパリはやりさうな事ぢやに、かならずそれは、やめにして下されといへば、何をぬかすやら、女さかしうて牛うられぬと、細工はりう〳〵、仕上げを見をれと、かの亭主が、無理に工面して、とう〳〵此春、間にあふ樣に、立派な雪隱をこしらへました。

勿論かんばんは、醫者どの歟。坊さまをたのんだと見えて、唐樣で、かし雪隱、一度八文と書いて出した。ようした物ぢや。錢がたかいと、なんぼ奇麗でも借手がない。猫の子ものぞいて見をらぬ。

ソコデ女房が、ぼやき出し、これぢやによつて、止めさつしやれといふのに、仰山な錢かれいれて、此しまひはどうするのぢやと、疊たゝいてわめけば、亭主は落ち著いたかほつきして、何もやかましくいふ事はない。明日はおれが、得意まはりをして來ると、借手は澤山出來る。われもはやう起きて、行李飯をつめておけ。一ぺんかけ廻つてくると、門前市をなす事、うたがひなしと、太平樂をいひちらして、その夜は寢る。

女房は、がてんがゆかれど、朝はやく起き、めしを焚き、行李めしをつめると、親父はいつもより、朝寢して、四ツ時分に目をさまし、茶づけくふと身ごしらへ、ばつち尻からげ、かのかうりめし

を首筋へくゝり付け、小道ぜにを懐へいれ、出がけに、コリヤかゝ、得意まはりしてくると、駄し、い借人があらう、モシ糞がつかへたら中入札をかけ、隣の次郎兵衛をたのんで、一荷も、二荷も取つてもらへと、いひすてゝ出てゆく。

ます〳〵女房は、不思議がはれず、どうして得意まはりが出來るぞ、京の町を、何村の何兵衛が方で、かし雪隱、かし雪隱と、菜や大根をうるやうに、ふれあるくの歟しらぬと、しあんしてゐる所へ、錢筒へ八文、錢をなげこんで、一人雪隱にはいつた人がある。此人が出ると、入りかはり〳〵、引きもきらず借人が出てくる。嗚はぴつくりし、かし代を取りはづすまいと、目の玉をきよろつかして、雪隱のわきに張番をしてゐると、後には、段々糞がつかへる。ソコデ中入札をかけて、一荷こえなく、み上ぐる。また追々にかり人がある。とう〳〵日のくれまでに、雪隱のかし代八貫文とりあげ、糞を五荷くみ出した。

ソコデかゝがひとり歎び、何さまこちの親仁は、文殊菩薩の再來か。さるにても得意まはりは、どうして仕られた事ぢややら、此やうに流行るといふは、ありがたい事ではあると、酒をかうて待つところへ、亭主が、のろりと戻つて來て、どうぢや、かり人は有つたかといふ。あつただんか、かし代が八貫、糞が五荷。こなたはどうして、得意廻りをさつしやつた。京の町を一軒〳〵、ところ書を持つて、賴みにはいらしやつたかと問へば、

亭主は、何をぬかしをるやら、おれが得意まはりといふは、今朝内を出て、直に三文出して、八兵衛が雪隱へはいり、内から掛がねをかけ、一日、隣の雪隱をふさげたのぢや。人が戸をあけかゝると内からエヘンと咳ばらひすると、はづんではあるし、おれが所の雪隱へかけ込みをるのぢや。アアけふは仰山な、せきばらひして、聲がかれた。此永い日を、一日つくばうてゐたれば、持病の痞氣がおこつたと、腰をなでていはれた。

ナント〳〵おもしろい、はなしでござりませうが。これがこれ、小人・凡夫のはらわたの開帳ぢや。已が金銀の儲けたいも、人の金銀をもうけたいも、同じ事なれば、すこしはおもひやりも、ありさうなものなれども、我と人とは、別々のものぢやと覺えて、我勝手さへよければ、人はこけても、倒れても、かまはぬこそ。こゝを大事と、わが身勝手をいたしまするは、皆わが身を養はふとおもふのぢや。是が、大まちがひと申すもので、人とわれとはおろか、萬物と我と一體、この道理がしれぬによつて、人・我の隔をなし、めぐり〳〵て、我身の害になる事をしらぬ、ひどいものぢや。我身勝手をおもひ付